
狼浪奇譚

ただ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼狼奇譚

【Nコード】

N8033W

【作者名】

ただ

【あらすじ】

進路に悩む高校三年生の青年。何時も通り道場へ行き、何時も通りしごかれる筈だった彼の日常。それは突然崩れ去り、彼の日常は大幅にずれることになる。気付いた先は森林の中、知った先は暗闇の中。青年は狼と出会い、この世界で懸命に生きていく。………よ
うな気がする。

序章 1 / 進路ねえ

「進路ねえ」

渡された進路希望の用紙を見ながら、ふうと溜息を吐いた。

高校三年生になり幾月が経ち、GW前日の今日渡されたものだ。GW明けに提出しろと言われたが、困った事に希望が全く思い浮かばない。

とりあえず、道場に行くついでに静流にでも相談すつかねえ。

そもそも、今の高校に決定したのも偏に兄貴から逃げたくなかったの一点につきた。

何しろ一つ違いの俺の兄貴はそりやもう完璧。欠点が無い事が欠点と呼ばれる位には完璧である。ルックス良し、頭脳良し、運動神経良し、人当たりも良くカリスマとも取れるリーダーシップもある。

伊達に高校サッカー日本一の栄光を我が校にもたらした訳じゃない。そんな超人兄貴と一歳違いで比較されてきた俺は、反骨心から同じ学校を選んだ。まあ、結果はズタぼろでしたけど。ともかく、そんな兄貴は今やプロサッカー選手として遠い異国の地へ行き、俺のちっぽけな張り合いはここまで。終着点ですよと。

「まあ、いいけどね」

よくないけど。兄貴が居ない今、適当な大学に行くのもそれはそれで嫌だし。就職しようにも、この就職難に進学校のうちに募集はあのかという状態。なら、いつそのこと唯一の取り柄である格闘術で、ミドル級のプロでも目指せというのか。……………何かしつくり来ないな。モラトリアムに悩んでいる暇はもうあまりないのだが、本当どうすつかねえ。

そんな風に、あれこれ考えている内に道場に着いた。眼前には見慣れた「富田六合流」の古ぼけた看板。どれくらい古いかというと、文字がほぼ消えて読めない位にはぼろい。正直、知らなければ、ただの古臭くちよつと広い日本家屋にしか見えやしない。というか、門下生は俺一人だし。それこそ今更だ。

「静流ー。来たぞー」

勝手知つたるなんとやら、貰つてる合鍵で門を開け邸内に入る。声を出しても返つて来ないという事は出かけているのか。俺の師匠である静流は名前からすると女性っぽい、れっきとした男である。何でも、静流の様に穏やかという願いを込めた名前らしいが、残念。こんな風に弟子の修行時間をすっぱかす適当な男に育ちました。

ともかく、何時も通り道着に着替え、棚に置いてある鎧通しを後ろ帯に差す。この鎧通しは30？未満の短刀の一種で、何でも組み打ちになった際に、相手の鎧の隙間から刺突する為の武器らしい。なんで、他の刀類に比べやたらと刀身が厚く全体的にごつい。一応、富田六合流は徒手の流派だが、小太刀術の流を組んでいる為に鎧通しをこうして装着するのが決まりだ。困った事に真剣だから持ち歩けないけどね！

ともかく、お気に入りの場所へ移動する。その際に学生鞆も持つて行く。進路希望もそうだが、こちらら学生。テストは怖いものである。さて、俺のお気に入りの場所というのは、静流邸の庭にある一本の桜の木の根元だ。今はもう葉桜に近いが、根元から空を見上げるのは最高に気持ちいい。静流にのされた後は、よくここで目を覚ました。桜から覗く青空が何時も俺を慰めてくれたのを覚えている。

多分今日もそうなるだろう。

俺のベストポジションであり、スタート地点でゴール地点でもある。正にマイポジションというのに相応しい聖域。腕時計を見ると時刻は13時00分丁度。春眠曉を覚えずという言葉もあるし、流石に寝はしないがああ鬼こと静流が来るまで、このマイポジションでゆっくりしていよう。静流が来たら、そんな事言ってもらえないのだから。

ふと、意識が浮上する。

どうも、気付かぬ内に寝ていたらしい。流石はベストポジションその催眠作用はおそろしいものがある。しかし、静流が帰って来る前で本当に良かった。じゃなかったら、今頃奇襲を受けているに違いない。そんな風に寝ばけ眼をしばしていると、猛烈な違和感に襲われた。眼前に広がる光景がおかしいのだ。

俺は確かに静流邸の庭で寝ていた筈。なのに、何で、目の前には森林が広がっているのか。眼前には見える限りの木々が乱立し、とてもじゃないが日本家屋の庭先には見えない。というか、見えたらそれはもはや病氣確定だろう。だから、これは異常事態。おかしいとしか言いようがない。間違いとしかいいようがない。というか、夢というほかない。

……なんて、言うと思ったか！！

「静流の馬鹿野郎」

困ったことに、既に静流から奇襲をくらっていたようである。知らぬ間に気絶させられ、気付いたら見知らぬ土地でおはようというのは左程驚く事では無い。実際、今までに何回か静流の手によって行われている。最初はそれこそ恥ずかしい位に泣き喚いたが、段々慣

れた。と、というかその黒歴史な姿は盗撮され、後でその無様な姿を無理やり見せられるのだ。そりゃあ、慣れる。

だから、これは何時もの少しずれた日常の延長線上。変な師匠を持った弟子の苦勞話。今回もそんなところだろう。逆に驚けない。と言う訳で、とりあえず現状確認して、とつとと抜け出そうと思う。

けれど、俺は全く気付いていなかった。何時だって当たり前だった現実が、突然、当然の様に消え去るという事を。自分が知ってる世界なんて容易く壊れるという事を。そんな、至極当たり前の事を忘れていた。そう、俺は全く気付いていなかったんだ。たった今、自分の世界が余りにも大幅にずれた事に、それは修正不可能と言える位大きなずれだと、気付けなかった。

序章 2 / 随分遠い所にきたもんだ。 ってか

現状確認実施中。しばらくお待ち下さい。

装備

- ・ 富田六合流道着（スポーツインナー着込み済み）
- ・ 鎧通し
- ・ アナログ式腕時計
- ・ トレッキングシューズ
- アイテム
- ・ リュックサックタイプの鞆
- ・ 財布
- ・ 携帯電話
- ・ ライター
- ・ 筆記用具教科書一式
- ・ 万能ナイフ
- ・ おにぎり（間食用） x 3
- ・ 1000mmのスポーツドリנק

以上

現在俺が装備している服及び、アイテム一覧である。

ちなみに、富田六合流道着の上着は、柔道着に似ているが柔道着程厚くは無く、それなりに丈夫な作りもので、下は紺色の野袴。野袴とは大雑把に言えば袴の裾を絞ったモノだ。その中にインナーを着込んでいる。

練習するのに腕時計をしたままなのは基本的に静流の方針。何でも常在戦場の精神らしい。ちなみに、この教えを習ってから今まで全く役に立っておりません。基本的に治安国家の日本でそんなことしたり、刃物を持ち歩いたら犯罪者だからね。まあ、短刀とはいえ真

剣を振るったり、その代わりに万能ナイフを持ち歩いている時点で俺も十分に怪しいが。貰いもんだから無下にするのもなあ。

ともかく、微妙である。何が微妙って、物が揃いすぎてるのが微妙。静流の事だから、財布、携帯、食料、後鞆位は残さないと思うのだが。GW突入したから、容赦なく未開の山にでも放り込んだのだろうか。有り得ないと言えないのが実に辛い。両親も基本放任主義だからなあ。まあ、いいや。とりあえず、

「時間とは」

左手に嵌めているタフで有名なメイドインジャパン時計を見る。時刻は13時14分を指していた。ん。13時14分？もう一度見る。13時15分。うん？？なんで、時間が余り経ってないの。あの桜の木で見た時は確か13時丁度だった筈。あれから15分も経って無いなんてある訳が無い。これは、まさかとは思うが、丸々24時間後というオチだろうか。だが、時計の日付は今日のままだ。仕方なしに携帯を取り出す。折り畳み式の携帯はぱかっと開かれると、時計と同じ日付、時刻を示していた。

うん、ここまでは想定内。だが想定外が一つあった。携帯は圏外表示だった。最近はある程度の山の中でさえ圏外にはならない筈だが普通に圏外。静流の奴はずいぶんと人を山奥にぶち込んでくれたらしい。成る程、携帯を置いていく訳である。

どくん、と心臓が不自然に跳ねた。それを無視し携帯をしまい時計を操作する。俺の時計は電波時計だから日本全国どこでも電波を拾えれば受信できる筈。時計の指針が動き、ある位置で止まる。電波応答出来ず。つまり受信できず正確な時間が測れない。やばいか。心臓が早まってるのが解る。しょうがない。

「がんばれ、負けんな、力の限り生きてやれ」

人生の師匠たる某サラリーマンの歌を吟き、思考を整理する。

先ず、俺は4月28日13時00分に静流邸に居た。んで、気付いたら森の中。起きた時、現時点の時刻は4月28日13時15分。当然だが、僅か15分そこで町から見知らぬ森まで移動出来る訳が無い。だから、今俺が持っている時計類はおかしいという話になる。OK。困ったぞ。どうするか。

とりあえず、俺に考えられたのは、静流が時計も携帯も手動でいじったという線だけだ。他に考えつかんし、これでいこう。太陽の位置からしてそう大幅に時間はずれてない筈だから、時計で方角は解る。後は水飲み場に辿り着けば多分静流のテストは合格。晴れてこの状態から帰還できる筈だ。GWは一週間という長期間だから何とも読めん。もしかすると、到着ではなく、一週間生き延びればという事かもしれん。……まあいいや。深く考えている暇は無い。

ともかくにも、現在いる場所がどんな所か位解っておきたい。平地だから山ではないと思うが、しょうもないか。立ち上がり、この辺りで一番高い木に登る事に決めた。そいつのサイズは胴回り1m程で高さは20m程。杉に似ているが松みたいなごつごつした感じが昇り易そうだ。ポイントは枝が出ていない数メートルをどう上るかだろう。やれやれ、手袋ないんだかなあ。

腰に差してある鎧通しを外し、鞆からノートとシャーペン、万能ナイフを取り出す。ノートとシャーペンを胸に、万能ナイフはラージブレードを出して帯に差した。

「いきますか」

ぺつと掌に唾をつけ、体全体を押し当てるように木の幹に当てた。次いで右足の甲を幹に押し当て、左足は幹に巻きつける。後は必死にじりじり登るだけだ。ややあつて、途中何度か危ない所があつたが、何とか最上部へ到着した。太い枝の上に立ち、その開けた視線の先にあつたのは、バカげた位に広い木々の群れだった。

「嘘だろう」

もはや、笑う事もできない。360度どの方向を見ても、人間の存在が感じられない。地平線の向こうまで続いているだろう緑の絨毯。今立っている木よりも遥かに背がある高木。それは人間を寄せ付けない自然の結界だった。現実感すらない人知を超えた古代の森。そんな壮大極まる風景を目にして、ちつぽけな一人の人間に出来る事は、恐怖しかなかった。

立っている場所すら忘れ、膝ががくがくと震える。嘔吐感さえ湧き上がり、片手で口を必死に塞いだ。死ぬかもしれない。本当に死ぬかもしれない。今までのやってきた静流の修行なんてほんのお遊びだ。確かに、俺はサバイバル知識は教えてもらった。一晩や二晩なら生き残れる自信はある。けど、こんな所で死なない自信はこれっぽっちもない。

「静流の馬鹿野郎」

それは泣き言だった。口は震え、目には涙。ここは何処で。どうやってここまで等。今まであつた疑問が全て消えていく。これからが怖くてたまらなかった。

それでも、死ぬわけにはいかない。あの時あいつに生かされた命を

不意にしてはいけない。いつだって、脳裏に浮かぶのはあいつの姿。絶対敵わない相手に向かっていった。バカ野郎。そんなあいつに格好悪い所を見せてたまるか。だから歌え。いつものあの歌を。

「がんばれ、負けんな、力の限り生きてやれ」

聞いた時にすとんと心の隅に残った歌。元は何であれ、俺の至言なのは変わらない。だから、膝の震えは止まり、嘔吐缶も多少は納まった。泣いても喚いても現実是不変ならない。だったら、行動するしかないでしょうが。

「絶対に、静流は殴る」

眼を拭き、眼前を睨む。何はともあれ、水を補給出来る所を探す。といっても、地質学等知らない俺が解るのは、木々がぼっかり空いた空間を探す事だけだ。視力が良くて本当に助かった。冗談抜きで命に係わる事なので、必死に目をこらす。うんうんと唸りながら地形を眺め、ようやく湖っぽい空間を発見した。木々が無い事と、ときおり反射光が見えることから間違い無い筈。距離としてはおそらく30?前後だろう。素人判断だから解らんが。後は時計と太陽で方角を測りノートにマッピングするだけだ。

現状解る限り詳しくマッピングしたそれをまた胸に居れ、今度は降りる準備をする。唸っていた時間とマッピングで筋肉疲労は取れているが、登りより降りる方が辛いし危険だ。ここで落ちたら本気で洒落にならん気をつけて行こう。

何とか無事に降りれた。手の平はぼろぼろになっているが、筋肉はそこまで疲労していない。

いざという時の為の万能ナイフも、結局使わずじまいで鞆に戻した。

ここまで筋肉疲労がないのは不思議でもある。気付かない内にアドレナリンでも出たのかもしれない。まあ、嬉しい誤算だ。これなら直ぐに出発してもいいだろう。時刻は15時35分。日没まで後三時間位か、日が完全に落ちる前に歩けるだけ歩こう。リュックサック型の鞆を背負い。方角を確かめて未開の地へ乗り出した。

時刻は19時20分になり完全に日が暮れた。予想より結構進んだと思う。何故か体が異様に動き、疲れも少ない。おかげで食料の減りも少なく、目的地にも意外と早く着けるかもしれない。ふふふ、俺の火事場の馬鹿力も馬鹿に出来んな。……自分で言っただけで恥ずかしいな。無駄な思考を止め、少しは真面目にしよう。

さて、俺の時計はやはり若干ずれていたのか、日没が遅い気がする。まあ早いよりは良いことだ。時間のずれによる方角のずれも結局正しい地図が無い以上問題ないし。結局は、あの時点で南だろう方角を出せただけで十分。俺の時計がいきなり時間をずらしたら本気でやばいが、そこはメイドインジャパンを信じる他ない。ともかく、夜になった以上ここでビバークする他ない。

辺りは嫌になる位に真っ暗で。満点の星も木々の隙間からしか覗けない。

近くの巨木に背を預け、鞆から携帯を取り出す。僅かな希望をのせ電源を入れた。しばらくして、携帯の画面に映ったのは相変らずの圏外表示。もはや、溜息も出ない。何にせよ、ここまで獣や蜂等に遭遇しなかったのは運がいい。途中やたらデカい鳥とか狐っぽいのはいたがそれだけだ。明日もすんなりいけばいいが。今日の三時間半だけで10?程度は稼げた筈だ。順調にいけば、明日の夕方には湖に着ける筈。それまで俺の食料が持てばいいが。水は残すところあと四分の三。おにぎりは二個。切れる前に何としても、水場にあ

りつきたいものだ。しかし、

「随分遠い所にきたもんだ。っつか」

巨木を背に座り、上空を見上げる。夜空は星に覆われ、都会じゃ決して見る事の出来ない明るさだ。今じゃ、星座を見つける事にも苦勞するが、昔の人があれだけ星に願いをかけるのもこれを見れば無理はない。それ程の感動。月だって綺麗な満月仕様。ぜひとも月見酒をしたいものだ。帰ったら絶対に静流に奢らせてやる。と、そこまで考え、ふとした疑問が起こった。

何で、満月なんだ。

昨日俺が夜に見た月は三日月。一日や二日程度で満月になる訳が無い。今更だが、夜空に俺の知っている星座が一つも無い。今は春。北斗七星が一番解り易い季節なのにそれも無い。慌てて立ち上げり、空の開けた場所に移動する。

そこで、俺は見てはいけない物を見た。

それは、今まで意識的、無意識的に考え無い様にしてきた事実を、これ以上ない位に明らかにする異物。これで、今まで気付かない振りをしてきた疑問が全て解ける。明らかにおかしい移動時間。個人で運ぶには不可能だろう深すぎる自然。春なのに遅い日没時間。見当たらない星座。それら全ての疑問が氷解した。だって、こんなの見た以上諦める他ない。なんで、なんで、

「月が二つあるんだよ」

有り得ない。有り得ない。有り得ない。

月は一つ。それは人類史以降変わらない万国共通の事柄だろうが。それが何で二つもあんだよ！目を閉じる、開けて夜空を見上げる。

離れた場所に月は変わらず二つあった。

「ふざけんなよ！」

叫んだ。叫ぶしかなかった。これは、今の状況は。静流の悪フザケで日常の延長線だろうが。それが、何でこんな意味の解らない事態になってるんだ。夢か。これは夢か。だが、そんな訳ないと今までの数時間が言っている。あの木の上の衝撃も、ここまで歩いた疲労も、それら全てがリアルだった。だから、これだけが空想と呼べる訳無い。月が二つあるのも本当。俺の時計も正常だ。ただ、この事態を引き起こしたのが静流という事だけが間違い。俺が誰も気付かぬ内に移動してただけ。すなわち、異世界へと。

「ふざんけんじゃねえよ」

確かに俺は普通とは違う生活をしてきた。

キャンプとかいって山でサバイバルをした事もある。真剣を使って格闘の練習もしたさ。けど、その程度なんだよ。本職の漁師程山に詳しくない。プロの格闘家にだって勝てないだろう。あくまで俺は高校生なんだ。それがなんでこんな馬鹿みたいな事になってんだよ。どうしろってんだよ。

「死にたくねえよ」

死にたくねえ。

俺はまだやりたい事が一杯あるんだ。親父と酒も飲みたいし、母さんの手料理だつて食いたい。それに、兄貴の背中に触れてもいいねえ。師匠の静流に勝ってないし、少ないけど友達だっているんだ。何より、ここで死んだらあいつに申し訳がない。まだまだ、やりたい事がいっぱいあるんだよ。気付いたら涙がぼろぼろ零れていた。嗚咽

も混じり子供の様な有様だ。それでも歌が聞こえる。あの歌だ。

「がんばれ。負けんな。力の限り生きてやれ」

震えながらもそれは歌だった。いつでも俺を奮い立たせる魔法の言葉。

そうだ。頑張るしかない。敗北感に魔されている場合でもねえ。俺は力の限り生きるしかないんだから。だから歌おう。俺の気が済むまで。何度でも何度でも。

森林の中で1／……食うか？

あれから1ヶ月経った。

あの日、この世界に来てから別段変わった事は何も起きていない。

今日も今日とて異世界で絶賛サバイバル中である。

やー！！

今居る場所は、湖から徒歩20分位の洞窟前。

湖から少し離れると山岳地帯っぽくなっていて、至るところに小さい崖がある。この洞窟もその崖にある一つだ。といっても、この洞窟はそこまで大きくは無く、洞窟というよりは洞穴と言ったほうが正しい。これが今の俺の拠点だ。

集めた材木にライターで火をつけ今日の戦果を火にくべる。

今日の食事は鮎っぽい魚が三匹。最初はワイルドに素材の味のみだったが、現在は何と鮎の塩焼きにレベルアップしている。崖を探しに探して幸運からゲットした岩塩のお蔭で、こいつらは何と鮎の塩焼きになるのである。

岩塩を発見できず、塩が無い状態は辛かった。保存もきかんは、味に飽きるは、調味料が揃った現代日本人には拷問に近かったぜ。本当、昔は塩が高級品というのも実に頷ける話である。ちなみに岩塩は手製の石鍋もどきで、ぐつぐつ煮込んで粗塩にしています。塩最高！！

ともかく、この一か月地道なマーキングの成果の果てに漸くここ周辺が俺の縄張りと言達に知らせる事が出来た。ここまで来るのに苦労したぜ。ふと、この一か月が走馬灯の様に脳裏に走る。そう、結局あの後俺は湖に到着し事無きを得た。

その後、この世界が本当に異世界だという事をまざまざと認識した。何せ湖にリアルネッシーがいるのだ。奴が湖面から悠々と顔を出した時は思わず携帯のカメラに収めた程だ。やっぱり男はどこまで行ってもバカなのだろう。思いつきりはしゃいじゃったからね。

それはさておき、他にも明らかに地球産とは異なる進化を遂げた動物達に会った。

何故草食動物のくせに矢鱈ごつい一本角がある兎がいるんだよとか。背中に翼を生やした狸っぽいのか。もう、奴らにはダーウィン先生もびつくりの進化があつたに違いない。

ちなみに両方とも今の俺の主食ですけどね。兎も角、上手い事言っただ。

この世界はいわゆるファンタジーに属する世界の様だ。何せ、不思議な動物はもとより、俺も不思議生物になってしまったのだ。簡単にいうと、俺は氣？が使えるようになった。

これが、魔力なのか、闘気なのか、靈力なのかは先人と会ってない以上解らんが、とにかくそれっぽいのが体に宿っているのは確かだ。何せ今の俺の運動能力といったらオリンピック上等という位。はっきりいって、今までの練習が何だったんだと思う位の馬鹿さ加減である。とりあえずこの氣という奴の特性は今まで調べた所以下の通り。

- 1 ・氣を浸透させたモノの特性及び能力が伸びる。
- 2 ・氣を一か所に集中すると伸び幅が増える。
- 3 ・氣を浸透させると怪我の治りが早い。
- 4 ・氣は圧縮すると練度が増す。
- 5 ・氣は体を循環させると加速器の様に純度が上がる。
- 6 ・氣は使い続けると総量が増える。

と、大雑把にこんな感じ。実にファンタジーである。まあ何にせよ生き延びる手段がある以上、これを伸ばさない手は無という事で、只管に特訓した一か月。そのお蔭で特性とかがある程度解ったのだが、俺がこの世界のどれ位のレベルにいるのかがさっぱり判らない。比較対象がいらないからしょうがないが、これがはっきりしないと動くに動けん。

何せこの力が特別で重宝されているんならともかく、宇宙的戦闘民族に放り込まれた地球人という構図だったら眼も当てられない。現地にあった瞬間、戦闘力たったの5か、ゴミめ。で俺の人生はあつさり詰む可能性はゼロじゃない。何せファンタジーだからなあ。油断は出来ない。もうちょっと特訓した方がいいかねえ。

「でも、人に会いてえなあ」

この一か月俺は当然ながらずっと一人だ。

探索したり、獲物を探したり、特訓している間はいい。けど、ふとぽっかり空いた時間があると、もう駄目。ホームシックもいい所で未だに泣きそうになる。完膚なきまでに帰る方法が解らない以上、開き直って現状を模索した方が幾分ましと考えているが、それはそれ。生命の危機に直結する事態から抜け、一定の生活を得ると今度は未来が怖くなる。

俺は、突然与えられた気によって生活の基盤を得た。数か月もしくは年単位はかかると予測していた森林脱出計画も、やろうと思えば出来る段階まで進んでいる。けど、ここは未知で未開の森だ。いつ俺の手に負えない野生に出会うかも判らない。

けど、ここで生きて行くだけでは、死んでいるのと変わらない。俺

は生きたいんだ。きちんと命を使いたい。でも、使い方が解らない。さつき現地人と言ったが、本当にこの世界に人類はいるのか。いたとしても文明を築いているのだろうか。この森林はデカくて深すぎる。情報なんて望むべくもない。やはり、ひたすら牙を研ぐしか無いのか。少なくとも絶対大丈夫と言える所まで。

「ファイトー一発!!」

食事を終わると何時もの特訓場所へ移動する。場所は洞窟の上にある小高い丘。

朴の葉で包んだ食料と水が入っているペットボトルを鞆に入れいざ出発。丘に出るためには迂回して遠回りするか、崖を直接登って行くかの二択になる。今回は筋トレも兼ねているので、後者で行くことにした。気を上手く使えなかった頃は苦労したクライミングも今じゃ随分と楽だ。

気の特性1の通り俺の純筋力も相乗効果で上がっているのだろう。おかげで、筋トレの楽しい事楽しい事。筋トレは嫌いでは無かったが今はもう大好き。1・4・5を駆使し、筋トレと基礎練に24時間の殆どを当てていると言ってもいい。やっぱり、成長の実感てのは嬉しいもんだ。

一応富田六合流は古式だから呼吸と気の運用の練習もあつた。俺の著しいだろう成長はこの運用法「循気」があつたのからだろう。後とはにかく反復練習。静流に教えてもらった嘘くさい奥義が出来る日も近いかもしれん。ふふふ、ワクワクするぜ。気分は完全に修練者。悟りを開いてやるぜ！。

「エイシャこらー!!」

無駄な掛け声を上げながら、今回ラストの筋トレのセットを終わる。昼過ぎには終わろうと思っていたのだが、時刻は既に夕方になっていた。ある意味先を気にする必要が無い今は、何の気兼ねもないのでついつい時間を忘れて特訓をしてしまう。時計があるからある程度は時間管理出来ているが、もしなかったら随分アウトになっていたに違いない。今でも十分適当になってるしな。

立ち上がり、崖の淵に腰を掛けた。

遙か彼方にある太陽は今正に地平線に沈みゆく所だった。眼下の森林が茜色に染まり、この世のものとは思えない景色を作り出す。日没の光景は地球のものと何も変わりなく、壮大すぎて言葉も出ない。

ふと、この乖離した時間の名前を思い出す。

確か、逢魔時だったか。世界が反転し魔が這い出る時間、現世と常世が繋がりがやくなる時間だったか。だが、真昼間に神隠しにあった俺としては実に信じられん。どうせなら、本当に神様って存在に会ってみたかったぜ。

さて、一通り夕焼けも堪能したし戻るとしよう。

鞆を背負い、15メートルはある崖を飛び下りる。聞き慣れた風切り音が耳朵を震わせるなか、崖にある突起で落下の衝撃を分散させる。その最中、中々スリリングだぜと思える位には余裕があるのに苦笑した。人間の適応力って馬鹿に出来ん。そのまま迫りくる地面を眼で捉え、五点接地で着地し、はいポーズ。うむ百点。今回は鞆を潰さず綺麗に回れたぜ。

ひとしきり頷いていると、突風の様な悪寒が背筋を走った。この感覚はあれだ。命の危険を発する緊急警報。虫の報せ、第六感とも言う原始の本能。考える前に体は横に飛び出している。その直後、白

い突風が今居た場所を吹き飛ばしていた。後数瞬気付くのが遅れていたら、俺は間違いなく死んでいた。

体勢を立て直しながら、対象を眼前に収める。その瞬間、意識が空白になった。目の前には白銀の狼。あいつとは似ても似つかないのに、何故俺はあいつの事を思い出したのか。空になった思考は、腰に差してある鎧通しを抜くのすら忘れ、間抜けにもぽつりと一言零すことしか出来なかった。

「シロ」

呟いた瞬間、どっと冷や汗が流れる。

俺は何をやっているのか、命のやり取りをするその最中に、気を抜く等言語道断だろう。隙は一瞬、だが奴にとつてその刹那で十分すぎる。鎧通しを抜くが間に合うか。それ以前にこんな化け物相手から生き残れるのか。狼はしなやかな筋肉を撓ませると、再度爆弾の様に向かつて……来なかった。

狼はこちら睨み、唸るだけでそれ以上の行動を行わない。どういう事だ。奴は変わらず押し潰す様な強大な殺気を放っている以上殺す気なのは間違いない。だが、それだけだ。もしや狼だから自分の群れの到着を待っているのか。これも違う。此奴ほどの戦闘力があれば、群れを待つ必要はないだろう。じゃあ、なんだ？俺には解らないが怪我でもしてんのか。狼は変わらず、唸るだけで全く要領を得ない。強いて言えば気がぶれ始めている様に見える位か。

ああ、もう。何か、色々面倒くせえ。

「飯食おう」

鎧通しを鞘に納め鞘を下す。

隙だらけの姿に奴は驚いたのか、殺気が若干弱くなった。その、野生の獣にはない理知的な気配から察するに、こいつは頭がいいのだろつ。多分。襲って来ないし、俺もこいつを殺せる自信が無いので言葉通りに食事を取る事にした。

襲った存在の目の前で食事、危機管理の欠如と言えばそれまでだが、折角手にした洞穴というプライベートスペースを明け渡すのも嫌だし無闇に戦闘するのも面倒だ。なら、ここは俺のテリトリーというのははっきりと示した方がいいだろう。

奴に背を向けて、今回の攻防で入れ替わり丁度背後にある俺の洞穴を漁る。

予想通り奴が居座つてたんだろつ、多少荒れているのが目に残るが問題ない。何か壊されて困る物が置いている訳でもないしな。洞穴から焚火する様に保管してある枯れ木を取ると、奴の前でせつせと組み上げ、鞆に入れてあるライターで着火。後はこれまた鞆に入っていた兎肉を万能ナイフに刺し、火であぶるだけだ。ふふ、俺の手際も良くなったもんだぜ。

「旨い」

兎のレア肉を頬張ると、自然に口角が上がる。

基本的にここでの娯楽は食事だけなので、この食事の瞬間は幸福と言う他ない。ふと、前を見ると、今まで必死に唸っていた奴が、物欲しそうにこつちを見ている事に気付いた。もしや腹が減っているのか。

枝に刺し同時進行で焼いていた肉を取り、ぶらぶらと奴の眼に付くように揺らしてみる。肉の揺れに合せ奴の顔も揺れた。おもしろい、

当然俺はその肉を奴に上げる事はせずに、そのまま自分に口に持って行く。もぐもぐ、ごつくん。そして、にやり。奴の殺気が激しくなった気がするが、んなもん知らん。危うくあいつの腹の中に入りかけた身としては、当然だろう。悔しげに震える奴が実に可笑しい。もつとやってやろう。

んで、十分後。

罪悪感で折角の肉の味が解らなくなっている俺が居た。確かにからかったのは認める。久しぶりの知能ある存在との交流が予想以上に楽しかったのを認める。だから、まあやりすぎたのも認めよう。

しかし、

狼のくせにそんな可愛らしく寂しげに上目使いをする奴があるかああ！！！！

やばい、何がやばいって、ここで肉をやったら絶対後々面倒な事に巻き込まれる気がする。だが、こんな悲しげにキューンとか鳴いている存在を無視できるのか。

考えろ、考えるんだ俺。奴はチワワの様な小動物ではないのだ。全長は2m近くで肩高は1m位あんだぞ。それに、奴はさっきまで殺気全開だったろうが。それが、それが、こんな上目づかいでキューンと泣いているだけで、騙されるかああ！！

「……………食うか？」

何言ってるの！？何言ってるんだ、俺！！

ああ、だが手が勝手に勝手に動いている。嬉しそうに眼を輝やせている奴に焼けた肉を投げている俺がいる。もう、駄目だ。何か凄い勢いで尻尾を振ってる奴を見ると、いいやと思ってるんだもん。

がうと吼える奴を見ると何だか和んでるもん。くつ、俺の馬鹿野郎。

結局、俺は奴の為に保存用の肉まで焼くは、あまつさえ湖まで水をペットボトルに何度も汲みに行っていた。もう、俺って本当に駄目だ。

ぱちぱちと火が鳴る音がし、焚火の奥、薄闇に白銀の巨狼が浮かぶように座っている。

あの後、食事も終わり夜のトレーニングをしている最中もこいつは此处を離れなかった。あの時の食事中の反応が嘘の様にこいつは既に警戒状態に入っている。それなのに何故か居なくならない。

俺が危害を加えないし、飯を与えてくれる便利な奴とこいつは認識したのだろうか、今一よく解らん。少なくとも、こいつは俺をもう襲ったりはしないと思う。というか、襲われたら洒落にならん。これで襲われたら、貢ぐだけ貢いだ馬鹿な男を全く変わりは無い。それが死因としたら流石の俺も恥ずかしい。

まあ、いいや。

いい加減眠くなってきたのもう寝よう。火に砂をかけ消火すると明かりは夜空の星だけになる。自然に溢れたここは、その満点の星空だけで夜にしては結構明るい。森に入ると、真っ暗だけどな。

洞穴から動物の毛皮を取り出し地面にひく。

何時もは洞穴で寝ているが、流石に今日は寝れない。洞穴で寝てこいつに襲撃されたら間違いなく命はない。まあ、洞穴でないだけで、目の前で寝ようとする俺も大概だけどな。鎧通しを手にして俺は横になる。

暗闇の中、見るとこいつも寝ていた。

全く、こいつは良く解らん。解らんが、もし朝起きて、こいつがまだ此処に居たらきつと長い付き合いになるだろう。

そんな、確信に近い予感を覚えながら、俺は意識を手放した。

森林の中で2 / 俺の時代、未だ来ず…か

「くおら、ヒメ！それは俺の肉じゃー！！」

石鍋の上を箸と爪が交錯しぶつかり合う。

これは食事という名を借りた生存闘争に他ならない。油断をすれば即奪われ、命の源はみるまに相手に懐に入っていく。故に、この勝負に一寸の隙さえ入る余地は無く、殺気すら伴うのは当然といえた。

本日の昼食は、鉄板ならぬ石鍋でのバーベキュー。

俺だ。あれからさらに五か月経った。

場所は変わらず森林である。異世界に来てから既に半年経つが俺は相変わらず森の中。展開の早い漫画だったら既にラスボスを倒してハッピーエンドしてる所なんだが、俺は狼ことヒメと出会っただけで他は何もやっていない。強いていうなら、基礎トレーニングと森及び山岳地帯の探索、後は日々の食事改善だけは真面目に取り組んでいる位か。

全く、世界平和とか魔王討伐とか面倒なイベントは御免被るが、何らかのアクションがあってもいいんじゃないかなろうか。ふう、半年前は進路希望、五か月前は死んでる様に生きたくないとか言ってた自分が懐かしい。ヒメと過ごす様になって、それどころじゃなかったもんなあ。

ふと、昼飯が終わりその巨体を地面に投げ昼寝している狼を見やる。だらけきっていた。家の中で飼って墮落しきったペットを見ている様だ。本当、野生的な自然のと真ん中に居る筈なのに、野生という

凜々しさを一切感じさせないこの狼は一体何者なのか。出会った頃はもう少しマシだったのに。すっかり腑抜けてしまった。ああ、あの頃の君はもう居ないのね。

眼を覚ましてみたら狼は居た。

居るのはいいが、襲撃した者より遅く起きるのは狼としてどうなのだろうか。まあ、いいけどね。それよりも、今日明日の飯の方が大事である。保存肉を殆ど食わせたせいで食料を考えねばならん。

伸びをして簡単に体のストレッチをしながら、今日のプランを考える。

やっぱ、今日は鍛錬よりも狩りを優先させるべきだろう。熊みたいな大型な奴に出会えれば早いけど、それ以前に獲物に会えるかが微妙だ。とりあえず、今日の朝飯は簡単に取れる魚でいくか。保存はし辛いが容易く取れるので魚は重宝している。と言う訳で、沢まで行きますか。

んで、魚を十匹位さくつと獲り、鞣した毛皮に包んで持ち帰ると狼は俺の洞穴で爆睡していた。

あれえー、何でこの狼はわが物顔で俺の住処で寝てるの？漁に行ってから正味一時間半しか経ってないのに、わざわざ移動するとは喧嘩売ってんのか。

まあ、まあ、いい。

今は飯の方が重要だ。微妙に警戒しながら洞穴に近づき、焚火セツトと塩を取り出す。その際、狼に動きは無い。わずらわしそうに尻尾を揺らしたただけだ。こいつ、本当に寝てるのだろうか。何か嫌な予感がしてきたぜ。

悩んでいてもしょうがないので、焚火を開始し、まず五匹を串に刺していく。

ふふ、食欲を誘う匂いが鼻孔を刺激し、知らず知らず唾液が口に広がっていく。そして、いざ食うかという段階になって、狼がのつそりと近づいて来た。こいつ、やはり起きてやがった。朝の段階で俺が飯を獲りに行ったのが解ったのだろう。それを見越しての待ち伏せとは、何とあざとい奴か。

当然、俺は焚火を囲う様にした魚を全て自分側に移動させる。

明確なる意志表示だ。狼は焚火の反対側に座ると大きく欠伸をする。その動作は、朝起きて朝食が準備されたテーブルに座る様に見える。やらないからね。絶対やらないから！

ここまで来たら、もはや断固無視である。

俺は手前側の程よく焼けた魚を口に運ぶ。旨し。これは塩をかけていないが、素材の味だけで十分勝負出来る。もぐもぐ、ごつくん。反対側でパシン。

二匹目、今回は塩をかけて食べる。

いい具合に塩が素材の味を引き立て、これまた旨し。もぐもぐ、ごつくん。反対側でパシン、パシン。

三匹目、もぐもぐ、ごつくん。パシンパシンパシン。ちなみにパシンというのは、狼が尻尾で地面を叩く音だ。魚の数が減るにつれて音も大きくなっている。だが、やらん！ここでやったら、俺はこいつの家政婦になってしまう。ここは心を鬼にして当たるべきだ。

四匹目。もぐもぐ、ごつくん。ペタン、へにやり。四匹目を食べ終わると、狼の尻尾はすっかり元気を無くし力なく地面に項垂れている。その表情も心なし残念というか寂しそうだ。狼はしょぼんとし

た雰囲気撒き散らしながら、尻尾を引き摺り洞穴に戻ろうと踵を返す。はつきりいつて、性質が悪い。これなら素直に襲われた方が精神衛生上まだましである。だって、罪悪感全開だからね。

ちらりと、狼が振り返る。

その顔は打ち捨てられた捨て犬の様に悲壮感に塗れている。それは俺が悪い事をしている様な錯覚すら引き起こし、俺のちっぽけな良心を決るには十分な威力を持っていた。しかし、負けん。俺は鬼になると誓ったのだ。狼からなるべく視線を外し五匹目を咀嚼する。美味い筈なのに味がしない。狼の眼と、鳴き声が俺の味覚を遮断しているのだ。何というデジャブ。

しかし、何故俺は大きな楽しみである食事をこんな緊迫した状態でせねばならないのか。もし、これがずっと続くとして、俺は食事に楽しみを見いだせるのか。否だ。食事とはもっとリラックスしてするべきであり、断じて味のしない物を食う事は食事とは言わないのである。もう、諦めるか？しかし、諦めた所で俺に特はあるのだろうか。狼の家政婦になるメリットとデメリットが天秤となって揺れ動く。

完全に狼の術中に嵌っていると言わざるを得ないが、事実昨晚は何のかんの楽しかった気がする。誰かの為に何か出来るという事が純粹に嬉しかった。それが、たとえ命を脅かした奴相手だとしても、一人というのは寂しすぎた。けれど、それとこれとは別だ。別だね。

ちらりと、狼に視線を移す。

狼は振り返りながらの上目使いという上級テクニックを使っていた。やべ、見なきゃよかった、超力ワイイ。反射的に視線を外し額の汗を拭う。やれやれ、いかんいかんぞ。外見で惑わされるなど愚の骨

頂ではないか。だが、だが、しかし。ああ、俺はどうすればいいんだ！！

頭に手を当てかぶりを振る。

傍目には頭の痛い人に見えるが、至って俺は本気である。畜生、N
oと言える日本人になりてえー！

で、正気に戻ったら、狼は毛皮に包まれた残りの魚をむしゃむしゃと豪快に食ってました。

気付けよ、俺。

結局、狼は居ついてしまった。

居ついてしまった以上、名前が必要と思うがこいつは中々に我儘である。何せ、基本的に何らかの人間を掛けた飯しか食わない様になったのだ。え、それどこの貴族ですか？まあ、探索範囲が広がったり野生の姫ごっこが出来たりと、狼にも世話になっているが明らかに俺のが負担している。けど、許してしまう自分が可愛いと思ったりしなかったり。キモいな。

ともかく、名前どうしようと悩むがいい案が全く浮かばない。

綺麗な白銀の毛を持つから、『ギン』でいいような気もする。ていうか、それ以前に俺あいつの性別知らねえや。というわけで、人があくせく基礎トレやっている隣でぐーすか昼寝している狼の股間を凝視する。けど、横向きに寝ているせいで見えやしない。しょうがないので、片足を持ち上げ確認することにした。

よいしょと、手触りの良い毛を感じながら狼の足を持ち上げ股間を見る。

ん、毛皮の奥にジョイスティックは発見出来ない。けど基本的に動

物のスティックはデカいので見ないで良かったかもしれん。種族が違うとは言え、やはり凹む気がする。

うん、ともかく雌だ。

雌とすると『ギン』は無いな。何というか、若干男っぽい気がする。となると何にするかと、持ち上げた足を戻そうとすると、狼とばかり目があった。どうやら起こしてしまったらしい。何となく気まずい空気が流れ、俺はへらりと愛想笑いすると足を戻した。こいつは、寝起きが悪いからとつとと退散するに限る。

けれど、何だか狼の様子がおかしい。

普段ならがうと威嚇するのだが、硬直したまま自分の股間と俺の顔を交互に見て、しかもその瞳には涙が溜まっているではないか。狼の涙目って凄えレアじゃね。思ってる場合じゃないな。現在の気温は局地的に氷点下、不穏な空気が俺の背中をびっしりと濡らし、反対に狼から殺気染みた気配が立ち昇る。それは、正しく狂気に等しく、竜の逆鱗に触れたという表現が当てはまる。

……あれ、俺、詰んだ？

思ったのと、狼がその口を開けたのは同時だった。

その後、荒ぶる狼に熊一頭を献上し、平身低頭の末に何とか許して貰えた。土下座中、膝よりも頭が低くなったといえは俺の平身低頭っぷりがよく判ると思う。その際に、岩の上に腰掛け眼下の俺に蔑む視線を送る狼を見て、名前が決定した。

所謂『ヒメ』と。

ちなみに、漢字では無くカタカナなのは、俺のささやかな抵抗である。俺にしか判らないから全く意味は無いが。

何にせよ、狼は『ヒメ』という呼び名を納得してくれたらしく心安心である。名前一つ決めるので、ああも死にかけては割に合わん。ともかく、ヒメという名前も決まり、思った。ヒメは何故、ああも激昂したのかという疑問だ。あの時は雰囲気の流れに流されたが、おかしいだろ普通に考えて。確かにヒメは人間くさい仕草をしたり知性を感じる事はあるが、狼である。獣なのだ。それが、何故ああもぶちキレモードになったのか。

俺はある仮説を立てた。

ここはいわゆるファンタジー世界である。ならば、そういう存在が居てもおかしくないだろう。そう、ずばりヒメは人狼なのではなからうか。これなら、俺が居る時には決して排泄活動をしなやか、逆に俺が用を足そうとすると離れるまたは怒る等の行動に理由が付く。何せ、俺が自家発電した後も必ずヒメは機嫌を悪くするしな。

ていうか、これがマジだったら俺恥ずかし過ぎて生きてけないんだけど。

黒歴史をがつり見られた様なもんですよ。っていうか、俺セクハラってレベルじゃ無い事やってる！

不味い、何が不味いって俺完全に人間失格レベルじゃね。

無駄に心臓が脈打ち、近くににいるヒメをチラ見する。あいつは呑気に欠伸なんぞしてやがる。ちくしょう、人の気も知らないで。これは俺の精神の安寧の為に白黒はつきりつけねばなるまい。と言う訳で、ノートとシャーペンを持ちヒメに近づく。言葉が通じ人以上、視覚で判る絵でコミュニケーションを取るしかねえ！

「俺の時代、未だ来ず…か」

んで、悪戦苦闘した結果、ヒメは人間状態になれん事が判った。

何つつか地味に残念だ。これがマジで人間になれば、うお、ファンタジーって感じだったのだが、そうじゃなかったらしい。実に残念。普通、異世界転移だったら綺麗もしくは可愛い女性と最初に出会すべきだろう、じゃなきゃ話が進まん。

だが、こっちは一か月経って出会ったのが知能ある狼一匹。

しかも、わがまま。俺にどうしろというのか。むしろ、何もしてなくていいという事なのか。このまま、この森で一生過ごせというのか！

この結果に若干凹んでいると、隣に居るヒメが優しげに頬を舐めてきた。

ざらりとした動物特有の感触が頬を伝わり、温かさがじんわりと広がる。ヒメを見ると、心配そうに喉を鳴らしていた。

何つつか、俺ってやっぱり馬鹿だ。

独りよがりでこっちの都合を全部ヒメに押し付けてしまった。それなのに、ヒメは俺を心配してくれている。本当に馬鹿だ。こいつが人間とか人間じゃないとか、別にどうでもいい事だと今は思う。こいつと居るだけで俺は生きてると実感出来てるじゃないか。

だったら、他は些細な事だ。

まだ本当に短い付き合いだが、不都合は全くない。ヒメの頭を撫でると、嬉しそうにヒメが鳴いた。

森の中の生活も、こいつが居れば割と良いかもしれん。そう、思った。

森林の中で3 / んで、五か月か

「ヒメ、行くぞ」

俺の言葉にヒメは頷く。

その顔には僅かの緊張感とそれ以上の期待感が見て取れる。今日この時の為に俺とヒメは特訓を積んできたのだ。その過程は聞くも涙語るも涙、その成果が試されるのだからヒメの表情は当然だろう。多分、俺も似たようなものだしな。

俺とヒメの視線の先には、丸く太った鶏の様な動物が一匹。

その外見から何度獲物にしようとした事だろう。だが、ここは異世界でありファンタジー世界。この鶏（仮）はとんでもなかった。気配察知力の高さに加え、特筆すべきは離脱の素早さ。鶏の様な外見のくせにこの鳥は跳ぶのである。いきなりバヒュンと。その一直線に空へ駆け上がっていくジャンプは、まるで発射されるロケットの様ですらある。気付かれたら最後、このロケット鳥は遙か上空に打ち上げられ空を悠々と滑空して行くのだ。

その余裕さに涙した事数知れず、ヒメの八当たりに涙した事数知れず、焼き鳥に出来なかった悔しさ数知れずである。それが、今日で終わる、終わらせてみせる。

ヒメに跨り、姿勢を低くする。

突撃のタイミングは全てヒメに任してある。後は特訓通りにするだけだ。ヒメは注意深くロケット鳥を観察している。野生の動物の勘と経験でスタートを切る瞬間を全力で探っているのだ。そのヒメの呼吸に俺も呼吸を合わせる。人馬一体ならぬ人狼一体の境地に至る為に。

やがて、心臓の鼓動すら合致しヒメの気の流れが読み取れるようになったその瞬間、ヒメが爆ぜた。

白銀の弾丸は風を切り裂くとロケット鳥に向かって直走る。それは景色を置き去りに、時間すらも遅いと言わんばかりの強烈な疾走。だが、相手は気配察知の鬼。白銀の弾丸が標的を貫く前に、嘲笑う様にその身は空へ移動していた。

ぐると、ヒメが鳴く。

それは計画第二段階への移行を教えていた。今の一撃でロケット鳥を仕留めれるとは最初から思っていない。故に次へ、ロケット鳥が上空へ跳び安全圏へと避難したと警戒を緩めている今こそが狙い目だ。

緩やかに空を滑空しているロケット鳥を眺めながらヒメは走る。

獲物を確実に仕留める為に。これはロケット鳥の着地際を狙おうとしている訳ではない。奴らは結局は鳥、地上での爆発的な移動は出来なくとも、ある程度飛ぶ事は出来る。着地際を狙うという策は最初から使えないのだ。故に勝負は空。滑空し徐々に高度を下げるロケット鳥を見てヒメが鳴いた。

第三段階への移行である。

ヒメの体毛を強く握り衝撃に備えた。ヒメの筋肉が撓み、長距離から短距離の走り方にシフトする。急激に速度が上がり、次いでヒメは強く地面を踏みしめると跳躍した。木々の景色を一瞬で抜け、視界が大きく広がる。眼前にはロケット鳥。こちらの気配に気付いたのだろう、ロケット鳥の翼が大きく羽ばたいた。ロケット鳥の後ろ姿が遠くになっていく。それは何度も見た光景であり悔しさの象徴。だが、今回は違う。

ヒメが吼えた。

その遠吠えに乗る様に俺はヒメを踏み台に空へと駆け出す。ヒメという支えを無くした体は浮遊感と推進力だけを頼りにロケット鳥に肉薄する。ロケット鳥の慌てた表情が見えるが、遅い。

お前が一段階のロケットをなら、こっちは二つ使えば届くんだよ。地上に戻るヒメを視界の端に収めロケット鳥を睨む。今までの特訓は全てこの時の為に。抜き放った鎧通しは寸分の狂いも無くロケット鳥へ吸い込まれ、その命を切り取った。

「獲ったどー！！！」

勝利の咆哮は空に響いた。

地上に戻るとヒメが待っていた。

既に結果は判っていたのだろう、ヒメはにやりと笑っている。そのどこまでも人間くさい仕草に苦笑しながら、ヒメに戦利品を掲げた。がうとヒメが応える。俺達流のハイタッチだ。

念願のロケット鳥を獲った事もそうだが、特訓が実を結んだことが一番嬉しかった。

何しろ、言葉が通じない同士の作戦会議から始まったロケット鳥捕獲大作戦である。まあ、難航した、難航した。実際に獲る方法が決める段階はもとより、決まってからというか決まってからが大変だった。

第一段階の全速力のヒメに掴まる難行、第二段階の走行を邪魔しない為の身体操作、そして第三段階のバランスの取れない空中でのヒメからのジャンプ。最初は上手くいかないから当然喧嘩したし、むしろ関係すら破綻しようした。でも、なんだかんだと乗り越えて、

少しずつ信頼関係が育まれたんだと思う。

喧嘩して仲直りして、上達に喜んで。

本当、少し上手くいっただけなのに二人で馬鹿みたいに喜んだ事もある。ここまで真剣に共に目標に向かったのは初めてで、戸惑いまくったが今なら楽しかったと言える。多分。

実際、兄弟を持っているが、何でも最初から完璧に出来る兄貴とはこんな風に何かをした事は無かったしなあ。あの事があった後は、尚更一人で格闘術に没頭していたし。

うーむ、初めての共同作業が異世界に来てからで、しかも相手は狼か。あのまま卒業しても一端の社会人になれたかは微妙な気がしてきた。

……ともかく。すげえ久しぶりの焼き鳥。楽しみだ。

「満足である」

焼き鳥を満足いくまで食べ、ごろんと寝転ぶ。

何つつか滅茶苦茶美味かった。ヒメもそうなのだろう、凄い嬉しそうな顔で昼寝をしている。獲るのは大変だったが、それに見合うだけのモノはあったってことだ。場所は何時もの崖の上の練習場。寝たまま見上げる空は馬鹿みたいに広く、視界を遮る物が無いから視界全てが空だ。そのまま流れて行く雲を眺めるのが最近のマイブームで、昼食後はこうやってヒメと一緒にだらだらするのが日課になっている。

もし向こうで高校生やってたら、今みたいな自由は無かったんだろ

うと思う。

進学するにしても就職するにしても、あくせくしてそうだしなあ。本当、今頃兄貴や静流達はどうしているのだろうか。プロとして大成しているのか、馬鹿弟子と罵っているのか、それとも全く予想外の事をやっているのか。……まあ、いいけどね。あんまり、よくないけどね。

自分でもよく判らん気持ちの切り替えをして、立ち上がった。

もやもやした時は特訓だろう。近くに置いていた鎧通しを腰に差し気を練り上げる。富田六合流「循気」富田六合流の基礎中の基礎で、身体全体に気を循環させる事により、精神と肉体の活性化を目的とする。

まあ、寝ぼけ頭を瞬間的に戦闘状態に持っていけて半人前、普通は動かさない筋肉と関節を自由に出来れば及第点、脳のリミッター外しを自在に出来れば一人前。んで、天地一体となれば免許皆伝。最後だけが実に古武術らしいと思う。実際、富田六合流は小太刀術の富田流と中国拳法の心意六合拳が混ざり発展したと静流が言っていた。ならば、気を重要視するのも当然だろう。

ちなみにこの世界に来る前の俺は及第点以上一人前以下で、この世界に来て実際に気が感じ取れる様になっただけからは、一人前の循気使用といった所。天地一体の境地は遥か彼方である。

呼吸を正し、習った基本的体術を繰り返す。

富田六合流「雲流」最初は確認する様にゆっくり、次第に速くしていく。そのスピードを上げる途中、歪みがあれば最初からやり直すというもので身体操作練習である。

基本的にうちの流派の練習は基礎を反復するだけだ。

もちろん組手も行うが基礎が圧倒的に多い。何せ富田六合流の信条は、相手を観て、自由自在に身体を操り、脳のリミッターを要所を外し、決める。というのが基本であり奥義。

だから、身体の動かせない部位も動かせて当たり前で、脳のリミッター外しも出来て当然。

その為に、必要なはただただ反復練習のみ。不自然を自然だと身体と脳みそに叩き込んでいくのだ。だからだろうなあ、富田六合流が衰退していったのは。何せ地味で時間がかかる上に、今日も明日も明後日も基礎基礎基礎の教えである。それで一定の強さになる前に真剣勝負を行えばそりゃ殺されるわな。

実際俺が教えて貰ったのも、循氣と雲流、後は氣と筋肉を圧縮させる「鍊庄」と、対象を見て学ぶ「観応」だけだ。どれも格闘術にとっては基本ではあるが、ここまでねちっこいのは中々無いと思う。事実、俺はこの世界に来てから、筋トレを除けばこの四つしか行っていない。というか、教わってないから出来ない。

上達の実感はあるが比較対象が森林にいる奴らだけなので、強くなっているのか判らん。

ファンタジーであるこの世界、俺は生き残れるのか、実に不安である。基礎練している俺の隣で、ヒメが大きな欠伸をした。とりあえずは、平和な一幕である。

「んで、五か月か」

光陰矢の如しとは良く言ったもので、本当に気付いたら時間は過ぎていた。この五か月で判った事は、

- ・ 人類は存在しており、ある一定の文明を築いている。
- ・ 獣人及びモンスターの存在もいる。
- ・ 全種族が皆仲良くしている訳ではない。
- ・ 魔法の様な不思議な力もある。
- ・ この森は近くの町まで歩いて半月程度の場所に存在している。
- ・ 俺は弱い

以上、ヒメから得た情報である。

当然、言葉は通じないから全て絵で会話をを行った。伊達に美術の成績は5じゃないぜ。さて、この中で最も重要なのは人類が居る事だろう。本当、居なかったらどうしようかと思った。本気でヒメとこの森に永住するところだったぜ。それも有りと言えば有りだが、未だ元の世界に戻るとい希望は捨てて無かったので、これは吉報と言えた。何よりも、折角だから冒険してみたいという好奇心もある。

んで、次は町が意外と近くにあるという事。

歩いて半月程度なら、ヒメに乗れば一週間位で到着できる筈だ。実に胸の高鳴る話である。だが、ここで問題が一つ。行つてどうするという事だ。ここは異世界、間違いなく言葉は通じず常識さえも違うだろう。そんな町に行つてどう生活しろというのか。情報収集どころか、日々の糧を得られるかも実に怪しい。

そこでポイントになるのが、強さだ。

ヒメと会う前から懸念していた事だが、残念ながら当たってしまった。俺は弱いらしい。もう、ショックだった。何しろ十年以上真面目に武術に勤しみ、こっちに來てからも修練を怠らなかつたのにこの有様である。確かにこの森では俺は強い方らしいが、そこはそれ、井の中の蛙ということだ。

そついう事もあり俺は未だに森で生活している。

今の目標はヒメに強さの合格を貰う事。とりあえず、その合格さえ出れば町に繰り出そうと思っている。まあ、地味に基礎トレしかやってないし、未だに強さレベルを聞くとヒメには溜息を吐かれるので遠い事になりそうだが。本当、困ったもんだ。

何時もの丘でトレーニングを終え、ヒメに促されるまま一緒に夕日を見る。

崖の淵に腰掛け、何をするでもなくただぼーっと地平線を眺めるのは、今じゃあすっかりお馴染みとなっていた。隣に座るヒメも俺と同じように彼方を眺めているだけで、何かしようという気は無い様だ。

ちらりとヒメに視線を移す。

ヒメの白銀の体毛は山吹色に塗れ幻想的に輝いていた。まるで、ヒメだけが物語から出てきたような現実感の無い美しさ。古来、狼は大神と呼ばれ、畏怖されてきた事がよく判る。しかし、ヒメはこんなに綺麗で強いのに、何で俺なんかと一緒にいるのか。こいつ程の力等があれば、狼の群れの中でも十分トップになれるだろうに。人間である俺と一緒にいるメリットってあんのか？

俺の不躰な視線に気付いたのだろう、ヒメが訝しげな表情を作る。何時の間にか表情も読める様に成った事は喜ぶべきか未だによくわからん。まあ、ともかく

「ヒメと会ったのも、こんな時だったなあって」

勿論、言葉が通じる筈は無い。

ただ、言葉から伝わるニュアンス的ものを発しただけだ。今回もそれが通じたのかは判らんが、ヒメは矛先を収めてくれた。

そう、ヒメと出会ったのも今の時間帯だった。

所謂、昼と夜の境目。魔と逢いやすくなる怪異の時。世を反転させる一瞬の隙間。

すなわち、逢魔時。

そんな事を考えたのが拙かったのだろうか。

気付いた時には遅かった。世の中の大概の出来事がそうであるように、何時だって始まりは唐突で残酷だ。知らない何処かで既に始まっていたのだろうが、当人にとっては何の慰めにもならない。

そいつは、突然現れ、気付いたら出会っていた。そして、始まりの鐘を鳴らした。

始まりの鐘 1 / 五澄草麻

「An Ch?ad gan tr?cht ar」

背後からの突然の問い掛けに、まず感じたのは喜びよりも驚きであり警戒だった。

右手を鎧通しに添え声の方向に振り返る。そこに居たのは女だった。その女を形容するならば、美女というよりも美貌の女だろうか。猫の様な大きな瞳、それを強調する様な縁無しの眼鏡がより伶俐さを醸し出し、若干低めの声とすらりと伸びた手足がそれに拍車を掛けている。また、長いだろう黒髪を簪か何かでアップスタイルに纏め燕尾服に似た服を着た女は、ふとすれば楽団の指揮者にも見えた。

だが、いつそ寒々しい程の悪寒がこの女が只者では無いと教えていた。

事実、隣にいるヒメは女を見た瞬間から殺気を纏い女を威嚇している。これは、拙いか。激発しそうなヒメを宥める様に声を飛ばす。

「何か用ですか？」

女とは言語が違う事は承知しているが、それでも話す意思がある事だけは伝えなければいけない。だが、俺の舌は僅かながら震え、動揺を隠しきれてはいなかった。女は俺の言葉に眉を動かすと、言語の違う言葉を口にした。

「Cumars?id ti?nadh」

ざざ、と一瞬脳にノイズが走る。

それは、先に聞いた言葉よりも力が有る様に思えた。女は俺を指さ

すと喋りを促す様なジェスチャーをする。どっちにしろ、言つとおりにするしかないか。

「何か用ですか？」

先と同様の言葉を口にする。

それに女は一瞬訝しむと、もう一度同じジェスチャーをした。まじで何がしたいんだ。

「何か用ですか」

三度目だ。

女は口に手を当てると、両手を合わせ左右に広げる仕草をした。よく判らんがもつと長く喋れという事か。ちくしょう、主導権は完全にあつちだな。

「俺とヒメに何か用ですか？もし、何もない様でしたら、俺達は立ち去ります」

仕方ないので、こつちもボディランゲージも含め何とか会話しようとする。俺の滑稽な仕草を見てだろう、女は唇の端を持ち上げると微笑した。

「M o f o c a l 判るかい」

不思議と女の言葉の後半部分だけは理解出来た。

「少しは」

「問題無い様だね。君には疎通の魔術が掛り辛かったので多少時間

が掛った。抗体力が強いんで驚いたよ」

女はやれやれと言った風だが、それはこっちのセリフだ。

魔術、魔法。ヒメにはあると聞いていたが、実際聞くのと体験するのでは意味合いが全然違う。おそらく、他人に干渉する魔法を使っただろうが、何時だ。

……女の二言目か？

あの力があつた様な言葉が、いわゆる魔法の呪文だったのか。マジで未知すぎる。というか、気付かない内に干渉ってどんだけだよ。まあ、いいや。言葉という障害が取り払えたのは僥倖だしな。

「そうですか。それで改めて俺達に何か用ですかね。こつ見えて暇じゃ無いんで、何も無ければお暇したいんですが」

「ああ、そうだったね。何、話は簡単だよ。君の隣に居る狼を引き渡して欲しいんだ」

予想通りか。

ヒメの反応を見る限り女とは知己っぽいしな。問題はどう見てもヒメとは友好的では無いってことか。未だにぐるぐると喉を鳴らしてるしな。

「何かこいつは嫌がつてますけど。だいたい、引き取ってこいつをどうするんですか？」

「さてね。そこから先は君には関係の無い話だ」

女は言葉を区切ると、ゆっくりと人差し指を立てた。その余裕を感じさせる動作は優しさにも見て取れる。だが、ルージ

口を引いた赤い唇。そこには深淵の仄暗さが宿っていた。

「ここで君が取れる道は二つ。一つは狼を大人しく渡して無事にすむ道」

続いて中指を立てる。

いよいよ、最終警告か。押し潰すようなプレッシャーが全身に掛り、心臓が喚いていた。

「もう一つは、狼を庇って死ぬ道」

女は手を閉じると、抱きしめる様に指揮棒を振る様に両腕を広げた。

「さて、君はどっちを選ぶんだい？」

三日月に嗤った女は正しく死神だった。

女の体から悪魔的な負の圧力が放たれる。今までの問答など、女にとって暇つぶしに過ぎない。圧倒的で絶対的な鬼気を纏う女はもはや人の域を超えていた。

全身の毛穴が一斉に開き冷や汗が噴き出す。

口内すら一瞬に干乾ぶと、喉の奥から嗚咽がにじり上がる。膝は震えもはや用を成さず、ただ無様な振動を体に伝えるだけだ。無理だ。勝てない。余りにも隔絶した力の差にもはや笑うしかない。

口を歪に曲げならヒメを見た。

金色の瞳と視線が交錯し、金の宝玉に男の顔が映る。その表情は絶望を通り越し諦観していた。口を引きつらせ、哀れみに溢れた顔は無様と言う他ない。それを見て、俺は他人を弁護するかの如く口を開こうとした。

仕方ないと。

続いて言葉が濁流の様に流れるのだ。死にたくないから、俺とこいつは無関係だから、魔法なんて知らないし、突然異世界に飛ばされた可哀そうな奴だし、ただの高校生に何やらせようとしてんの、だからさ、しょうがないじゃん。と。

それはきつと一度口に出したら後戻りは出来ない魔の言葉。

それを判っていないながら、俺の口は勝手に開いていく。卑怯にも目を逸らしながら。だが、口は空かなかった。開く前にヒメが背を向け歩き出していたから。

俺に一言、ありがとあの鳴き声を残して。

凜然としたヒメを見ながら、俺は背を向けた。

唇を噛みながら、仕方ないと言い訳しながら、また、俺は背を向けたのだ。

星明りすら雲に隠され視界は全て闇の中、見慣れた崖の淵は地獄への入り口か。一歩進めば何かを捨てる代わりに簡単に楽になれる。たった、一歩で俺は堕ちれる。それは、きつと生温い幸せを享受出来るに違いない。そう、仕方ないんだ。

その一歩を踏み出す瞬間、風が吹いた。

闇の中に明るさが灯る。つられ、上を見ると月が一つ浮かんでいた。それは双月の内の片割れ、白い暖かな輝きを纏う月だった。満月から零れる様な光に誘われ、ぽつりと言葉が出た。

「シロ」

俺の初めての友達で、俺の命の救ってくれた大切な存在。

純白の体毛を持つだけの普通の犬。あの時も俺は後ろを向いて逃げ出した。大切なモノを捨て去って。代わりに手に入ったのは、自分への諦観。それだけだ。今回逃げたらどうなる。俺は間違いなくあいつに顔向け出来ない。思いつく事すらしてはいけない。あれから今まで歩んできた自分を殺さねばならない。

結局、どっちに行っても俺は殺されるのか。

だったら、あいつの為に命を懸けてもいいのかもしれない。シロが俺なんかを助けてくれた様に、今度は俺の番だろう。

地獄の淵から呼ぶ声を無視し振り返る。

眼前には死神。その一挙一動が俺の心を縛り付ける。だけど、そんな化物にヒメは迷うことなく威風堂々と歩いていく。ああ、もう。

「仕方ない、な」

言って、肚が決まった。

死ぬのは怖い。けど、全てを捨てて生きる方が怖い。だから、本当にしようがないんだ。膝は震え、呼吸もまばらだけど、まだ間に合う。だったら走らないと。ありがとうと言ってくれたあいつの為に、今まで歩いてきた道が、誇れるモノだと笑える様に。

ほう、と女は感嘆に似た言葉を零した。

人間が絶望の間際から戻って来たのが見えたからだ。常人なら失神する程の魔術によるプレッシャーを浴びながら意識を保っているだけでも驚きだが、一度は折れた筈の心を再建させるとは。

素晴らしいと、女は口を歪めた。

先天的な強さでは無く後天的に会得したであろう力は、何時だつて女の心を揺さぶる。闇夜に純白の月を背負う青年の姿は先程までとは段違いだ。

笑い、圧力を高める。

それに青年は一瞬怯んだ表情を見せたが、瞳の光は消さなかった。ただ、体は震え恐怖を感じている事は判る。だが、それでも青年の体に巡る魔力は充実していた。その四肢とは裏腹に揺らぎすらない魔力の迸りは基礎力の高さを示していた。女の心情に色が付く。それは、期待感に似ていた。

女の変化に気付いたのだろう。

狼は歩みを止めた。訝しみ警戒を高めたその瞬間、背後から抱きしめられた。この気配を狼は知っている。何時の間にか一緒に居る事が当たり前になっていた、名前すら知らない青年のものだ。その匂いに胸が高鳴り、相反する感情が湧き上がる。ぐると鳴いた声は、人語にするなら馬鹿者と言っていた。

その狼の言葉に重なるように、青年の声が狼の耳朵を打つ。

普段なら判らなかつたであろう言葉は、女の魔術により狼にも理解出来た。出来てしまった。憤然とした怒りが湧き上がり、女の事すら忘れ青年に吼えようと口を開く。だが、その前に浮遊感が狼を襲い、そのまま狼は強制的に退場させられた。他ならぬ青年の手によって。

「エイシャこらー！！」

秘技、投げっ放しジャーマンスープレックス。

手っ取り早くヒメを安全圏に逃がす為にはこれしかないだろう。あいつ、頑固だからな。逆さまになった視線の先には綺麗な放物線を

描き、遙か彼方に飛んで行く一匹の狼。自分でやっておきながら、驚く程の飛距離である。つくづく遠い処に来たもんだ。まあ、いいや。勢いをそのままに後転し立ち上がる。正常に戻った視線を女にやると、何故か爆笑していた。

「ふふ、はははっ！ いいね。いいよ。君はおもしろい。実におもしろいよ」

「……褒めてんすか？」

「ああ、褒め言葉さ。自慢していい。私がここまで笑ったのは随分と久しぶりだ」

「そりゃあ光栄ですね。でしたら、このまま見逃してくれるとさらに嬉しいんですけどね」

「何を言ってるんだい。おもしろいのは、ここからだろう」

女はにやりと笑うと、無手だった右手にレイピアのような細い剣を持つ。

鞘から抜いた訳ではなく、剣は空間に浮かび上がる様に出現していた。おそらく魔法で剣を取り出したのだろう。流石はファンタジー。右手で普通に鎧通しを抜く俺とは一味違うぜ。しかも、向こは剣を出した事でさらに圧迫感が増した様だ。

明確な死が背中を舐める。

ふう、本当仕方ねえな。シロもこんな気持ちだったのかねえ。絶対敵わない相手に殺し合いを挑む。それは単なる自殺行為だ。けれど、何でかな後悔はあまり無い。反省すべきところ一杯あるんだがなあ。心臓は史上最高速を叩き出し、爆発するのを待っている。

ならば、行くしかないか。

鎧通しを持った右手を前に出し、左手は胸元に置き左半身になる。膝を軽く曲げ、足はべた足。呼吸は浅く深くゆっくりと。

さあ、いくか。

「富田六合流、五澄草麻^{イスミソウマ}。推して参る」

言ってみたかったんだな、これ。

始まりの鐘 2 / シルフィア・W・エドウィン

仄かな月明かりの下、二人の人間が向かい合っていた。

一人は燕尾服に似た服を纏う黒の美貌の女。

右手に流麗な細剣を持ち、緩やかな風の様に立っている。

一人は白の道衣と紺の野袴を穿いた青年。

右手に武骨な短刀を持ち、静かな巖の様に立っている。

対照的とも言える両者の間に流れる空気は殺気。

事実、場に満ちる張り詰めた緊張感は何時爆発してもおかしくはない。例えその充満した迸りの殆どを女一人が放っていたとしても、鍛錬に裏付けられた青年の気は起爆剤に成り得るモノを持っている。主導権を握る女は、青年の確かな存在感に唇を柔らかかに歪めた。久しく無かった緊張感。詰まらないと思っていたがこんな楽しみが待っていたはね。

女の気が膨れ上がると同時、風が鳴き月が隠れた。

満ちた空気が破裂し、炸裂した様に女が走る。闇に紛れた強靱な疾走は常人には視認すら許すまい。だが、対するは巖。待ちに徹していた青年であれば捉えられない速度ではない。迫りくる女の細剣の刺突に鎧通しを合わせる。金属が擦れ合う音が丘に響き、そこから絶え間ない剣戟が鳴り響いた。

猛烈な刺突の嵐が青年を襲い、その死を青年は必至に掻い潜る。

女の刺突は繊細ながら鋭い疾風の如く。一呼吸の間に十数の突きから繰り出される攻撃は点では無くもはや面とすら言えた。だが、それでも青年を殺すには遠い。閃く刺突を悉く見切り、気を浸透させ

た鎧通しは空間を引き裂く連突の全てを阻む。その卓越した防御技術は鉄壁の様ですらある。

まるで、マンゴーシュだな。

全長120cmに及ぶ細剣のリーチを活かし、間合いの外から攻撃を続ける女は思う。マンゴーシュとは、西洋における盾代わりに使う短剣の事だ。青年の持つ鎧通しは刃長28?全長が40?であり、その意匠こそ違えどマンゴーシュと思うのも無理はない。

事実、青年が使う「富田六合流」は刀を盾として戦闘する事を旨とする流派だ。

あくまでも刀はサブで、拳足による攻撃こそをメインとする。小太刀では無く頑丈な鎧通しを用いるのはこの為だ。攻め気を誘い隙を撃つをコンセプトに持つ流派だけに、守りの技術は特化していた。

もし、青年が女と同じ間合いを持つ刀使いだったら、既に勝敗は決まっているだろう。

守りよりも攻めに比重がある刀と青年の技量では、女の刺突を防ぎきる事は出来ない。短刀という守りに適した武器だからこそ、ここまで粘れる事が出来ている。

その堅固さ、その頑強さこそ、青年の武術の要だった。

「ギアを上げようか」

攻防の最中、女が不意に口を開く。

それは教師が生徒に勉強を教える様な優しさを含んでいた。だが、生徒たる青年は苦笑する余裕すらない。現在を膠着させるだけでも全力なのに、これ以上になったら間違いなく青年の防御は破綻する。それは死を意味していた。

刺突のスピードが上がる。

正しくギアを入れ替えた刺突はもはや疾風を超え電光の域。縦横無尽に煌めく白銀の光は、容易く黒鉄の壁を越えていく。青年の体に幾筋もの赤線が奔り、白の道衣は忽ち深紅に染まる。

しかし、それでも青年は倒れなかった。

閃光を弾く手腕、それを維持する体捌きは驚嘆に値するだろう。それでも、急所を守り致命傷だけを避け続けている青年はじわりと死の淵まで追い詰められている様に見える。いずれ青年の命は貫かれると、足掻きに過ぎないと思わせるそんな攻防。

だが違うと、青年の守りは足掻きでは無いと、女は確信していた。眼の光が消えない、何よりも青年の技量が戦闘中に上がっている。何時の間にか女の刺突は再度壁に阻まれ、青年の体を傷つけるのは十に一つになっている。青年は意識していないだろうが、何と末恐ろしい天分か。

息を付かせぬ連突の中、青年は必死に決死に女を観察していた。流派の基礎である「観応」相手の呼吸から体捌き、さらには気の運用までも読み取る見の技。女は凄かった。細剣を扱う戦闘技量も眼を見張るものがあるが、何よりも気の運用。

いくら「循気」で気を練磨しようとも、青年の考える気と、この世界に来て宿った気は似て非なる物だ。それを我流で鍛えていたのだから当然祖語がある。幸い全が違った訳ではなく気の基礎力だけは上がっていたが、それでも違和感はある。例えるなら、それは車の性能は上がっているがドライバーの技量が追い付いていない様なもの。その事実には狼は気付いていたが、違いを真に伝える術を持っていなかった。

そして今、青年の前に飛びつきりの教本が現れた。

眼を凝らせば女が教えてくれる。それは違う、ここはこうだ。そう
だ、それでいい。丁寧とは言えない、優しいなんてもっての外。だ
が、女は確実に青年を指導していた。基礎という場に散乱していた
欠片が、あるべき場所に納まっていく感覚。

幾合も幾合も矛を交え、ここに来て女は気付き始めた。

青年の急激な成長の根底を。決して優れた才能を持つては居まい。
ましてや天賦という言葉で片付けていいものでは断じて無い。鍛え
上げた、磨き抜いた基礎力。これこそが、青年の要であり芯なのだ。

ああ、と。女は恥じた。

青年の武を、才能という一言で片づけてしまった事に。それは一瞬
の心の揺らぎ。戦闘中にあつてはならない明確な隙だった。そして、
千載一遇のチャンスを逃す程青年は甘くは無い。

ほんの僅かに鈍った剣先。

そつと鎧通しを合わせ、滑らせるように細剣を刀身に這わせる。シ
ヤリンと鈴の音が響くのと踏込は同時。細剣は鎧通しの鰐元に流れ、
手首を捻って刀身と鰐で細剣を固めた。細剣と鎧通しは青年の右手
側に逸れるが、拳はまだ遠い。

「しっ！」

左足が飛び立ち鋭く弧を描きなら女の頭部に迫る。

凶器と化した蹴りに女が笑うと、頭を後方にずらした。躲し足先が
女の前髪を掠め飛び去って行くのと、細剣のロックが外れたのが同
時なら、青年の体が独楽の様に回ったのもまた同じ

「らっ！」

軸となった右足を跳ね上げ体の回転に合せながら右足で胴回し蹴りを放つ。

一切淀みの無い連撃は流麗とすら言えた。だが、その視認すら困難な蹴撃ですら女には届かない。スウェーした状態から屈む事によって、女は青年の二連撃を回避した。

その反射神経とバランス感覚は驚嘆というしかない。だが、青年の二連撃を躲した女が尋常では無いというのなら、青年もまた異常だった。身動きとれぬ宙にあつて仰向けになる様に倒れ込むと、地面に手を伸ばしそのまま逆立ち蹴りを放つ。脳のリミッターを外した渾身の一撃は、さながら砲弾の様に女の顔に向かって放たれた。

「やるねえ」

それでも、女には届かない。

青年の蹴撃は紙一重の所で外されると、そのまま女の後方へ飛んで行った。女の眼鏡が地面に落ちていく。その数秒に満たない間に勝負は決するに違いない。今や青年の体は完全に地を離れ女の刺突を待つばかり。いかに体勢が崩れていようと女の攻撃は必殺となって青年の体を貫くだろう。

女は細剣を構え直すと青年に向かって刺突を放つ。

しかし、その瞬間女の直感に閃くモノがあつた。刺突への全エネルギーを回避運動に変換する。体勢が崩れる事など構っている場合では無かつた。女は自分の直感という経験則に従って全力で体を傾ける。

「ちい！」

その直後、女の後頭部を掠めるように必死の弾丸が通った。

それは突き抜けた青年の蹴撃。終わった筈の蹴りは、膝を折り畳み、上体を起こす動作と連動する事によって、後頭部を狙う踵落としとなる。躲した直後に死角から襲う攻撃は、初見では躲せない必倒の一撃だった筈。だが、女は躲した。その危機察知能力はもはや予知に等しいだろう。

青年の背筋にぞわりと怖気が走る。

ああ、本当に何て怪物、何て化け物か。それは恐怖であり歓喜であり諦観だろう。気付かぬ内に青年の唇は弧を描いていた。

かしゃりと地面に眼鏡が落ちた。

勝負は未だ決せず眼前には青年が立つ。女ははっきりと笑みを浮かべていた。今の四連撃。刀で剣を固める技術も然ることながら、ここからの自然な連撃は瞠目に値する。

何よりも、戦闘が始まってからの一連の流れ。

一瞬の機を得る為の堅固な守り。綻びを逃さぬ瞬時の判断力。やると決めたら躊躇わぬ決断力。思考を忠実に実行できるだけの身体能力。地力で負けている相手にここまで徹底出来る者はそう居ない。稀と言ってもいい。青年に対する興味が、此処に来ていよいよ湧き上がる。女は隙の無いゆったりとした動作で眼鏡を拾うと、口を開いた。

「イズミと言ったね。君は何者だい？」

「理知的なお姉さんが好みな１７歳です」

女の問いに間髪入れずに答えた。

我ながら惚れ惚れする程の即答っぷり。戦闘前じゃ間違いなくこんな軽口は叩けんかったな。あの重圧は戦闘が始まると不思議と無くなり、今じゃ何とか平常を保てていると思う。思いたい。

まあ、それはそれとして、女は俺の言葉に一瞬虚をつかれた表情をすると、直ぐに余裕のある微笑を宿した。やばい、ぐっと来た。言ってる場合じゃないけど。

「そうかい。因みに私の好みは前途ある若者だ」

しかも、乗って来たー！

「あれ？意外と俺達って相性良いんじゃないすか」

「前途ある若者と言っただろう、ここで死ぬ君には当て嵌まらないよ。なにより、私より弱い男では話にもならない」

「その言葉を聞いてさらにやる気が上がりました。一応、俺は完璧には諦めて居ないんでね」

「ふふ、理解しているのにそんな言葉を言えるとはね。あの子にも見る目があったという事かな」

女は言葉を弾ませながら目を細める。

それは観察する様な視線だった。やっぱり、ばれてるよな。こつちは既に疲労困憊。無理やり笑みを浮かべているが、通じる訳無いか。それでも、会話を止める訳にはいかない。

「あの子ってあいつの事ですよ。やっぱ教えてくれませんか、
気になって戦闘に集中出来ないんですよ」

「君には関係の無い事だからね。残念ながら教える事は出来ないよ。
しかし、君が私の質問に答えてくれたら口が軽くなるかもしれない
な」

「だから、俺の好みは理知的なお姉さんタイプですって」

「先にも言つたろう。弱い男に惹かれはしないと。私が聞きたいの
は、よく知りもしない相手の為に死地に出向いた理由だよ」

むづ、結構本気で言ってるんだがなあ。
ともかく、女の質問は前提条件からして間違っている。

「すみませんが、俺は知りもしない奴の為に命は捨てられません。
そこまで突き抜けた善人ではないので」

「だが君は今ここに居る。まさか本気で私が見逃すとは思って
いないだろう」

「はは、そこまで樂觀はしていませんよ。ただ、俺はあいつの過去
を知りませんが、あいつの事は多少は知っているつもりです」

「ほう、それは興味深いな」

そう。俺はヒメの事を知らない。

「あいつは、我が儘で意地っ張りで、人の飯を勝手に食う馬鹿野郎
です。あいつと出会わなかったら、もっと楽に生きていたと思い

ます」

けど、出会ってから数か月ヒメとは色んな事をした。それは食事を取りあったり、遊んだり、喧嘩したり、昼寝したり、一緒に夕焼けを見てみたりとか、本当に些細な事ばかりだ。確かに劇的な事は何もやっていないけど、俺はあいつを親友だと思っている。

「本当、苦労ばかりで、嫌になった事もありますよ。でも、あいつと一緒にいれて良かったと、あいつと出会って、あいつを知れて本当に良かったと思っています。だから、貴女の質問には答えられません」

「なるほど。確かに私の質問は的を外しているようだね。では質問を変えよう。君は何故あの子の為に命を捨てれるんだい」

「ああ。それなら簡単だ」

俺はヒメに感謝している。

この世界に突然飛ばされ、独りだった俺に暖かさを取り戻してくれた。あまつさえ逃げようとした俺に、ありがとうと言ってくれた。あいつは、ヒメは俺の自慢の親友だ。だから、俺は命を捨てれる。これが二人の親友によって生かされた、俺の贖罪であり感謝への返答。

「あいつに生きていて欲しい。それだけっすよ」

青年の言葉に女は目を瞬かせた。それは、明かりを見て眩んだ様な

表情だった。

「なるほど。イズミ、君の考えは実におもしろいよ。偽善とってもいい。あの子も随分と楽しい人間と出会ったものだ」

「褒め言葉として受け取りますよ。で、口は軽くなりましたか。こつちも恥ずかしいんですから」

「ふふ、判っているさ。君の答えは私の重しを取るには十分だったからね。まあ、あの子はあるべき所で、何も起こせない様に過ごすだけだよ」

「何すか、その微妙すぎる情報は。もちつと具体的に言ってくれもいいんじゃないすか」

「気にする事は無いだろう。どう足掻いても君はここで死ぬんだからね」

「そうかもしれませんがね。けど、昔の偉い人が言っていましたよ。諦めたらそこで人生終了ですよって」

「なるほど。やはり君は諦めない人種の様だね。全く興味深い、試したくなつたよ、君が何処に行くのかを」

「ってことは」

「私も全力を出そう。その末で死ぬんだね」

「……………人生そんなに甘くないか」

嘆息し、気を練り上げる。

会話の内に循環させたおかげで傷はあらかた治っている。だが、その分気の総量が減っていた。女の動きに付いていくために無茶をさせたせいだ。しかし、それでも望みを捨てるわけには行かない。死ぬのは仕方ないが、死にたくは無い。それが、青年の覚悟だった。

眼前には傷一つ負っていない美貌の女。

その出で立ちは青年との攻防の後でも変わってはいない。だが、その気配が膨れ上がる。この空間全てを塗潰す様な圧力は先程までとは一線を画していた。

女の体から淡い燐光が溢れ出す。

それは青年が気と呼んでいる魔力の奔流。基本的に魔力とは単体では、体内での浸透かそれからの伝達でしか効果は出ない。故に術理を介しないと発現しないのが常識である。

だが、魔力にはもう一つ通説がある。

それは、魔力に習熟すれば術理を用いることなく発現可能という事だ。これは使用者の強さを測るバロメーターとして用いられる。そして、女が発する魔力の強さは桁が違っていた。一流と呼ばれる者達の中でもさらに一握りの存在。

それが、女の立ち位置。

エメラルドグリーンの光を纏い、大気すら鳴動させる女はもはや次元が違った。勝てるという見込みを全て無くす、絶対的で圧倒的な強者の風格を漂わせ、女が口を開く。それは、先の青年の前口上に良く似ていた。

「ウィンドマスター。シルフィア・W・エドウィン。参る」

そこからは、勝負にすらならなかった。

始まりの鐘 2 / シルフィア・W・エドウィン（後書き）

すみません。7話目にして突然タイトルを変更致しました。理由は伝奇よりも奇譚の方が語感がかいから！本当に勝手ですみません。もう、タイトルが変わる事は一切無いので、これからも「狼狼奇譚」をよろしくお願い致します。

ともかく、漸くバトル。展開が遅いぞー。

それで、主人公が今回使った攻撃は、無手で地上最強を目指す某圓明流の技そのままです。「旋」「弧月・裏」ですね。一回書いてみたかった。反省はしてません。……した方がいいですね。

始まりの鐘3 / さよならだね

全身を紅に染め青年が地に伏す。

風の魔術で全身を切り裂かれ、細剣で体を貫かれた体は満身創痍とすら言えない瀕死の状態だ。もはや、青年が地面に転がった回数は数えるのも面倒な程。だが、その度に青年は立ち上がり、女に潰された。青年を殺そうと思えば女は赤子の手を捻る様に容易く殺せるだろう。しかし、女は青年を殺さなかった。

まるで、何かを測るように、

何処まで行けるのかを確かめるように女は青年を攻撃し続けた。

「さて、イズミ。君は何故立つんだい。君は間違いなく死ぬ、それだけの傷は与えているからね。だから、もう眠ってもいいんだ。そんなに苦しむ必要は全く無いんだよ」

「い、ち秒でもな、がく生きれば、なに、かおき、るかも知れない」

口に溜まった血と疲労が、青年の言葉を途切れさせる。

むしろ、意識を保ち女の言葉に返せるだけでも驚愕に値するだろう。事実、女は感動に近い感情を覚えていた。最初に浴びせた魔術からの再建もそうだが、絶望に近い現状ですら眼から光は消えて居ない。

青年も判って居る筈だ。

力の差を、打開出来る策が何も無い事も。だが、それでも尚青年は諦めない。その意志の強さ精神力だけで言えば青年は一流と言えるけれど、それだけでは足りないのだ。根性だけでは、弱肉強食の世界である子と共に生きる事は出来ない。

「大した夢想だね」

風が舞う。

それは容易く青年を弾き飛ばすと地面を舐めさせる。それが、何度も何度も繰り返される。倒れ、起きて、倒れ、起きて、また倒れてもはや、地面ですら青年の血によって赤に染まっていた。

女が青年に近づき、身体を切り裂く。

細剣が青年の体を通り抜けたその瞬間、とうとう、青年の眼から光が消えた。前のめりに地面に倒れていく。どさりと、物体が落ちる音がした。意志の光が消えた以上、立ち上がる事は二度とない。

「がんば、れ、負、けんな、ちか、らの限、り生きて、やれ」

ぼそりと青年は何かを呟いた様だが、女は気にも掛けなかった。

女は失望を隠さずに嘆息した。

希望が大きかっただけに、その失望の幅も大きかった。青年が女の琴線を震わすには、後一步何かが足りなかった。それはきつと小さなモノ。けれどきつと大きなモノ。その一步に青年は届かなかった。

女は細剣を消すと、青年にも目もくれず丘の淵に視線を送る。

そこには、女の魔術に縛られ姿を消していた狼が居た。戦闘の途中、丁度青年が四連撃を出した辺りから狼は丘に戻って来ていたのだ。それに青年は気付かなかったが女は狼の気配がした瞬間に魔術を發動させ狼を捕えていた。女の当初の目的は既に達成されていたのだ。女は青年の骸に背を向けると狼に近づいていく。

「残念だったよ」

それが、青年に送る女の別れの言葉だった。

これで、始まりもしなかった物語は終わりだ。青年は自己満足を抱えたまま死に、狼はあるべき場所に送られ、女はまた退屈な日常を送るのだらう。ああ、と女は空を眺めた。そこには白銀の月と黄光の月が世界を照らしている。何時の間にか空は晴れ、満点の星空の中双月の満月が一際輝いていた。

「折角合わせたんだが、無駄になったね」

ぽつりと呟き、女は狼を見る。

先程まで唸りに唸っていた狼は青年が倒れてからずっと静かだ。これは諦めたのか。まあ、楽でいい。女は狼にかけた結界を張ったまま、空間転移の術式を編み始める。緩やかに流れる様に構築される術式は結界に捉えた狼ごと移動する高等な物だ。それを容易く操る女の技量は目を見張るものがある。

だが、それでも結界の強度を維持したまま作る事は難しいのだろう。狼に掛けた結界が弱まったのが判った。無論、多少弱まったとはいえ結界の力は相当なものだ。少なくとも今の狼に破れる代物ではない。仮に狼がこの結界を破壊出来るとしたら、それは奇跡と言って差し支えは無いだらう。故に女はゆくりと余裕を持って術式を編み上げていく。その途中狼の眼が光り、狼の圧力が高まったのに気が付かぬままに。

ぴりぴりと狼の内部で魔力が圧縮され練度が上がっていく。

一分ともこの魔力を放出する事は出来ない。この魔力が切り札だ。この圧縮された高密度の魔力が最後の希望なのだ。

狼の脳裏には飽きずに何時も同じ練習をしていた一人の青年。

その魔力循環圧縮技術は、長い時を生きた狼から見ても見事なモノだった。だからこそ、魔力の正しい使い方を教えて上げられない事が歯痒かったが、青年には感謝している。自力で戒めを打破出来る可能性を教えてくれたのだから。

ずっと狼は青年を見ていた。

青年は気付いていないけど、密かに練習もしていた。だから、今なら多少の真似事は出来る。回す、廻す、舞わす。必要なのは一撃だけ。その一撃の為に全てを注ぐ。

ぷちんと血管の切れる音がした。

眼球は真っ赤に染まり、視界すらも紅い。それでも、止める訳にはいかなかった。これでは届かない。これでは壊せない。苦しい辛い、けれど、今限界を超えないで何時超えるのだ。

「おや？」

ふと狼を見ると、女は口角を吊り上げた。

女の眼には静かながら気迫を上げている狼が見えた。諦めたと思っただが、そうではなかったらしい。その狼の姿を見て女は思う。やはりこの日に合わせた甲斐があったと。

今夜は双月が共に満月になる「マッチング」の日。

狼族が月の魔力を多大に受ける種族である以上、何かの足しになると思っていたが、これは予想以上だ。けれど、まだ足りない。女が見る限り、今の狼では結界は破れないだろう。破る為には後一押し何かが必要だ。さあ、どうする。タイムリミットは転移の術式が組み上がるまでだ。

かちりかちりと術式が完成していき、それと同じように狼の魔力も練り上げられていく。

こちらの意図が見抜かれたのは必至。けれど、此処まで来て負ける訳にはいかない。やがて、女の魔術が完成したのと、狼の魔力が臨界点を迎えたのは同時。狼の全身を廻っていた魔力が一点に向け奔り出す。それは疾走であり咆哮。圧縮され練磨された魔力は力ある言葉として狼の口から飛び出した。

「ウオン！！！」

狼の咆哮が響き、結界が破壊される。

今までの強固さが嘘の様に、結界は呆気なく壊された。パリンとガラスが破壊された音が響き、転移の術式も霧散する。それは、女の想定内であり予想外。百に一つの確立が成った奇跡の瞬間。女の視線が狼に固定され意識さえも縛られた。狼の事以外考えていない。それは完全なる空白。ぽっかり空いた隙だった。故に、女は感じ取れなかった。狼が起こしたもう一つの奇跡を。

女の間隙を縫う様に突風が奔る。

それは、意識の底の底から叩き起こされた、小さな、けれどとても大きな意志。全ての景色を置き去りに、倒れ伏した青年が女に向かって肉薄した。

「ウオン！！！」

それは有り得ない光景だった。

青年は確かに倒れ、眼から光が消えた後に意識は涅槃の彼方へ消えた筈だ。だが、血に塗れた青年は今まで見た中での最高速で迫って来ている。否、既に肉薄されてしまった。細剣を取り出すの間にも間に

合わない、それどころか防御すら間に合うのか。

青年の右手に握られた鎧通しが女の首筋目掛け振り抜かれる。その速度、その重さ、比類なき一撃は容易く女の首を飛ばすだろう。だが、首筋の一寸手前で鎧通しは止まった。風によるガード。無詠唱による女の魔術が致命を阻む。

しかし、青年は止まらない。

左肘を折り畳みそのまま女の鳩尾目掛け肘撃を繰り出す。ごんという鈍い音が周囲に響き、女は軽く宙に浮いた。風のガードで直撃こそしていないが、それでも衝撃全てを受け止める事は出来ない。

ゆったりとした動作で青年は左肘を伸ばしていく。

遅いの速い、そんな矛盾すら含んだ拳は、とんと、女が張った風の楯に当たった。どこに打つか解らない拳故に女のガードは広く浅い。胸周辺に張られた楯は薄いとすら言えた。だからこそ、貫ける。

青年の震脚に地面が割れ、そのエネルギーは体を伝達し拳に向け走り出す。

凄絶な気すら含んだ拳はもはや破裂間近の爆弾だろう。女の脳に最大の警報が鳴り響く。だが、遅い。予知染みた直感も今回ばかりは役に立たなかった。

女の背筋にぞわりと怖気が走る。

ああ、本当に何て愉快、何て痛快か。それは、歓喜であり熱望であり期待だろう。気付かぬ内に女の唇は弧を描いていた。

パリンと余りにも呆気なく風の楯は消え去った。

風を貫き巻き込むように一筋の光が奔っていく。それは山吹色の拳。研ぎ澄まされた山吹は、翡翠を突き破る必倒の打拳だった。命すら乗せた突きが女の心臓を貫く。命の要が激しく震え、身体全体に衝撃が伝播していく。嘔吐感が湧き上がり、口内に鉄の味が充満すると膝の力さえ抜けていた。有り得ない程の打突。長い人生でこれ程までの打突を受けたのは随分と久しぶりだろう。素晴らしい。全く以て、素晴らしい。

女は気を振り絞って風を操ると、青年から間合いを取る。

そのまま揺らぐ視線を無視し眼前を睨むと、そこには血に塗れた青年がいた。

青年は拳を振り抜いたまま固まっていた。鎧通しを握ったまま、拳を固めたまま、眼光鋭く、青年は立ちながら倒れていた。それは、奇跡の残照であり、最後の一步だった。

狼が青年の下へ走りよる。

唸り、全身の毛を逆立たせる姿は、魔狼というに相應しい。その威圧感は一までの狼には有り得ない力。まるで、何かが解き放たれた様に思える。しかし、それでも女には遥か遠く及ばない。

「邪魔だよ」

女が右腕を振り抜いた瞬間狼に突風が襲い掛かる。

渾身の力で地面を掴んでいるが足りない。風に弾かれ、狼は地面を無様に転がった。だが、諦める訳にはいかない。この命、この魂、全て投げ打つても青年を助けるのだと、狼の眼光が語っている。

「静かにしてくれるかな」

だが、弱い。

風が狼の囲み結界の中に閉じ込める。狼が女の予想を覆し感情を昂ぶらせたのは事実。けれど、今の感動、今の感激には遠く及ばない。それを邪魔する者は、例え狼相手でも許せそうに無かった。

やがて、二人になり静かになった丘に女は満足そうに頷くと、そのままゆつくりと青年に近づいていく。その足取りは、まるで少女がお気に入り存在に会いに行く様だ。だが、確かにそうかもしれない。青年は女が初めて認めた、前途ある若者になったのだから。

青年は未だ虚空を睨みつけている。

その眼光を見るだけで女は興奮すら覚えていた。やがて、青年の視線を浴びながら女は青年のもとに辿り着いた。

彫像の様に固まった青年が、女にはまるで芸術品の様に見える。

そっと、大切なモノに触る様に女は青年の頬に手を当てた。血が固まり砂すらついた顔は、お世辞にも綺麗とは言えない。だが、それが良いのだと女の視線は語っている。

これは彼一人の力では無く、狼の力を借りたのは解っている。

けれど、出来るだろうか。肉体の限界を超え、精神の臨界を超え、魂で戦う事が。青年は完全に完璧に意識を失っていた。死に際にしたのだ。だが、青年は戦った。狼の声に反応して、彼は現世に戻って来た。

期待に応える。

言うのは簡単だがそれを成す事は難しい。だが、青年は見事に期待に応えた。狼の声を魂で聴いたのだ。ならば、あの奇跡はもはや必然だろう。青年は積み重ねた過去で未来を変えたのだ。

ぶるりと女の体が興奮で震えた。彼ならば、彼と彼女ならば、本当に届くかもしれない。

「ご褒美だよ」

女は優しい表情のまま、唇から流れた血をそのままに、青年に優しく口づけをした。

青年の血と女の血が混じり合う。互いの唇を紅に染めた頃、ゆっくりと女は青年から離れた。とたん、青年の体がかくんと崩れる。それを女は優しく受け止めると、地面に仰向けに寝かせた。

結界の中が五月蠅いようだが、気にもならない。彼は自分の希望になっただから。

女はそのまま地面に座り、青年の頭を膝に乗せると、青年の体に治癒魔術を施す。青年の体がエメラルドグリーンの風に癒されていく。流石に失った血液までは戻らないが、今はこれで十分だろう。青年の髪を弄りながら、青年の体を観察しながら、女はこれからの事に思いを馳せる。実に楽しみだ。是非とも秘蔵のワインすら空けて飲み明かしたい気分ですらある。

その中で、ふと、女は青年の手にある鎧通しに目をやった。

そういえば、戦闘中から気になっていたが正直見たことも無い武器だ。似た様な短剣はあるが、魔具でも無いのにここまで頑丈で切れ味鋭い物を女は知らない。ふむと、女は青年の手から鎧通しを抜き取ると目の前に翳した。その刃に思わず女は感嘆する。

月光に煌めく鎧通しは日本刀の美しさを存分に引き出し、見る者を唸らせる力があつた。

また、戦闘中では余り気にもならなかったが、片面が直刃でもう片

面が乱れ刃というのも初めて見る物だ。この刀の刃紋に関しては青年の師の趣味だったが、珍しいという意味ではこちらの世界でも同様で、女は貰っていいかなとすら思っている。

様々な角度から、魔具である眼鏡を通して観ると、日本刀の特殊な構造がよく判った。

正しく魔具作成に力を入れたこの世界では到達出来なかった逸品だ。そこまで判別すると、女は眉間に軽く皺を寄せた。いかに優れた武具だろうと所詮は鉄の塊である。いくら魔力を浸透させ頑丈さを上げようとも、いずれ限界がくるだろう。事実、女が刺突を旨とする細剣使いでなく、斬撃や打撃を主体とする武器使いだったら、鎧通しは只では済んでいないだろう。

これ程までの武具が無くなるのは実に惜しい。

どうしたものか。女はしばし思案すると、にやりと笑った。悪戯を思いついた少女の様な笑みだった。

やがて、丘に落ちていた青年の鞆と青年自身の検査を終えた女は、ゆっくりと立ち上がった。

空はすっかりと晴れ、雲一つない夜空が広がっている。その中で一際目立つ二つの月を名残惜しげに女は眺める。双月は光輝き世界を優しく照らしていた。

自分が認めた青年と宿命を背負った狼はこれからどうなるのだろうか。

その先は苦難の道だ。茨の道だ。か細い光を頼りに暗闇を歩く様な道だ。それでも、その道の先により良い未来があると信じたい。何れにせよ、もう後戻りは出来ないだろう。賽は投げられたのだから。

「さよならだね」

ふわりと風が吹く。下した女の黒髪が爽やかに揺れると、美貌の女は消えていた。月の下には青年と狼の姿が残るばかり。余韻は静かに、始まりの鐘を鳴らしていた。

一夜明けて / サクラ・ヒメ

風のざわめきが聞こえる。

辺り一帯を包み込む風の音は、否が応にも独りである事を意識させる。周囲は薄闇が広がり、形あるものが何一つとして存在していない完全なる伽藍堂。無性に、自分の中身が空っぽだと言われている様で心苦しかった。それでも、独りである事が、何も感じなくてすむ事が、今は心地よく感じる。

兄貴に憧れた、親友を見捨てた、ヒーローには成れない事が解った。息苦しさから逃れる為に力を求めた。本当、これまで俺は何をして来たんだろう。けど、どうでもいいか。俺の全てを薄闇は包んでくれる。痛さも、辛さも、怖さも。全て無くしてくれる。あるのは只安寧だけだ。

だから、もう眼を瞑ろう。

そうすれば全部終わる。楽になれる。もう、疲れた。ゆっくり、やすもう。

「ワン」

けど、何でだろう、

「グルル」

そこまで解っているのに、

「バウ」

俺は立とうとしている。

誰の為に、何の為に。それは、憧れの為か、親友の為か、自分の為か、判らない。けど、天上には薄闇を照らす白銀の光。白いそれは、手を伸ばせば届く様な気がした。

「ウォン！！！」

だったら、手を伸ばさなきゃ、あいつが呼んでいるから。薄闇を切り裂く様に一筋の光が走る。まるで導かれる様に光に向かって飛び込む。後には微笑む親友が居たような気がした。

ゆっくりと引き上げられる様に意識が浮上する。

微睡みで寝ぼける頭は全く機能していない。何時寝たのか、どこで寝たのかすら覚えが無い現状は、ぽんこつと言っても過言ではないだろう。

仕方なしと、何時も通り循氣を行った。

気が一瞬にして全身を巡り脳が瞬時に覚醒する。強制的に叩き起こした脳は今俺がすべき事を正確に弾き出していた。ぶわっと冷や汗が流れ、がばりと跳ね起きる。身体に鈍痛が響くが気にしてる場合では無い。

「ヒメ！！！」

立ち上がり周囲を睨む。

夕焼けが照らす丘は平和そのもの。戦闘痕さえ無ければ昨夜あった事など嘘の様だ。だが、そこにヒメの姿は無い。また、俺だけが助かったのか。また、俺は裏切ったのか。

「ヒメ！」

叫び、丘を見渡す。

当然だがヒメの姿は見当たらない。けど、それでも叫ぶ事を止めれ

なかった。

「ヒメ」

「ヒメ」

「ヒメ」

呆然と、うわごとの様にヒメの名を繰り返す。

身体が痛むがそんなのは全く気にならない。ただ、後悔だけが胸を埋め尽くしていた。俺が強かったら失う事は無かった。あいつを守る事が出来たんだ。

地平線には沈もうとする太陽が見える。

今日も綺麗な夕焼け空だ。なのに、何でヒメが居ないんだよ。

どこを歩いたかは判らない。

気付いたら洞穴の前に立っていた。何時だって俺とヒメは此处に居た。喧嘩して離れた時も結局ここで仲直りをした。

そう、ここは俺達の家だった。

だけど、眼前の空間はどうしようもなく空っぽだ。食事する時に使う焚火セットも、貯蔵してある岩塩も、鞣した毛皮も全部ある。けど、その空間に確かにあった温もりは消えていた。勝手に眼から涙が零れる。拭っても拭っても、涙は止まらなかった。本当、何て無様だろう。

「ああああああ」

嗚咽が喉から零れ、後から後からヒメとの記憶が脳裏をよぎる。

ヒメは親友だった。大切な相棒だった。だけど、俺はもうあいつとは会えない。俺は守れなかったんだ。

瞬間、背筋に寒気が奔る。

身体に染みついた危機回避能力は、無粋なまでに意志さえ介さず回避運動を行使していた。眼前を銀の弾丸が走り抜け対象を視界に収める。その瞬間、意識が真っ白になった。

目の前には銀髪の少女。

あいつとは似ても似つかないのに何故俺はあいつの事を思い出したのか。空になった思考は腰に差してある鎧通しを抜くのすら忘れ、間抜けにもぼつりと一言零すことしか出来なかった。

「ヒメ」

それは、何時かの焼き直し。

あいつと出会った時と同じだった。夕焼けのオレンジが世界を照らし、眼前の少女は銀の髪を翻すと金色の瞳で相対する。少女は睨み、口を開いた。

「この、バカ者が!!」

……………うん？

え、と。俺、罵倒された。少女の言葉が何故判るのかは今はいい。ただ、見ず知らずの少女にいきなり馬鹿呼ばわりされるのは全く以て理解出来ない。だが、こちらが言葉を発する前に少女はマシンガンの如く言葉を連射してきた。

「何を勝手に居なくなっておるのじゃ！よりによって人が用を足しておる時に眼を覚ましよって、儂に喧嘩を売っておるのか！」

「いや、あのさ」

「五月蠅い！だいたいお主は人の氣を知らんと、何をふらふらしとるのじゃ。戻った時にお主が消えておった時の儂の氣持ちが判るか！このバカ者が！！」

「あ、ごめん」

「謝つてすむなら官憲はいらんわ！そもそも何じゃその氣の入っていない謝罪は、このバカ者が！！」

「はい」

いや、どうしようこの状態。

少女は尚も言いつのり、この短時間で馬鹿という言葉は既に二桁に届こうとしている。しかし、それでも少女は言葉を止めない。随分と鬱憤が溜まっていたようだった。

というか。

正直まさかという言葉がずっと頭を回っている。姿形は全く違うし、俺はあいつと言葉を交わした事はない。けど、似ている気がする。はつきりと喜怒哀楽の感情を出す所とか、その雰囲気とか。はっきりとした確証は無い。

だが、不思議と俺は少女があいつという事を確信していた。

未だ文句を言っている少女に近付き、そのまま抱きしめる。その小さな体は確かな温もりを伝えてくれる。ここに居るといふ確かな存在感が堪らなく胸を満たした。

馬鹿、馬鹿、言いやがって、こっちだって言いたい事が一杯あるんだ。

でも、俺の口からはたった一言しか出なかった。

「ヒメ、良かった」

で、とりあえず座って話す事になった。

焚火を囲み、対面には少女姿のヒメが座っている。ヒメの外見は十歳前後の姿で少女というよりはもはや幼女に近い。ここでうっかり何かしてしまうと、ロリコンの汚名に加え犯罪者の烙印が押されてしまうのは間違いないだろう。あな、おそろしや。因みにさっきのはノーカン。ノーカンである。

ともかく、ヒメの頭には犬耳が生え、どうやら尻尾まである様子。その姿を見ると、本当に遠くまで来たもんだとしみじみしてしまう。しかも、何故か銀色のワンピースっぽい着てるしな。もはや、どこから突っ込めばいいのか判らない位突っ込み所満載だが、今の俺はそれ処では無い。気にする余裕も無い。

何故って、そりゃあ俺が羞恥に悶えているからですよ。
ホント、ちよつと待って、さっきまで俺何してた。起きたと思ったらヒメヒメ叫んで、ふらついて泣き喚いて、しまいには抱きしめるって、俺、どんだけ恥ずかしい事してんの！

ちよ、まじで、恥ずい。

仮にこれが記録されてたら、俺恥ずかしさで死ぬ。ていうか、その瞬間飛ぶ。リセットボタン、リセットボタンはどこにあんの。畜生、俺がああタイミングで起きなかったら、絶対こんな恥ずかしい事はしなかった。むしろ、ヒメが恥ずかしい感じになってた筈。もう、ヒメが人型になれるとかどうでもいい。ただ、恥ずかしい。

「しかし、お主もよく儂だと判ったの。儂が人の姿になれるとは言
ってなかったじゃろう」

「ん、ああ」

不意にヒメが口を開く。

正直、今は何を話せば良いのか判らなかったのを助かった。

「やはり儂の美貌オーラで判ったのか？儂もお主が従者としての心
構えを持つておって嬉しいぞ」

「いや、美貌云々はともかくとして、単純に俺の知り合いはヒメと
シルフィアさんの二人しか居ないからな。そりゃあ、判るだろ」

言つて、俺の交友関係の少なさに凹む。

というか、二人つてなんだよ。二人つて。まじで少ないってレベル
じゃねえぞ。しかも、ヒメの言葉によく判らん単語も入ってるし。
従者て何やねん。

「……ほう。お主が儂と判断したのがそれだけとはのう。これは主
人として賤ねばなるまい。なによりも、あの性悪女をさん付けとは、
どういう了見じゃ」

「ん、殺されそうになったとはいえ、年上っぽい人にはある程度敬
語使うだろう。それより、主人て何さ」

「バカ者。それは儂に決まっておろう。儂が主人でお主が従者じゃ。
あの性悪女に敬語を使う前に先ず儂に使え。このバカ者」

「ごめん、ヒメ。どつかで頭打ったか。俺はヒメの付き人になった
覚えは全く無いぞ」

「これだからお主はバカ者なのじゃ。そもそも、何でお主は僕の言葉が判る。いつとくが、僕はお主の言葉を喋っては居ないぞ」

確かにそうだ。

余りにもヒメが当然の様に喋るし、何だかんだ言つて、シルフィーアさんとも喋れていたから気にもしなかった。というか、今更だがヒメが居るっていう衝撃がデカすぎて些細な事と認識していた。

「えっと、シルフィーアさんが使ってた魔法を使ってるんじゃないの」

「違う。そもそも“チャット意志疎通”は高等魔術じゃ、今の僕は使えん。ならば、後は【主従契約】しかないじゃろう」

「いや、ないじゃろうと言われても」

判らないと続けようとして、突然知りもしない情報が脳裏に走った。

【主従契約】

二人以上の当事者同士で行われる儀式魔術。従者となった者に、主人の知識を限定的に分け与える事が出来る他、主従の魔力を共有することも可能になる魔術。簡単に知識、魔力を共有出来る利点はあるが、解呪が難しい事と、契約中、主人が死亡すれば従者も死亡するというデメリット、また主従契約を結ぶ為には双方の相性が必要な為に、現在使われる事は極めて少ない。

「ふむ、見事に知識を得たようじゃの。これからも判らん事は自問自答せよ。答えれるモノは勝手にお主の脳が教えてくれるからの」

ヒメはこうなる事が判っていたのだらう、ムカつく程に得意顔だ。どや、と言わんばかりである。しかし、流石ファンタジー。おそろしい技術だ。けど、地球にも核爆弾とかインターネットとか宇宙船とかあるから、どっこいかなあ。

まあ、これで俺の懸念は一気に無くなったぜ。やったね。って、んな訳ねえー！！

え、何。何時から俺とヒメは一心同体（一方的）になったの。さらっと流れたけど、主人が死亡すれば従者も死亡するって、かなりやばくない。俺、不死身の肉体貰ってないんですけど！！鏡無い、鏡。額に無って書いてないかな。

「ん、どうした。何か問題でもあるか？」

問題しか無いんですけどー！！

「いや、滅茶苦茶あるからね。何時契約しちゃったの」

「そりゃ、お主が寝てる時じゃ」

「え、片方寝てても、というか同意無くて出来るの」

また、脳裏にざわめき。

主従契約は魔力の波長（相性）が合い、相手に拒絶する意思が無ければ執行する事は可能である。

「うわ、マジか。ていうか、この魔法は禁じるべきだろ。悪用ばりばり出来んじゃない。ていうか、完了形でされてる！！」

「安心せい。魔力の波長はそう簡単には合わん。例えば肉親であろうと波長が合う事は先ず無いわ。仮に何の訓練も無しに合うとしたら、

それこそ砂漠で砂金を探すような確率じゃ」

「いや、だったら尚更おかしいだろ。俺とヒメってそれこそ運命の相手っていうのか。馬鹿らしい」

「運命を馬鹿にするなバカ者。だいたい、俺とお主は訓練しておつたろうに。ほら、あれじゃ。あの跳躍鳥を捕える為に色々した時じや。特にお主は魔力の扱い方はともかく流し方は上手いからの。それを踏まえてあれだけ一緒に寝食を共にすれば多少は合うわ」

ああ。確かにロケツ鳥捕獲作戦の時に人狼一体の境地とか言ってヒメにメツチャ合わせようとしたし、ヒメに「観応」使いまくってたわ。けど、納得出来ねえー！

「まあ、俺と【主従契約】出来る事は名誉と思ってよいぞ」

えへんと、無い胸を張り満面の笑みで語るヒメを見て、脱力した。もう、怒る気にもならない。この傍若無人さ、本当ヒメらしいと心底思う。実際今まで狼の姿で、突然人になり言葉を話している事に、正直違和感があった。けど、やはりヒメはヒメなのだと納得した。

この感じ、正しく俺が命を懸けた親友である。

思ったら、もはや笑いしか出てこない。何はともあれ俺は失わなかったのだと、此处に来て、漸く安心できた。

「む、何故笑うのじゃ。ここは、泣いて感激すべきであろう」

「はは、そうだな」

親友の為に命を懸けるのは当たり前。

それがただ主従の形になったただけだ。英語が苦手な俺が異世界語を

理解した利点や、異世界の常識が判るだけで十分にお釣りがくるだろう。だったら、別に問題は無い。無い筈だ。

まあ、半年近く一緒にいたしなあ。

むしろ、今更か？ともかく、折角だしそれらしい事をしてみるのも良いかもしれない。

立ち上がりヒメの前に移動すると正座する。

訝しむヒメの顔を見ながら、腰に差してある鎧通しを鞘ごと抜くと両手で持ち直した。ヒメと俺の間に刀を持っていき、右手は柄に左手は鎧辺りを持ち少しだけ刀を抜く。

そのまま、ヒメの眼を真つ直ぐと見て言った。

「私、五澄草麻の剣と拳に懸け、貴女を護る事を此処に誓います」

金打。

キンと鞘に戻した鎧通しが音を立てる。それは誓い。絶対に違えぬという約束だった。

「許す」

ヒメは微笑むと一言だけ、言葉を口にした。

やべ、恥ずかしい。慌てて若干赤面した顔を隠す様に元の位置に座り直す。焚火の明りではれないとは思うが、それでもなあ。やっぱ、慣れない事はするべきじゃねえね。伺う様にヒメを見ると、ヒメは腕を組み明後日の方角を向いていた。

「だいたい、名乗りが遅いのじゃ。先にあの性悪女の方がお主の名前を呼んでおった時は、本気で殺意が湧いたわ」

「あ、そういえばそうだな。わるい。何かヒメが当たり前に話してくるから、忘れてたわ」

「ふん、まあよい。ところで、お主の故郷ではどっちが家名なのじゃ」

「五澄が家名で草麻が名前だな。というか、本当に申し訳ないんだけど、ヒメの名前改めて教えてくれないか？やっぱ、わるいしさ」

今更だが、ヒメにも本名は有る筈だ。

それならば、俺が決めた名前よりも、本名で呼んだほうがいいに決まっている。

「成る程。草麻の故郷では反対なのじゃな。ふむ。これを知ったらあの性悪女も悔しがるじやろう」

くくと、ヒメはよく判らない笑いを零す。
が、俺の質問をさらっと流したな。

「あのさ、ヒメの本名教えてくれない。流石に名前も知らないのは、なあ」

「う、む」

どうにも、ヒメは齒切れが悪い。

名前の一つでここまで答えに窮するのは、訳ありと見て間違いないだろう。だったら、別にいいか。

「まあ、ヒメがヒメの呼び名のままで良いんだったら、俺は別にいいけどね」

「いいのか？」

「それは多分俺のセリフだよ。何にせよこれからよろしく、ヒメ」
「ま、仕方ないのう。よろしくじゃ、草麻」

視線だけで握手を交わす。

アイコンタクトってマジ便利だ。というか、言葉が通じなくて半年近く一緒に過ごせば、誰でも出来るか。

「ところで、草麻」

「ん、どうした？」

「俺の家名も決めてみんか」

「なんで？」

「やはりこれから人の世で生活する以上、家名が無いのは都合が悪
いからの。じゃったら、俺の名づけ親であるお主が決めるのが筋じ
やろう？」

「いや、別に気にする必要はないと思うけど。ヒメの好きに決めれ
ばいいんじゃないね」

本当になあ。

わざわざ好き好んで俺に頼む必要はないだろうに。律儀というか何
というか。だいたい俺にネーミングセンスは無いつつの。ヒメも
「姫」から取った位だしなあ。うん、俺センスねえ。

「バカ者。俺が決めて良いと言っておるんじゃないから、お主が決めい」

「マジでか？いや、別にいいけどさ。変でも怒るんじゃないぞ」

「ふん、俺を納得させてみよ」

「何で上から目線やねん」

しかし、名字ねえ。

ヒメと言う単語に合わせ、尚且つ語感が良くないと駄目だろう。簡

単に言ってくれるが普通に難問だ。うーむ、佐藤、鈴木、田中、後藤、日本に多い名字が一杯出て来るが、どれもヒメには合わない気がする。というか、ヒメって二文字だけだと、姫を連想するからどうにも難しい。

「草麻。そこまで悩むんなら、別に今度でよいぞ」

「ああ、ちょっと待って。もう少しで出来そう」

嘘です。

全く良案は出てきません！くっ、こっちに来てはや半年。日本語の連想力が落ちた気がする。普段から使っていないマジで落ちるんだよー！ひめ、姫、ヒメ。駄目だ、世界一有名な配管工の姫しか出て来ない。桃ヒメは流石に不味いだろ。桃、ピンク。……あ。

そういえばと、こっちに飛ばされた切っ掛けが思い浮かんだ。それはマイポジに植えてあった木の名前。というか、あれがあったからこそあそこは俺のマイポジになったのだ。ふむ、語感も良いし、意味を聞かれても悪い気はせんだろう。よし、これに決定。

「サクラ・ヒメ。でどうだ」

漢字にすると、桜姫。

単純だけどそうわるくは無い名前だと思う。ヒメは何回かサクラ、サクラと口ずさむと、にっこりと笑った。

「サクラ・ヒメじゃ。改めてよろしくのう、五澄草麻」

正しく、花咲く様な笑みだった。

そのヒメの表情を見て、俺は密かに一心地付いた。

ホントよかった。何も起きなくて。以前名前を決めた時は死にかけたからな、流石にあれはもう二度と御免である。あの時は本気で焦ったからなあ。マジで殺される五秒前、もう二度と性別確認しねえと思ったね。と、不意に思う。あの時、俺、ヒメに何した。

「どうしたんじゃ？草麻」

「いや、ヒメって名前を決めた時を思い出して」

あ、やべ。

俺、迂闊すぎ。

「ヒメ、どうかし……」

旅立ち1 / 行きますか

昔々のお話です。

世界に文明という言葉が漸く出てきた時代に突然それらは顕れしました。それらは二つの種族に分かれており、その二種族は余りにも人知を超越し余りにも理解の範囲外にいたので、人々は彼らを神と悪魔と呼びました。

やがて、二つある大陸に神と悪魔は降り立ちます。

神は北西に位置するロシアナ大陸に、悪魔は南東部に位置するゴンドーア大陸にそれぞれ居を構えました。二つの大陸はロシアナ大陸の南東部とゴンドーア大陸の北西部で繋がっており、そこが世界の中心とされました。

もともと彼らの仲が悪かったのか、それとも世界の中心が火種になったのかは判りません。

ただ、神と悪魔は互いに嫌悪しあい常に争っていました。二つの大陸を纏め、一つの世界エンゲア大陸を制覇する為にです。その戦いは何度も何度も繰り返され、世界すら崩壊すると言われる程でした。そんな終わりの見えない戦いに終止符が打たれたのは突然の事です。

始まりが唐突なら終わりさえも突然に、神と悪魔は戦いを止めました。

戦いが終わると神と悪魔は新しく出来た二つの大陸に移住します。南西海に浮かぶアマハラ大陸に神が、北東海に浮かぶナランカル大陸に悪魔が新しく居を構えました。

やがて、人々が戦いの記憶を忘れ始めた時世界は再び煉獄に包まれます。

神と悪魔が再び覇を競いあつたのです。そして、文明が滅び、新しい文明が出来る頃に戦いは終結し、神と悪魔はそれぞれの大陸に戻りました。世界の中心は誰のものでも無く、誰のものでもありません。

また、長い月日が流れます。

世界の中心は竜の巣と呼ばれ、世界の中心が不可侵の聖域と呼ばれるのに時間はそうかかりませんでした。また、ラシアナ大陸の住人とゴンドーア大陸の住人が過去の戦を繰り返さぬ様、手を取り合い始めたのもこの頃からです。それから人々は国同士で小競り合いをする事はあっても、世界が黄昏に包まれる事はありませんでした。

神と悪魔は眠りにつき、何時かの時を待ちわびるのでしょうか。
五千年前の出来事です。

あの衝撃的な夕方から一週間経った本日。

私、五澄草麻はこの森林を卒業します。今まで色々な事がありました。それでも生き抜いてこれたのは森林の皆様のお蔭です。今まで本当に有難うございました。洞穴を背に森林に向け頭を下げる。気分は完全にアイドル卒業式。私、普通の男の子に戻りますってなもんである。そんな感慨に耽っていると、突然声が掛った。

「何をやっとするのじゃ、草麻」

その良く通るソプラノ声は親友のもの。

ヒメは先程まで出立の準備をしていたので、丁度それが終わり、俺の様子を見に来たのだらう。若干呆れの音色が含まれた言葉は俺の繊細な心をざつくりと傷つけた。何時まで経っても、女は男の浪漫を理解しねえ。やれやれと首を振りたいたい衝動をどうにか抑え、俺は

ヒメに振り返った。

「いや、この森ともお別れかと思うと、感慨深くて」

「ま、確かにのう。お主と逢ってから色々あったわ。しかし、むしろ此処を出てからの方が大変じゃて」

ヒメは俺の隣に並ぶと、視線を遠くに送る。

その視線の先にヒメが何を見ているのかは俺には判らない。ただ、俺は既に一蓮托生を義務付けられている立場だ。文句なんて言える訳が無い。無いが、愚痴位いいだろう。

「俺は楽がしたいんだがなあ」

「ふん。笑いながらでは説得力の欠片もないわ」

「うるさいよ。まあ、正直に言えば、楽しみな部分もあるにはあるからな」

言って、ヒメと用意した鞆を叩いた。

普通の学生鞆の他に、動物の毛皮と蔓で作ったお手製のバッグが並んでいる。共にぱんぱんに膨れた鞆にはこれからの旅に必要な物が入っており、ヒメと話して必要不必要を振り分けているが、それでも大荷物だ。

これで異世界産の教科書とかが入っていたら選別に悩んだだろうが、その心配は杞憂だった。

あの戦闘の後、気づいたら教科書と携帯電話と財布は無くなっていった。おそらく、シルフィアさんが勝手に持っていったのだろう。

幸いというか鎧通しと万能ナイフは置いていってくれたので、実質被害は無いがそれでも一抹の不安はある。何せ、シルフィアさんは高名な魔術師兼研究者らしいので、あれは騒乱の元になりかねん。

まあ、多分大丈夫とは思っけだな。

「その意気があれば大丈夫じゃな。それでは、行くぞ」

ヒメは人間形態から狼形態にシフトする。

淡い燐光に包まれ徐々にフォルムが変化していく様は未だに不思議すぎる。あの十歳程度の幼女姿から巨狼姿だもんなあ。魔術って凄い。

ちなみに、ヒメが来ているワンピースは魔力で編まれたものらしく、洋服というよりも魔術衣らしい。なので、仮に普通の服を着たまま狼へシフトすると、サイズの変化に服が耐え切れず普通に駄目になるらしい。流石にそこまでは万能ではないようだ。

しかし、普通の服を魔術衣にする事態は可能らしく、俺の道衣はシルフィアさんの手によって半魔術衣となっている。これは切り裂かれた部分を直すついでにしてくれたようで、気が付いたらそうなっていた。作成方法は魔力を洋服に編み込み、術式で固定する技術を用いているらしいがよく判らん。

とりあえず、俺が気改め、魔力を小まめに浸透させれば、その内破れてもまた俺の魔力で補修されるらしい。まあ、結局そんな高位魔術を補修に使う位なら、新しく洋服を買った方が早いし、専門の服や鎧の方が遥かに性能が良いので、余程物好きな魔術師しか使わないそうだ。

「よう」

ジャンプし、狼状態のヒメに跨った。

出会ったときは肩高1m位だったのがいまや1.5m近いので、跳

躍しないと乗れやしない。僅か一日でここまで成長するとは、超常現象を通り越して、怪異の類だと思う。とはいえ、魔力を使わず垂直跳びで軽く1.5m跳ぶ俺も大分やばいと自覚はしている。しているが、これからの事を考えるときつと足りないのだろう。シルフィーアさん、マジで化け物過ぎたしなあ。

ともかく、ヒメの急激な成長は封印が解かれたからとの事。

あの戦いでヒメは掛けられた封印を解き、昔の力の一部を使用可能になったらしい。なので、喋れるし、人間形体になれるし、魔術も使える。

そういえば、絵で会話していた時の人になれないと言ったのは俺の誤認で。

あの時ヒメは“今は”人間形態になれないと言っていたらしい。何にせよ、折角魔法ならぬ、魔術が使えるとの事で教えて貰おうと思っただが、とりあえず属性を調べてからという事になった。

それと、魔法と魔術の違いだが、魔法はこの世界という異端審問官が使う技術で、魔術はそれ以外が使うモノらしい。かなり大雑把な説明だが、ヒメの知識がそう言っているので、間違い無い筈だ。多分。

ちなみにこの一週間だが、俺は旅の準備の傍らヒメには気、魔力の扱いと魔術に関する基礎知識を習っていた。魔術に関しては凄いいろになったが、魔力の扱い方に関しては、シルフィーアさんとの戦いで何となく判っていたので再確認程度のものだ。まあ、何故かヒメは不機嫌になっていたが、困ったものである。

しかし、この世界に来て早半年。

漸く、スタートラインに立てた様な気がする。現在の目的はヒメの

封印の完全解除、目標は世界の中心である竜の巣へ到達する事だ。何故封印を解くのに竜の巣かと言うと、そこにはありとあらゆる知識、魔術が眠っているらしく、間違いなく解呪出来るからとの事。むしろ、そこまでしないと解けない封印って何だよと思わんでも無いが、まあ今更だろう。気にしたら負けだ。

それに、竜の巣へ行けば元の世界に戻る術も見つかるかもしれないので行く事に否は無い。

ただ、懸念が一つ。この世界の常識の一つに、黄昏を呼びたくなければ、無闇に竜の巣に触れるべからず。という言葉があるのだが、果たして大丈夫なのだろうか、実に気になる。俺、竜の巣目指してるんだと言った瞬間、捕えられないよなあ。後でヒメに聞いとこ。

ちなみに、現在地点はラシアナ大陸中心から南西に位置するグレートグリーンと呼ばれる場所で、そこから東へ南へ進めば世界の中心に辿り着く。ただ、その間に国やら何やらを通過しなければ行けないので正直三蔵法師並みに大変だろう。気付いたら、おっさんに成ってましたというオチだけは防ぎたいものだ。是非とも、竜の巣へ行かなくてもヒメの封印が解呪出来る事を切実に願う小市民な俺でした。

朝日が昇る。

夕焼けとはまた違う太陽の光を浴びて世界が活性化しだす。木々の葉っぱがきらきらと光り、まるでこれからの旅路を祝福してくれている様にも感じる。本当、色々あったもんなあ。寂寥感が身を包み、今更ながら鼻の奥がつんとした。これから旅を始めるというのに、いきなりホームシックとは情けない限りだがヒメも同じなのだろう。寂しそうな唸り声が小さく聞こえる。

「行きますか」
「そうじゃな」

二人で最後に俺達の家を見た。

小さな洞穴はすっかり片付き、ただの洞穴に戻っている。それでも、俺達の思い出としては十分すぎた。風が吹き、それに乗る様にヒメが駆け出す。もう、振り返る事は無かった。

森林を抜け、三日経った。

一先ず、近隣の街に行かなければ話にならないという事で、現在はグレートグリーンから一番近いエレントの街を目指している。エレントはそこそこ大きな街であり、流通も盛んに行われているよう都市だ。

そこで、冒険者協会という組織に登録したいと思っている。

この冒険者協会というのは最古のギルドの一つで、世界の探索を旨とする組織だ。ただ、既に世界の探索がある程度終わっている現在は、RPGによくある魔獣の討伐や採取困難な材料の調達、商人等の護衛依頼を主な業務としているらしい。

実際、腕に覚えがあり一攫千金を狙うなら冒険者協会に登録すべしと言われる位にその業務は手広く、各種依頼の多種多様さは国からも依頼が出る程。もはや、その規模は各国からも無視出来ない程の大きさを誇る多国籍企業だ。

故に国境や都市毎の検問を通る際にもある程度の融通が利くので、全世界を渡り歩くなら冒険者協会登録は必須だろう。

と言う訳で、エレントに着いたら早速登録できればいいが、出来な

かった時の路銀は獣の爪や牙、後岩塩を売るしかない。買い取ってくれる所があればいいが無かったらマジでやばい。流石にこの年で甲斐性無しと呼ばれるのは嫌です。

そんな俺の心境を無視する様にヒメは軽快に走っている。

トップスピードで無ければ一晩中走り切る狼ならではの持久力だ。景色は既に大自然という風景から人の手が入った様な景色がちらほらと見える様になっている。

例えば、今走っている道だっそうだ。

今までは草原を駆けて来たが、今は道と言えるだろう通りを走っている。もっとも、整備は全くされておらず、何時獣道になるか判らない有様だが、それでも以前に誰かが通ったのは判る。近くには川が流れ、この流れの先に目的地である最初の町が有る筈だ。ヒメの記憶が確かなら。ともかく、計算では後三日もあれば到着する筈。凄い楽しみだ。

夜の帳が降り夕食が終わった。

竈の近くで、日課である筋トレの腕立て伏せをしながら、ヒメに声を掛ける。

「ヒメ。エレントの町まで、後どれ位だっけか」

幼女姿になり、俺の背中に重し変わりとして乗っているヒメは一瞬考え、口を開いた。

「そうじゃなあ。儂が狼形態で走れば一日で到着できるじゃろうが、街に近付けば、人の目もある故、狼形態ではいられぬ。冒険者協会で登録した後ならよいが、何も無い状態で目立つ訳にはいくまい」

「そつだよなあ。じゃあやっぱり途中まで狼でそこから歩きか。それなら到着は三日後位か」

「いや、二日もあればつくじやろ」

「そうかあ」

「何せ、途中からはお主が儂を背負うて走るのじゃからな」

腕立てが止まる。

今、ヒメは何て言った。

「え、悪いんだけど、もう一回言ってくれろ？」

「じゃから、草麻。お主が儂を背負うて走るのじゃ。儂だつてお主を背負うて走つておるのじゃ、まさか出来ないとは言わせんぞ」

いや、多分言つてる事は同じだけど、中身は全然違うだろ。だが、女の子であるヒメにそう言われたら、頷く他ないじゃんか。

「う、ぐ。判った」

「当然じゃな」

背後というか背中であつた気がする。

ちくしょう、完全にヒメ狙つてやがったな。しかし、人を背負うて走るか。俺、その内、おすわりとか言われないよなあ。確かに色は違えど道衣と野袴は似てると言えば似てるけどさあ。

「それで、エレントで冒険者に登録するんだっけ。それって、簡単に出来るもんなん？」

「しかるべき身分と実績があれば簡単じゃが、一般公募は一筋縄ではいかんの。ある程度の身分を証明し、その上で試験を合格せねばならん。ま、今のお主の力なら落ちる事はあるまい」

「ふーん、成る程ねえ。けど、試験はともかくとして、俺身分を証明出来るものなんて無いぞ」

いや、今更だけど俺戸籍も何も無いんだよなあ。

しみじみと自分の立場に涙ほろりとするが、背中に乗っているヒメからの返答が一向に無い。何か嫌な予感がしてきたぞ。

「ヒメ。どうした」

「草麻。お主、今何と言った」

「試験はともかくとして？」

「違うわ。その後じゃ」

「俺に身分を証明するものは何も無いぞ」

ぶるぶると背中中で震える気配。

微弱な振動が体に伝わり、何か変な感じがするが、今はそれどころではない。嫌な予感がびししさ。なにせ、ヒメがまた黙り始めたからな。

「どうした？」

「どうしたもこうしたもないわ！お主は証明術を受けとらんのか！」

「いや証明術ってな」

【証明術】

生まれた時に体に記憶させる戸籍の様なもの。魔力の波長を刻みそれを読み取る器具に記憶させる事によって本人証明が出来る。また、犯罪等によって前科がある場合は上級術者の手によって、証明術の書き換えが行われる。一般的に生まれた時に証明術を受けるが、受けて無い者は「逸れ者」として差別される事がある。また、初めての証明術を受ける場合は一般的な術者でも出来るが、書き換えにな

ると上級術者の能力が必要になる。

「あー。拙いね」

「拙いねじゃないわ！そもそもお主はグレートグリーンで修行しておった武芸者では無いのか。もしや草麻は一族を抜け出たのか？」

「いや、そもそも俺、異世界からやって来た只の人間からなあ。始めっから戸籍なんてものは無えよ」

「……………は？草麻、お主頭でも打ったか？儂は下らぬ冗談等聞きたくはないぞ」

「んん。ヒメに言っただけ。俺、半年前にこの世界にいきなり飛ばされて、右も左も判らん内にヒメに出会って、今に至るんだが」

そういえばと、言っただけ出した。

俺ってヒメに何も話してねえや。流石に絵で異世界という概念を伝える事は出来なかったの、そのまま放置してたんだ。その内言わなきゃなあと思いつつ、今まですっかり忘れてた。失敗失敗、テへと笑う前にヒメは俺の背中から降りると、いきなりどげしと俺の顎を蹴り上げた。

「痛ったあ！ヒメ、いきなり何すんだ」

「お主はいきなり何を言っただけのじゃ。儂は訳が判らんぞ」

胸倉を掴むヒメの眼は全く笑っていませんでした。

嫌な予感的中だぜ。さて、こうなっちまたらしょうがねえ。説明も面倒くせえし、使ってみるか。

いざ、必殺のかくかくしかじか、これこれうまつま。

これ、凄い便利。

旅立ち2 / 知るか！！

荒ぶるヒメを宥める様に、草麻はヒメに今まであった事を説明した。最初は疑わしく聞いていたヒメも、今までの草麻の言動に思うモノはあったのだろう。次第に納得していった。事実、草麻が嵌めていた時計はこの世界では有り得ない程精巧な物だ。一切魔力を使用せず、螺子を回す必要も無い上に時刻のずれは殆ど無いのだ。魔力充電式の時計が世の大半を占めるこの世界に於いて、ここまで精密な機械式の時計は無いと言ってもいいだろう。他にも草麻が履き潰した靴や、鎧通しもまた異世界出身という事に説得力を持たせていた。

「それでは、草麻はその地球の日本で生まれ、突然この世界に飛ばされた訳じゃな」

「そうだな。だから、魔術なんてヒメの知識がなきゃさっぱり判らんし、この世界の常識も判らん。いやあ、本当ヒメが知識を分けてくれて助かったわ」

あつはつはつと草麻は笑う。

彼のその余りにも楽観的な態度にヒメは呆れた。今までの常識が全て奪われ、見ず知らずの土地で生活する。言葉にすれば簡単だが、それを成すにはどれだけの胆力が必要か。しかも、飛ばされた場所はグレートグリーンと呼ばれる人の手の入っていない未開の森なのだ。そこで着の身着のままだけで生存する等生半の事ではない。

「しかし、草麻が異世界人とはのう。もはやお主が何者であっても驚けんわ」

「まあなあ。ていうか、この世界に異世界人が来たという事はある

のか」

「あるにはある。じゃが、歴史に名を残す程の偉人はおらんじやろ
うな。ただ、文献の中におそらく異世界人だろうという眉唾の記録
が残るだけじゃ」

「そうか」

寂しさを宿した横顔は、望郷の念を感じさせた。

しかし、それも当然だろう。草麻にとって此処は異郷の土地なのだ。
家族も友人も誰も居ない辺境の世界。家族の温もりも友人との交遊
も突然全て奪われた彼にとって、故郷はもはや憧れの土地である。
そんな彼が故郷を想うのは至極当たり前の感情だった。ヒメは複雑
な視線を草麻に送ると、ゆっくりと口を開いた。

「草麻は、帰りたいか」

その言葉は、ひび割れた大地の様だった。

そこに瑞々しさは無く、あるのは乾いた感情だけ。まるで、伽藍の
箱に石を落した様な空虚な響きさえあった。本人は気付いていない
が、その表情は触れるだけで壊れそうな儚い印象がある。草麻はゆ
っくりとあくまでも気軽に口を開いた。

「そうだなあ。帰れるんなら帰りたいな」

それは、意図せずとも罪人への判決の言葉となった。

風船の様に軽い言葉でさえ、ヒメの心には重くのしかかる。彼女の
表情には確かな悔恨が浮かんでいた。

ヒメは草麻に【主従契約】を行った。

それは言い方を変えれば草麻の人生を縛る事と同義。何せ、従者は自分の命を主人に握られているのだ。そこに従者の意志の入る余地がある筈が無い。それを承知でヒメは契約を結んだ。

けれど、草麻の実情を聞き、彼に帰りたい故郷があると知った今は、焦りすぎたと心底思う。まさか、草麻に帰りたい故郷があるとは思わなかった。故郷は勿論あるだろうが、そこに固執しない人種だと勝手に考えていたのだ。

仮に帰りたい場所があるのなら、会いたい人がいるのなら、無謀にシルフィアと戦う事などしないだろう。ヒメは草麻の決意を甘く見ていた。

ヒメは草麻に掛ける言葉を持っていない。

けれど、何か言わなければいけない。だが、一体何を話せば言いのだろう。不安と焦燥と後悔が入り交じり、ヒメは口を閉ざす事しか出来ない。草麻はヒメを見ながら、出来る限り自然であればいいなと思った。

「けど、今の俺はヒメの従者だからな。ヒメが目的を達成させるまでは付き合っさ」

「……………お主はそれでよいのか」

「ああ。そもそも帰り方も判らんし、それ以前に帰る方法があるのかも判らん。だから、もう俺はある程度覚悟はしてるよ」

咎めるでも、責めるでもない言葉は、ヒメの心にさざ波を生じさせた。

彼女には草麻の言葉が、もし旅の途中で帰る方法があれば、帰りたい

いという風に聞こえていた。それは、彼女が悲観的になっているせいもあるだろう。

問いたかった。

もし途中で帰る方法が見つかったなら、草麻はどうするのかと。だが、聞ける筈もない。初めて信頼出来る相手を見つけたのにそれが壊れる言葉を直接聞ける訳がなかった。

だから、彼女はこう言うしかなかった。

「そうか」

それは、寂しげな答えだった。

そんなヒメの言葉を聞いて、む、と草麻は大げさに顔を顰めた。予想外だし、止めてくれと言った風である。

そもそも、ヒメが現在考えている様な事を、草麻は全く思っていない。

先程にしてもつい故郷を懐かしんだだけで、何らアピールしたつもりは無かった。それなのに、勝手に自分の境遇の事でヒメが思い詰めているのを見ると、むしろやるせない気持ちになる。

何せ【主従契約】はまだしも、この世界に飛ばされたのは自分の何かのせいであり、ヒメには一切関係の無い事だ。そこを今更気にされても、草麻としては正直迷惑としか思えなかった。ましてや、ここまで思い詰められ、負い目まで感じられた日には、どうしようかと逆に悩んでしまう。

草麻は、親友とは常に対等でありたいのだ。

そこに遠慮や負い目がある様では、全く以て詰まらない。だからこ

そ、気にするなと出来る限り伝えたつもりだったが、どうやら自分は失敗したらしい。

正面に座り、未だ目を伏せているヒメを見て、草麻はがりがりと頭をかいた。

面倒くせえと心底思っていた。草麻は大げさな程深く溜息を付くと、ヒメのおでこを人差し指で強烈に弾いた。それは、いわゆるデコピン。

ばしんと良い音がして、ヒメは一瞬呆然として、反射的に草麻を睨む。

だが、その視線は何時もとは違う弱々しいモノだ。何だ、それは親友よ。

「な、なにをする！」

「知るか！ヒメが何を思ってるのか知らんが、ヒメは偉そうにすれば良いんだよ！どーんと無い胸を張ってる。そしたら俺が守るわ！！」

草麻はびしつと指を差すと、ヒメに向かって宣言した。

それは、むしろ命令に近い強迫文。ヒメは、草麻の言葉にぽかんと口を開くと、次第に唇を歪めていく。ヒメの額が赤くなる頃には、それは苦笑の形になっていた。

「……………何じゃ、それ」

額に手を当て、ヒメは言う。

それに、草麻は力強く返した。すなわち、

「知るか!!」

と。

もはや、完全に勢いだけだった。

言葉で駄目なら行動でいくしかない。草麻の考えは実に短絡的だった。それはバカとも言えた。けれど、そんな草麻の在り方が何より好ましく思える。勝手に壁を作ろうしていた自分こそが、馬鹿だったのだ。

今更ながら思う。

本当に、草麻はバカ者なのだと。だからこそ、自分は【主従契約】を結んだのだと。それを忘れるなんて、自分の方が余程馬鹿者だろうに。

ヒメはきつと草麻を睨み、薄い胸を精一杯張ると、何時もの調子で言葉を発した。

「ふん。まあ、良い。良いが草麻よ。お主は自身の主相手に無礼するとは、判っておるじゃろうな」

「へ、何が」

「人の事を無い胸呼ばわりしておいて、その言い草は万死に値するのう」

みきりと拳が鳴る。

その小気味良い音とヒメの雰囲気草麻は嬉しそうに笑う。

漸くしつくりきた。これでこそ、ヒメと草麻なのだ。肩の力が抜け、ほっと一息ついたのは油断であり気の緩みだろう。故にその代償は言霊となって草麻の口からぼろりと零れた。

「いや、実際無いじゃ……」

あつと口を塞いだが余りにも遅い。

白銀の夜叉が晒っていた。

騾という名の暴力から回復した草麻は片手逆立ち腕立て伏せをしていた。

勿論、その足の裏にはヒメが座り草麻の特訓を手伝っている。その姿はもはや曲芸といっても過言では無い。冒険者協会に登録しなくても、これだけでいけるんじゃないかねと草麻は思った。

「ていうかさ、ヒメは俺の事を何者だと思ってんたんだよ」

「む。てつきり辺境の土地で過ごしておる特殊な一族の出かと思っておったわ。世の人の強さを知らぬ故に、グレートグリーンで修行しておるのかと、な」

「ああ、成る程ね。確かに特殊っちゃあ、特殊だわな。ていうか、辺境の土地に住む奴がある程度の身分にあてはまるのか？」

先程、ヒメは言った筈だ。

冒険者協会に登録するには、ある程度の身分を証明しその上で試験を合格せねばならんと。辺境の土地の怪しげな一族出身が、ある程度の身分に当て嵌まるのか、草麻の疑問はもつとも言えた。

「そうじゃな。実際のところ、過去に相当の犯罪歴が証明術に記載されてなければ問題は無い。それに、冒険者協会は一人の人間にと

うこう出来る程小さい組織では無いしの」

「そんなもんか」

「伊達に世界最高峰と呼ばれてはおらんよ」

「世界最高峰ねえ」

最高峰と聞いて、草麻が思い浮かべるのはシルフィアの事だ。

正直、手も足も出なかった相手に桁どころか次元の違う存在である。未だに夢の中で殺される位には衝撃的な強さだった。そんな草麻が彼女がどの程度のレベルに居るのか、気にならない訳が無かった。

「なあヒメ。ちょっと聞きたいんだけどさ。シルフィアさんてどの位強いんだ？」

遠慮がちの言葉は、ヒメがシルフィアの事を嫌っているからに他ならない。

理由は知らないが過去になにかあったのだろう。事実、ヒメはシルフィアの話が出た途端に不機嫌そうに鼻を鳴らすと、渋々と言った風に口を開いた。

「あ奴はその性根は最悪じゃが、戦闘力という一点だけに於いては世界最高クラスじゃ。正直、今草麻が生きておるのが不思議な位じゃよ」

「マジかあ」

うんざりとした様子のヒメとは対照的に、草麻はほっと安堵の息を漏らした。草麻の意外な返答にヒメは怪訝な表情を作る。驚くか、

少なくとも不安になると思っていた。

「でも、まあ。ヒメには悪いけど、この世界の最高クラスといきなり戦えてラッキーだったよ。もし、シルフィアさんが三下レベルって言われたら、どうしようかと思ってたからな」

あっさりとした草麻の言葉には、見栄も誇張も無く、それが本気と語っていた。

歩く天災と呼ばれる彼女と戦っておきながら、幸運と言う草麻は豪胆と言えるだろう。もしくは、ただの馬鹿か。ヒメは嘆息すると呆れた様に言った。

「お主はホントに樂觀的じゃな」

「失礼な。ポジティブと言ってくれポジティブと」

「はいはい、そうじゃな。ま、性悪女と戦って多少は強くなったが、お主はまだまだ弱い。試験は合格するじやろうが、精進を怠ってはならんぞ」

「判ってますよー」

若干不貞腐れた言葉にヒメは笑った。

草麻にはああ言ったが、彼は言うほど弱くは無い。以前、絵で会話していた頃にヒメが言った草麻は弱いという言葉は、半分嘘で半分本当だ。実際は旅する位には強いが、最高峰レベルと比べると弱いというのが正しい評価だろう。ただ、それを言う草麻が彼女を置いて旅に出そうな気がして、誤魔化したのだった。

草麻はヒメの様子に気付いた風も無く、片手逆立ち腕立てを右手か

ら左手に移すと、筋肉に負荷を掛けていく。ヒメは若干ずれたバランスを整えると、上下に動く視界を楽しんだ。出会った頃から全く変わらない草麻の勤勉さは、目を見張るものがある。師匠の教えが良かったのか、彼の元々持つ本質だったのかは判らないが、草麻の師は恵まれているだろう。これほど忠実に教え守る弟子は得難いものだ。

「しかし、お主の流派は富田六合流と言ったが、珍しい教えじゃないですか？」

「そうじゃよ。お主が持つとる短剣といい、修めておる技術といい、やはりこの世界では稀じゃよ。魔術専門の魔術師以外なら、主に武器は長柄を使い魔術を絡めるのが基本じゃよ。そもそも徒手がメインというのは少ないわ」

「魔術はともかく、徒手メインってそんなに少ないんか？」

「少ないの。魔物や魔術が跋扈する中で装備を充実させるのは当たり前。それに、収納の術や魔具を用いれば携帯も容易い。なれば、徒手よりも強力な武具を用いるのは当然じゃろう」

「あー。確かに」

「そもそも、お主の流派は何故短剣の守りに使い、攻めが徒手なのじゃ。それならまだ短刀を二振り持ったほうが良いじゃろう？」

「言つたろ、俺の世界は基本的に平和なんだ。だから、無闇に殺すのはご法度。むしろ、相手を傷つけずに収める方を良しとする風潮がある。だからこそ、うちの流派は剣法に拳法を取り入れたらしい。

まあ、流派の元は総合戦闘術だし、基本的に殺法てのは変わらんけどな」

「何とも難儀な話じゃな」

「まあね。だから、既にうちの流派は俺と師匠、あとは師匠の師匠である大師匠しか使い手は居ないよ」

「大丈夫なのか、お主が居なくなったら富田六合流は断絶するじゃろっ」

「問題なし。もとより、師匠も大師匠も富田六合流は俺達の代で終わらせる予定だったと言ってたからな。平和な世に殺法は要らないってな」

「そっいうもんか」

「そっいうもんだよ」

言って、草麻は腕立ての手を左手から再度右手に移した。
ヒメは草麻の足の裏に座ったまま、足をぶらぶらさせている。

「しかし、マジでどうしようか」

「そっじゃなあ。お主にはああ言ったが、俺も証明術を受けてはoirん。俺の予定ではお主が冒険者となり、俺はそのパートナーという事で登録をする筈だったんじゃが」

「パートナー登録って、相手の冒険者に全て責任が行くって奴だよな」

「そうじゃ。全責任が相手にいくから余程の信頼関係が無いとパートナー登録はせんのが普通じゃ。それが新人となれば尚更の。しかし儂と草麻は【主従契約】をしておるから協会に変な目で見られる事はないしの」

幼女が主人の従者か。

執事や侍女の様な職業でなければ、地球では完全に変態決定である。この世界では果たしてどうなのか。草麻は、【主従契約】の恩恵で知識と常識はある程度判るが、そういう細かい所までは理解出来ない。うーむと草麻は唸るしか無かった。

「証明術って今から発行出来ないのか」

「出来ない事はないが金がかかるし、結局登録者の過去が証明出来ない以上、意味はないの。それなら、いつそ架空の証明術を買った方がマシじゃ」

「偽の証明術って。それ、バレたら拙くないか？」

「そりゃ、拙いに決まっとる。その間に余程の功績を立ておらねば、即刻犯罪者の仲間入りじゃ。じゃから、この方法は最悪の場合のみじゃな」

「了解。それじゃあ、冒険者育成学園ってのはどうなん。勝手に知識が出て来たんだけど」

「ああ、冒学じゃな。それなら、証明術が無くても冒険者になれる。戦争孤児や証明術を受けなかった者への救済措置の一つじゃしな」

「だったら」

「うむ。草麻の言うとおり冒学なら正規で冒険者になれる。じゃが、一つ問題があつての。冒学には必ず最低でも二年間在籍せねばならんのじゃ。正直、二年の月日は長いわ」

「あー、長いね」

草麻は片手から両手にすると最後のセットに入った。

ヒメは相変らず、草麻に乗って月を見ている。ぼんやりと見上げる月は今日も暖かな光を放っていた。一体、あの日からどれ位の時が流れたのか。彼女自身も正確には覚えていないが、長い時が過ぎ去ったことは判る。諸行無常、その間にいろいろなモノが変わったのだ。それでも、月の光だけは今も変わらず世界を照らしている。このまま、穏やかに過ごせば良いが。難しいか。それは、諦観にも似ていた。ぱつりとヒメが独り言の様に言葉を零す。

「どうしたものかのう」

一瞬、草麻の手が止まった。

それは、ずっと彼が考えていた事だった。いきなり異世界に飛ばされ、誰とも会えず、生活の基盤を作る事だけで精一杯だった頃。ヒメに出会い、共に生活し、あの人に殺されかけた事。ずっと、悩んでいた。常にこれからどうすればいいかを問い掛けていた。結局、その中で草麻が得たのは、悩んでも悩んでも今は変わらないという普遍的な答えだけだった。だからこそ、草麻は思う。

「どうしたもこうしたも。………よつと」

草麻は両腕の腕力のみで、突然跳ね上がった。

足の裏に乗っていたヒメは当然、そのまま空中に投げ出され、腕力のみで跳躍した草麻はそのまま反転すると見事に着地した。上空には華麗に回転したヒメが見える。そのまま、落下するヒメを草麻は空中で捕まえると緩やかに言った。

「なんとかなるだろ」

草麻らしい、楽観的な言葉だった。

けれど、その一言には先の為に今を懸命に生きようとする生き様と、理不尽を相手に足掻いてきた男の説得力があった。余りにも簡潔で答えにもなっていないその言葉にヒメは苦笑すると、朗らかに言った。

「ま、そうじゃな」

そこには、確かな信頼が見えた。

まだ知り合って半年だが、伊達や酔狂で【主従契約】を結んだ訳ではない。ヒメは草麻から離れると狼形態になり身体を丸める。彼に習い、楽観的になる事に決めた。明日の事は明日考えよう。起きたら、いいアイデアが浮かぶかもしれない。

しかし、なんとかなる、か。

実に草麻らしい言葉だ。反芻して思わず笑ってしまう。抽象的すぎる言葉なのに、すくと納得してしまった自分さえも可笑しかった。だが、一つ言っておかねばなるまい。ヒメはぐると喉を鳴らすと「雲流」を行っている草麻に一声かけた。

「甲斐性無しにならんようにな」

ぎくりと、草麻の「雲流」が滞ったのを見て、ヒメは笑った。

明日も楽しみだ

旅立ち3 / お主のせいじゃな

「走れ！草麻」

「はいよー、ヒメ様」

拝啓

父さん、母さん、兄貴、静流。

月日が経つのは早いもので、異世界に来てもうすぐ七か月が経とうとしています。仮に僕が地球に居たら今頃進路に悩んでいたのでしょうか。考えても仕方の無い事ですが、ふと考えてしまう事があるのです。

例えば気付いたら幼女の従者になっていたり、例えばさらにランクが落ちて幼女の乗り物扱いされていたりすると、どうしようもなく思ってしまうのです。俺の人生大丈夫かと。せめて、人並みになりたいと切実に思う今日この頃。

敬具

ロシアナ大陸・グレートグリーン付近にて。

五澄草麻

P S

実際、現在の境遇がそこまで嫌じゃない俺はやばいのでしょうか。誰か、回答をお願いします。

「ふむ、思ったより進んだのう」

「そいつは、良かった」

時刻は昼飯時、太陽は頂点にさしかかろうとしていた。

朝から走り通しだったので、休憩は望むところ、むしろ休ませて下さいである。やれやれと適当な木陰に移動し荷物を降ろした。ヒメが乗り総重量九十キロ近い荷物は、どすんと乱暴な音を立てた。

ふうと一息つき空を見上げる。

木の葉の隙間から光が流れ落ち、きらきらと乱反射していた。その光景に、ふと昔やった歩荷のバイトを思い出す。あの時の俺は百キロが精一杯だったんだが、師匠の静流はふざけた事に百五十キロの荷物を担いでいたんだよなあ。しかも、結構軽々と。さらに移動中もひいひい言ってる俺にむかつく程に余裕の笑みを向けてくるし、この化け物野郎と何度思った事か。それが今や俺も同類。いずれ辿り着く境地だったんだろうが、なんつうか少し凹むぜ。と、ヒメが怪訝そうに声をかけてきた。

「草麻、どうかしたか」

「いや、今更ながら遠い所に来たもんだなあ」と

「何を言っんじゃない。竜の巣まではまだまだじゃぞ」

はは、とヒメの言葉を誤魔化す。

距離的な意味では無いんだな、これが。

「それで、昼飯にするのか？」

「そうじゃな、時間もちょうどよいし、昼食にするか」

「了解」

鞆から干し肉を取り出し、ヒメと分ける。

粗塩を振りかけると、それは立派な食事だった。日本にいた頃では考えられない位質素な物だが、人間の適応能力は存外馬鹿に出来ないもので、すっかり慣れてしまった。ヒメも犬耳をぴこぴこ動かしているし、食事に文句は無いと思う。

昼食が終わり、まったくとした時間。

昼寝タイムに突入しそうなヒメに、ふとした疑問を聞いてみた。

「そつえばさ、エレントって検問みたいなのあんのか」

「……んん、検問か？ああ、あるぞ。じゃが、安心せい。犯罪者として指名手配されとらん限り、普通に入れるわ」

「そうか。いきなり幼女を誑かした犯罪者として捕まる事は無いんだな」

「当たり前じゃ、バカ者。だいたい草麻は人の事を幼女、幼女と。儂よりも年下のくせに生意気じゃぞ」

「そいつは悪い。ヒメと違って若いんで生意気盛りなんだな」

「草麻よ。殴られたいか」

「殴ってから言うもんじゃないぜ、ヒメ」

「ふん、先手必勝じゃ」

言うだけ言つて、ヒメはお昼寝タイムに突入。

その傍若無人さは正しくお姫様だった。しょうがないので、俺は基礎練でもするでしょう。そんな何時も通りの午後だった。

木漏れ日の中、草麻は「錬庄」の練習をしていた。

シルフィアと戦った時に拳に魔力を乗せて撃った。薄ぼんやりとした記憶にあるのは、山吹色に輝く拳。まぐれと言う他ない一撃は正しく至高の一撃だった。問題なのはそれを意識的に撃てない事だ。それは自由自在に身体を操作する事を旨とする彼の流派にとって恥辱といえた。だからこそ、いち早くその感覚を思い出したかった。直向きで愚直なまでに基礎を繰り返す。あの時の一撃を可能な限り思い出しひたすらに再現する。

やがて、正拳突きが千回に届こうかとする時に突然木漏れ日の中に不穏な気配が漂った。

それは、常人なら気付きもしない細かい粒子。だが、草麻ははつきりと感じとる事が出来た。元来の危険感知能力の高さに加え、グレートグリーンでの生活は彼に獣並みの第六感を身に付させていた。草麻は周囲の気配を探る様に気を張り巡らせる。まるで、蜘蛛の巣の様にそれは草麻を中心として広がっていくと、彼の感覚に引っ掛かる存在が七つあった。

草麻は溜息を吐くとヒメに視線を向ける。

彼女は眠そうに眼を擦っているが、額に青筋が浮かんでいる所を見ると、不穏な気配に起こされた事に腹を立てているようだ。

「ヒメ。そろそろ行くか」

「そうじゃのう」

不穏な気配を意に介さずに、草麻とヒメは出発の準備をし始める。音も立てずに草麻達の周囲は囲まれた。それに気付かぬ二人ではないが、相手の出方を知りたかった。とはいえ、誘っているのは実際の所二人であり、奇襲されるタイミングが解っていれば、左程脅威ではないだろう。

草麻は木立に置いていた荷物を手に取ると担いだ。

それと同じタイミングで草麻に魔力の塊が飛来する。余りにも予想通り過ぎるタイミングに草麻は苦笑した。奇襲するなら相手の動きが制限された時を狙うのは当然だろう。草麻は焦ることなく荷物を降ろすと魔力弾を躲し、鎧通しを右手で抜いた。

余りにも自然に躲した草麻に周囲の気配が驚愕で揺らぐと、その間隙を縫う様に草麻は疾走する。

弾けた様な初動は野生の獣そのものの、草麻を眼で追えたのは一握りの存在だけだった。

奔り、草麻は一番近くに居た男に狙いを定める。

その男は長剣を握りしめ簡素な鎧を着ているが、草麻の速度に付いていけない。男は無防備なまま草麻の接近を許すと、長剣を振るう事も無いまま草麻の左拳を顎に受けた。ぐりんと首を支点に男の顔が不気味に揺らぎ、男は呆気なく膝から崩れ落ちた。

先ずは一人。

草麻は油断する事無く周囲を観察しながら、次の標的に奔る。左手に居た男も、先の男と同じ長剣使いだ。二人目の男は既に体勢を整えており隙無く構えている。肉薄する草麻に、男の怒声と共に長剣が振るわれた。袈裟懸けに落とされた剣は威力だけなら大したものだろうが。如何せん遅い。草麻は半身になって剣を躲すと、そのまま男の顎に左拳を合わせた。交差法によるカウンターは男の意識を

容易く飛ばすと、そのまま男は物言わぬ物体となる。

これで二人。

ぞわりと草麻の背に粟が立つ。振り返ると左右から二つずつ魔力弾が、前方には鬼気を纏ったハルバート使いが接近していた。明らかに、草麻の武装と戦法を意識した布陣だ。魔力弾に意識が向けば前方からハルバートが、ハルバードに意識を割けば、左右から魔力弾が草麻を襲う。草麻の一時の逡巡を誘う策だ。

仮にこれがシルフィアと戦う前の草麻ならば、有効打を与えていたかもしれない。

だが、草麻は既にこの戦法をより高いレベルで体験していた。あの電光の刺突と、全方位から襲う風刃と風槌に比べれば兎戯に等しい。

草麻は躊躇う事無く正面に疾走した。

その潔さを見てハルバート使いは殺気を増し、同時にぼうと赤い魔力の燐光が男の体から吹き上がる。淡い光だがそれは紛れもない魔力の奔流だった。魔力を纏った男を見て、草麻は晒う。到達すべき境地への一步。草麻は堪えきれずに唇を歪めた。

一瞬視線が絡み、草麻は重心を左側に寄せた。

その偏った重心を見て、ハルバード使いはあえて草麻の右手側に突きを放つ。仮に穂先を避けたとしても重心から左側に避けるだろう、ならば斧刃で薙げばそれで終わる。今まで数多くの人間を屠ってきた彼の必勝パターンだ。

だが、草麻は男の思惑を打ち払った。

その右手に持つ鎧通しを持って、文字通りハルバードの穂先を鎧通しの峰を持って力の限り薙ぎ払ったのだ。ギンと金属同士の鈍い音が響き、ハルバートの軌跡が左側にずれて行く。そのずれた軌跡に

侵入する様に、草麻は払う動作をそのまま回転に繋げて刺突を躲す。豪と空気を掘削する音が、回転し半身になった背面から聞こえた。唇を凄絶に歪め男を睨む草麻は、獲物を狙う肉食獣の様であった。

ぞくりと男の背中に氷塊が突き刺さる。

それは、怖気だ。一切の逡巡も無く死に向かう精神、重量武器を軽量武器で薙ぎ払うという発想、それを実現させる常識外れの膂力。その全てが只者では有り得ない。怖気が怯みに、それは刹那の硬直を許し、気づいたら男は前方に体を崩されていた。草麻は回転の途中に左手でハルバートの柄を掴み、男の体を崩す様に誘導していたのだ。

引き付けられ、肉薄された間合いは既に草麻の範囲だ。

長柄を持ったままの男は倒された部下と同じ未来を辿るだろう。だが、男もさるもの、ハルバードを瞬時に手放すと、戦意剥き出しで草麻を睨み返した。

にいと草麻はさらに唇を曲げる。

男は草麻の鎧通しに意識を傾ける。この距離、短剣は届くが互いに拳は届かないという絶妙の間合い。来るとしたら間違いなく短剣だろう。あの桁外れの膂力、油断等出来る訳が無い。男は覚悟を決めた。鎧通しがぴくりと動く、狙う場所は首筋か。男は手甲に守られた左手に魔力を集めガードに移った。草麻の眼に赤い魔力が左手に集中していくのが判る。鎧通しを受け止め、出来た隙にカウンターを決めるつもりだろうが、甘い。

視線と意識が交錯し、勝ち取ったのはどっちだろうか。

ずぶりと男の腹部から何かが突き刺さる音が聞こえた。同時、強烈な鈍痛が脳に叩きつけられる。瞬時に嘔吐感が湧き上がり、男は腹部に視線を移した。草麻の右爪先が鎧の隙間から脇腹に突き刺さっ

ていた。

草麻の三日月蹴りは完全に男の意識の範囲外。

予想すらしていない奇襲だった。だが、それでも男は左手のガードを下げる事はしなかった。明らかに内臓は損傷している、余りの痛みに呼吸すら出来はしない。しかし、ここで下げたら命が無い。数多の視線を潜り抜けて来た、一介の戦士の生存本能だった。鬼の如き戦気を放ち、膝を屈さないのは見事としか言い様が無い。

草麻は緩やかに鎧通しを振るった。

男の視線が短剣に固定され、不意に短剣が視界から消える。逆再生をする様に鎧通しが戻るのと、草麻の左足が地面から離れるのは同時。

振り抜いた草麻の左上段蹴りは男の側頭部を綺麗に捕えると、容易く男の意識を闇に沈めた。

もし、男が草麻の戦いは拳足がメインという事を知っていればまた違っただろう。だが、男は結局気付けなかった。一度も攻撃に使わなかった鎧通しに、最後まで拘ったのが男の敗因だった。

男の体から赤い燐光が消え、草麻の背後で動揺が広がる。

男達の中での一番の使い手がやられたのだ、揺らぐのは当然で、敗北が脳裏に過るのは必然。だからこそ男達はこの一撃に懸けた。右手の男から炎の竜巻が、左手の男から水の塊が打ち出される。ただ魔力を込めただけの魔力弾とは密度が、威力が違った。

迫りくる二つの魔術、草麻は昏倒するハルバート使いの腰を掴むと、依然ヒメにかけたジャーマンスープレックスを男に使った。

「エイシャカラー！！」

放物線を描き、男の巨体は炎の竜巻に向かって行く。

これで、炎は解決。ならば後は水だ。草麻は直ぐに体勢を立て直すと落ちているハルバートを掴んだ。ずっしりとした重量感が今は有りがたい。

草麻は槍投げの要領でハルバートを水塊に向かって撃ち出すと、それに追従する様に草麻は走る。

草麻の眼前で水塊がハルバートによって弾け飛び、視線の先には狼狽える水の魔術を放った男が居る。肉薄し拳を一閃した。呆気なく男が倒れる中、草麻は振り返る。

炎の魔術師は自身の魔術を受けたハルバート使いに寄り添っていた。団長という言葉が聞こえる事から、ハルバート使いが盗賊団のボスだったのだろう。草麻は気にする事無く、接近し炎の魔術師をぶん殴った。

周囲に静けさが戻る。

残り二人居た筈だがこの空気を見る限り、結果予想が付く。草麻は鎧通しを鞘に納めた。

「ヒメ、終わったか？」

「とつくに終わっとる」

草麻がヒメの方を見ると、地面から伸びる土の槍に昏倒させられた二人の男が見えた。ヒメの魔術にやられたのだろう。簡素とはいえ鎧が粉碎している所を見ると相当に強い衝撃が与えられたのが伺えた。草麻はとりあえず二人の男達に黙祷する。実は草麻は既に何度か喰らってたりした。

「とりあえず、どうする？」

「そうじゃな、とりあえず身包みを剥がして、七人を並べてくれ」
「了解」

言つて、草麻はいそいそと男達の身包みを剥いでいく。

ポケットに入っていた物は全て回収し、腰に巻いてあるベルトで腕を縛り、脱がせたズボンで足を縛る。最後に各関節を外して終わる。草麻は手早く処理を終わらせると、七人の襲撃者達を一纏めにした。

「終わったけど、どうすんのさ」

蓑虫の様に転がる男達を見ながら、草麻は抑揚の無い声で言った。

「ま、見ておれ」

ヒメは呪文を唱え始めると、やがて地面に手を当てた。

男達の下にある地面が陥没し、陥没した分の土が男達に覆い被さって行く。やがて、男達は地面から顔だけ出した状態になった。七人の男達の首が並ぶ光景はいつそホラー的でさえある。草麻は凄えな魔術と感心しきりだった。

「こんなもんじゃな」

「関節外す必要は無かったな。それで、次はどうするんだ」

「ふーむ。儂等が連絡用の魔具を持っておれば、最寄りの街にそれを飛ばすだけで済むのじゃがなあ」

正直に言えば、ヒメも悩み所だった。

人の往来が少ないグレートグリーンへの道筋で盗賊が出る事は稀で

ある。ヒメは、街に到着するまでは、遭遇しないだろうと考えていた。なのに、遭遇した。これは草麻の奇運のせいではないかと思う。

ヒメは草麻に顔を向けた。

怪訝な表情の草麻だったが、やがてヒメから嫌な視線を感じた草麻は、ばつ悪そうに顔を逸らした。ヒメは何も喋っていないが、その金色の視線が語っていたのだ。お主のせいかと。正直に言えば、草麻自身も自分が余り運が良いほうだとは思っていない。でなければ、此処に居る事すらしていないだろう。イヤな自覚である。

ぽりぽりと草麻は誤魔化す様に頭をかいた。

ヒメはじとりと草麻を見ると口を開いた。

「お主のせいじゃな」

ぐさりと草麻の心に突き刺さった。

やがて草麻は気を取り直すと、真面目な顔を作った。
でないと、やってられなかった。

「あー、とりあえず、超ダッシュでエレントに行つて事情を説明するとか」

「その間に間違いなくこ奴らは動物のエサになっておるじゃろつな」

「ヒメの魔術で結界的なもん張るとか」

「嫌じゃ。何が好きで人の命を狙つた者にそこまでせにやならんのじゃ」

「こいつら全員をエレントまで連行する」

「面倒じゃ。全員分の魔力封じの魔具があればよいが、こ奴らが持つてた分じゃ足らんぞ」

「なら、リーダーだけで連行して、他の奴らは時の運でどうよ」

「微妙じゃのう。少ない人数を連れて行けば、下手すれば、儂等が加害者に見られる可能性もある」

「あー、どうする？」

「さて、なあ。もういつそ、お主の言う通り時の運で行くか」

ヒメが言葉を終えたのと同時、周囲に気配が混じった。

隠そうともしない力強い気配は只者ではありえない。草麻はさりげなく後腰に差してある鎧通しに手を向かわせた。もはや、溜息しか出て来なかった。

「何か用すか？」

振り返り、向かいの木立に声を飛ばす。

がさりと木々を抜け出て来たのは二人の男女だった。男の方は年の頃二十半ばといった所か、男にしては長い金髪と眼鏡を掛けた優しげな風貌は町医者と言っても通じるだろう。だが、実用本位で作られた軽装の鎧の着こなしと左腰に佩いている長剣が男が見事にマッチしている。その風貌に騙されると痛い目を見る事は間違いないだろう。

隣に居る赤髪をポニーテールにしている女は男よりは若いが、歴戦の風格があつた。

後腰に差した二つの短剣と、最低限の防具から速度を活かした戦闘スタイルと思われる。盗賊団よりも余程厄介な相手だ。負けるとは言わないが、簡単に勝たせてくれるとは思えない。最悪、ここで死ぬ事すら念頭に置かねばならないだろう。

額からじわりと汗が流れる。

どうすると、草麻が視線をヒメに送ったのと、男が動いたのは全く

の同時。瞬間的に草麻は抜刀するとヒメの前に移動する。草麻が半身に構えたのと、男が頭を下げたのもまた同時だった。

「君の短剣をくれないか！」

新手の物盗りの手段なのだろうか。
草麻は不意に思った。

出会い1 / いいすよ

視界の先には盗賊であろう七人の男を相手取る二人の男女。

僕は直ぐに二人組の助太刀に入ろうとしたが、隣に居るセリシアに行動を止められた。彼女の瞳には戦闘者としての好奇心がありありと見える。

それを見て僕は何も言わなかった。

こうなった彼女を止めるのは難儀だと知っているからだ。事実、助太刀する必要も無く、珍しい装束を着た彼は盗賊達を容易く蹴散らしている。隣のセリシアは彼の武器を使わない戦法に興味を抱いている様だが僕は違った。

彼の持つ短剣。

見た事も無い剣身とその鋭さに眼を奪われていた。彼の短剣に魔力を浸透させたらどうなるのだろうと埒も無く考え、興奮していくのが判る。やがて、彼がハルバート使いの男を相手にした時に僕はいいよ感極まった。その衝撃は電撃の様に僕の体を貫き、視線の全てを奪う。それは感激だった。

抜刀したまま、草麻は油断無く眼前の男を観察する。

男は頭を下げたままの姿勢だが、そこから何をしてくるか判らない以上気を抜く訳にはいかなかった。殺伐とした空気が広がり、場が重くなっていく。じりじりと間合いを削られる感覚は予想以上に草麻の神経を尖らせる。

そんな草麻を見て、男の隣に立っている女は溜息を付くと男の後頭

部を殴った。

いたつと男は言うが、女は歯牙にもかけない。長い付き合いだが男のこういう性格は拙いと思う。

「突然、すまなかったね。こいつに悪気は無いんだ。許して欲しい。とりあえず自己紹介をしようか。私はセリシア・エークリル、一応準二級冒険者をやってる。それで、隣のこいつはクロス・ヴェルンデ。鍛冶師兼冒険者だ」

女、セリシアは準二級冒険者の証である宝玉の嵌った腕輪を見せた。ヒメはセリシアの言葉に怪訝な表情を隠さない。セリシアは準二級冒険者と軽く言ったが、準二級は一流のランクだ。言っではなんだが、こんな辺鄙な場所にそう居て良い存在ではない。ヒメは草麻の後ろから隣に移動すると口を開いた。

「僕はヒメ・サクラじゃ。こ奴はわしの従者で草麻・五澄。エレントに行く途中じゃよ。それで、主らは何しにこんな所にいるのじゃ」

「それは、イズミ君の短」「ああ、実はグレードグリーンの近くの山に鍛冶に使う鉱物を採掘しに行く途中でね。それで、ついでに最近出没している盗賊団討伐の依頼も受けたんだけど、そっちは片付いてるみたいね」

セリシアはクロスの口を抑えながら、ちらりとヒメの背後を見た。そこには地面から生えた男達の顔が七つ。さっきの戦闘も見ていたが、間違いないだろう。

「成る程の。それで、疑う訳じゃが依頼書はあるのか」
「勿論よ。はい、これ」

セリシアは腰につけているポーチから依頼書を出すと突き出す様にヒメ達に見せた。

それには、冒険者協会発行のサインがしっかりと記載されている。ヒメは注意深くそれらを観察すると首を竦めた。

「判った。それで結局の所、主らは僕等に何をさせたいのじゃ」

半信半疑がありありと判る表情を作りながらヒメは言う。

セリシアはクロスを邪魔するなときつと睨んでから、口を開いた。クロスの鍛冶師の能力は認めるがそれに関すると暴走気味になるのがクロスの悪癖だった。

「そうね。私は後ろに居る男達の身柄を引き渡してくれば、それでいいわ」

「ふん。そう簡単にはいと思うか」

「……だよねえ」

セリシアはヒメの言葉に同意すると、溜息をついた。

こういう風に、依頼された側と偶然討伐した側が同じタイミングで出くわした場合は厄介なのだ。単純に依頼料の配分、または懸賞金の配分が問題になるし、俺が先だった、いや俺がと、冒険者同士、または冒険者と傭兵などで言い争いになるケースは珍しくない。

基本的に先に倒した方が権利を有するので、今回はヒメ達に権利がある。

だが、ヒメ達は連絡手段を持っておらず、ヒメ達がエレントに行っている間に、セリシア達が魔具を使い先に街と連絡を取ったら、セリシア達に権利が移るのだ。

後でヒメ達が文句を言っても、証拠が無い以上（犯罪者の意見は基

本的に通らない）後の祭りになるだろう。かといって、草麻が残りヒメがエレントに行くのも危険だ。何せ、二人が草麻を殺す可能性だってあるのだから。そうなったら、死人に口なし。どうする事も出来ない。

ならば、どうするか。

ヒメとセリシアは同じ解決案を考えている。それは、こういうケースで最もポピュラーな解決法、いわゆる達成金分担方と呼ばれる方法だ。文字通り、依頼料を分担するのだが、この方法には一つだけ問題があるのが欠点だった。即ち、

「配分はどうするのじゃ？」

達成金の配分割合である。

過去、割合に納得出来ずに両者が争いになったケースは山ほどあるが、これが一番ベターな解決方である事も全旅人の共通認識だった。

「そうね。ここはファイフティーフティでいいんじゃない」

「馬鹿を申すでない。八・二じゃ」

「随分業突く張りなセリフね。5・5よ」

「何もとらんのに、よう言うわ。八・二じゃ」

「連絡というのも、重要な事でしょ。5・5よ」

バチバチと火花が散る。

ヒメとしては、無一文な今出来る限りせびるのは至極当然。むしろ九・一でいきたいとすら思っている。

一方のセリシアとしては、正直全額渡しても問題は無い。

先に言った通りこの依頼はツイであり、準二級の依頼としては格安といえる。貯蓄も十分にある以上今回の依頼料を渡しても問題は

無いのだが、これで、準二級冒険者のセリシア・エークリルは全額渡したという風評が立つのはいただけない。舐められるのは、我慢ならないのだ。それに、準二級冒険者になる前の、あの頃の血がふつふつと滾ってきた。

「4・5・5・5」

「ふん、駄目じゃな。せめて、七・三じゃ」

「へー、良く言ったわね。4・6。これ以上はまけないわ」

「六・五・三・五」

「4・6」

「七・三」

もはや、それは交渉というよりは意地の張り合いになり始めている。すわ、戦闘勃発かという時に、とうとう今まで黙っていたクロスが動いた。

「0・10でいいよ」

それは鶴の一声だった。

ヒメは信じられないと顔に出し、セリシアは文句を言うどころか、むしろ諦観していた。それは、クロスとセリシアの付き合いの長さを表していた。クロスはおもむろに草麻とヒメに向き直ると、カット目を見開いた。

「その代わり、イズミ君の短剣を貸して下さい!!」

クロスの眼光を受け、無駄に眼鏡が光る。

紅蓮の業火すらその背に負うクロスは、正しく鍛冶師の生き様を体現し、尋常では無いプレッシャーを相手に与える。対象者が一般人ならその威圧だけで気を飛ばしてもおかしくは無い。正しく準二級

冒険者の迫力がそこにはあった。クロスの鋭い視線にヒメは引き、もとい若干怯みながらクロスを見返す。

「……条件が良すぎる。まさかお主、草麻の短剣を盗むつもりではあるまいな」

「まあ、そう取られてもしようがありませんけどね。さっき言った様に僕の本職は鍛冶師です。鍛冶師の誇りに懸けて人の武器を盗む事はしません」

心外だとクロスは真っ直ぐにヒメを見返した。

端正な顔はより引き締まり、先程までとは別人の様だった。

「イズミ君が持つ短剣は僕も見ただ事が無い位に珍しい代物なんですよ。正直、僕にとって今回の依頼料よりも短剣を観察出来る方がよっぽど価値がある」

「……………草麻。どうする？」

ヒメはクロスから視線を外さずに草麻に声を飛ばした。

契約を結んでいるとはいえ、ヒメに草麻の武器をどうこうする権限はないし、したくも無かった。依頼料全額は確かに美味しい話だが、草麻の半身と対等かと言われれば、否としか言えない。草麻は後帯に差した鎧通しを握る。そこには確かな存在感があった。

「駄目っすね。この刀は俺の師匠から渡された武器。それを易々と初見の人間に渡しては師匠に顔向け出来ません。全額というのは魅力的ですけどね、それ以上にこいつが大事なんですよ」

草麻の言葉には、はつきりとした拒絶があった。

草麻もまた武人を目指す青年だ。信用ならぬ相手に己の一端を渡す訳にはいかない。クロスは草麻の確かな意思を感じながらも、強い視線は崩さなかった。

「……そこを何とかしてくれないかい。イズミ君が僕を信用出来ないのは判る。それなら、一緒にエレントに行つて僕の工房に着いてからでもいい。勿論、協会の名の下に依頼料も全額支払う。どうか、お願いします」

クロスは頭を下げる。

己の延髄が見える程に下げられた頭は、彼の誠意が伝わってくるようだ。何よりも準二級冒険者が見ず知らずの相手にここまで哀願するとは、驚きを超えて感心してしまう。

クロスを長年見て来たセリシアには判る。

普段はともすれば意思の弱い男に見られがちの彼だが、その芯は情熱という炎を常に燃やしている事を。そんな彼だからこそ、クロスは準二級まで伸し上がったのだ。ならば、自分は応援するしかないではないか。セリシアは両腰に下げた双剣を握る。クロスが鍛え上げた相棒だった。

「なあ、イズミと言ったな。こいつはこう見えても鍛冶師として本気なんだ。もし、あんたが信じれないと言つたら私の剣と交換でも良い。受け入れてくれないか？」

その言葉に躊躇いは無い。

クロスの鍛えた武器のお蔭で、何度も命を助けられた。そんな彼がまた一步ステージを上がるうとしているのを傍で見ているだけでは居られなかった。そんな彼女の言葉を聞き、草麻はにっこりと笑った。それは、十七歳の青年らしい笑みだった。

「いいですよ」

それは即答に近い。

完全にシンキングタイムゼロ。条件反射の域だ。草麻の言葉に一同が目を開く。先程とは百八十度違う態度はもはや別人だろう。驚いているのは、クロスだけでは無い、セリシアも何よりもヒメも驚愕していた。

ずっと見て来たヒメには判る。

草麻がどれ程富田六合流を大切に思っているか、そうでなくてはここまで毎日自分の時間を修練に当てたりはしないだろう。そんな男がいきなり師匠から貰った刀を初見の相手に貸すというのは異常だった。

「え、本当かい。ありがたいんだけどさ、何で急に」

戸惑うセリシアの声は皆の総意だったろう。

ヒメもクロスもまた頷いていた。それを知ってか知らずか、草麻はあっけらかんと、さも当然の様に言った。煩惱濡れの答えを。

「そりゃあ、エークリルさんみたいな美人に頼まれて否っていう奴はおらんでしょうよ、普通」

「え、とそれだけなのかい」

「それだけって、美女の頼みってだけで十分だと思いますけどね。なんなら依頼料とか少なくしても良いんで、今度一緒に食事とかして下さいよ」

「……あ、ああ」

戸惑うセリシアを尻目に、草麻は鞘ごと鎧通しを後帯から引き抜い

た。

はいとばかりに出された鎧通しを見て、クロスは逡巡する様に草麻とヒメを見た。草麻はニコニコとヒメはむっつりと黙り込んでいる。

対照的な二人を見ながら、クロスはおそろおそろ鎧通しに手を伸ばした。

先程までとのギャップと戦人が武器を簡単に手放す行為に、基本的に真面目なクロスは戸惑ってさえた。やがて、クロスが鎧通しに触れるかという瞬間、彼の視界から鎧通しが消えた。

「え？」

ぽかんとしたクロスの眼前には憤然としたヒメが居る。

彼女の蹴撃は草麻を容易く吹き飛ばしていた。だが、ヒメは納まらぬとばかりに草麻に近づくと、足を思いっきり振り上げた。

「この、バカ者が！！そうやすやすと剣士の魂を渡すでない！！というか、師匠はどうしたんじゃ師匠は！なによりも、依頼料を下げるでない！このバカ者が！！」

ストンピング、ストンピング、ストンピング。

体重が無いヒメながら、その高速の連打は侮れるものではない。荒ぶる攻撃に意識が飛ぶ前に彼は必死に抵抗する。

「いや、俺剣士じゃねえし！静流はバカだからどうでもいいし！美女と食事出来るんなら多少は目を瞑るだろ！」

「普通は瞑らんわ！！そもそも、お主は僕の従者なんじゃから女に眼をやる暇も無いわ！」

「横暴だ！雇用条件改正を要求する！！」

「却下じゃ！！」

「酷っ！」

幼女に踏まれる青年を見ながら、クロスは手を差し出した体勢のまま固まっている。

そんな彼を余所に、セリシアはクロスの荷物から連絡用の魔具を取り出すと使用した。赤い光が魔具から溢れ、今頃エレントにあるギルドに連絡がいった事だろう。だが、どんなに急いでも後五時間は掛る。その間、どうしようかとセリシアはぼけっと空を眺めた。

「それでは、盗賊団討伐の依頼料全額と引き換えに草麻の刀を診せる。条件はこれで良いな」

「ええ。盗賊団の引き渡し等終わり次第、依頼料を渡すよ」

「判った。しかし、よいのか。草麻の刀を観てからこんな物かと言われても、依頼料は返さぬぞ」

「勿論だよ。イズミ君の武器がどんな物であれ、約束を反故にすることないよ。それ以前に、盗賊を倒したのは僕達じゃないしね。ある意味これは君達に対する正当な報酬だよ」

「まあ、そう言ってくれと助かるかな」

ヒメが腕を組みながらやれやれと疲労感たっぷり言葉に零す。

盗賊達の襲撃からいろいろあったので、彼女の反応は当然と言えた。セリシアはクロスとヒメの会話が一段落ついたところで、ふとした疑問を口にした。

「それより、サクラ。イズミは大丈夫なのかい」

ヒメの隣に居る箒の草麻の姿は消えていた。

セリシアの言葉にヒメは鼻息荒げた。明らかな怒気が彼女の小さい体から発せられている。

「ふん、あれだけ元気に呻けるんじゃ、大丈夫じゃよ」

「ま、あんたがそう言うんならいいけどね」

セリシアの言葉に反応する様に突然ヒメの背後から怒声が上がった。

「平気な訳あるか!」

土塗れになった草麻の声だった。

強烈なストンピングの後に、ヒメの魔術によって草麻は埋められたのだった。そこから魔力の補助があったとはいえ、筋力のみで這い出た草麻は尋常では無い。

「全く。普通、従者を簡単に埋めるか?」

「主人の前で鼻の下を伸ばす従者には丁度よいじゃろう。むしろ、殺されなかっただけ感謝すべきじゃ」

「判った。今度からヒメの居ない所でする」

「根本的に間違つとるわ！」

ヒメ必殺のグーパンチ。

腰の入った拳は綺麗に草麻の顎を捕えると、容易く草麻の意識を飛ばす。あれ、デジャブと思ったのと、どさりと倒れのは同じタイミングだった。

「ていうかさ、あんたらって何なの？冒険者？」

二人の寸劇を呆れた様に見た後、セリシアは口を開く。

彼女の疑問は尤もと言えた。亜人の少女にその従者と言う人族の青年。その組み合わせだけでも珍しいのに、盗賊団を容易く撃破し、準二級という高位冒険者にもたじろがない実力。

そのくせ、尋常でない量の荷物を持っている。

普通盗賊団を蹴散らせる程の力を持つ旅人なら、間違いなく収納の魔具は持っているのが普通だ。確かに値は張るがそれに勝る便利さがある。ここまでの実力を持ちながら、魔具を持たないのは不可解と言えた。

「儂等は」「ええ。僕は未知を探求する冒険者です。ここで会ったのも何かの縁。これから、どうですか熱い一夜でも」

「話が進まんじやろうが！」

言葉を被され、無駄に求愛する草麻に堪らずヒメが突っ込みをいれた。

脳天に踵落としを喰らった草麻は、ごろごろと地面をのたうち回り地面に喰われた。ぱっくりと。

「さて、バカは静かになった事じゃし質問に答えようか。先ず、儂等は冒険者ではない。エレントで登録出来ればとは思っとるかの」

「じゃあ、君達はそれ程の実力を持ちながら冒険者では無いのかい」

「そうじゃな。それより協会の者達はどれ位で来そうじゃ」

「そうだねえ。さっき連絡したばかりだから、早くて五時間位かな」

「ふむ。そうか。なら、儂等は先にエレントに行っておる。冒険者協会で待つておればよいか」

「別にそれでも大丈夫だけど、僕達と一緒に行かないのかい？」

「行ってもいいのじゃがな、あのバカ者が何をしでかすか判らんからの」

「だけど」

クロスの言葉には若干の疑念が見えた。

このままヒメと草麻が約束を破り、居なくなるのではという疑念だ。無論、依頼料で損する事は無いが、そんなものよりもクロスは草麻の鎧通しを観察する事の方が余程重要だった。それを、ヒメも判ったのだろう。クロスの疑念を払拭する様に言葉を選ぶ。

「……安心せい。儂等も依頼料は惜しいのでな、草麻の刀は必ず見せるわ」

それは単純な口約束だが、クロスはこれ以上何も言わなかった。お願いしたのはこちらである以上、疑いすぎるのは無礼だろう。

「判った。楽しみにしておくよ。それで、協会には僕の名前と渡した依頼の誓約書を見せればいい、何かと利便を図ってくれる筈だ」

「承知した。それじゃあ、また後での」

「また、後で」

「うむ。では草麻！行くぞ！」

ヒメはクロスから視線を外すところもりと盛り上がった地面に声をかけた。

そこには草麻が埋まっており、彼の力なら直ぐに這い出れる固さになっている筈だが、一向に出て来る気配が無い。

やがてヒメの言葉が空しく響き始めた頃、地面から突然手首が出てきた。

肘から先を出し器用に横に動く様子は、首を横に振る動作、拒否と言っている様に見える。そのあからさまなハンドサインを見てヒメはゆっくり地面に手を付くと、優しく魔力を通した。

とたん、大地の密度が急速に上がり、盛り上がった土が次第に萎んで行く。

それは、何かを咀嚼する動きによく似ていた。にやりとヒメが晒うのと、草麻の叫び声が聞こえたのは同時。土から腕が一本だけ伸びた光景はさながら墓標の様だった。

クロスとセリシアは二人並んで彼方を眺めていた。

彼等の視線の先には、巨大な荷物を担ぎ走る青年と、荷物の上に乗る少女が見える。ヒメと草麻だった。走り去る主従を見ながら、セリシアはぼつりと口を開いた。

「変な奴らだったねえ」

「そうだね、僕も驚いた。……………けど」

クロスはセリシアの言葉に同意するが、微かなを疑問を滲ませた。それはふとした違和感、別に気にする程ではないが、喉に小骨が引っ掛かっている様な感触だった。

「けど、何だい？」

「…………いや、タイミングいいなあって」

セリシアの問いに、クロスは若干悩みながら返答する。それは、確信も何も無いただの勘に近いもの。実際、クロスも自身の言葉に疑問を持っている様だった。

「ま、確かにね。でも、私達は冒険者やってるんだ。驚く程の偶然が重なる事は珍しい事じゃないだろ」

セリシアは唇を皮肉気に曲げた。

様々なものに理由を見出そうとするのは、研究者に近い鍛冶師の職業病なのかもしれない。セリシアは軽く言うつ、クロスの肩を叩いた。そんなあくまでも軽い彼女にクロスは苦笑する。考えすぎても仕様がないか。クロスは彼方を見ながら、子供の様に言葉を発した。

「それも、そうか。でも、久しぶりに本気で楽しみだよ。早く来ないかなあ協会の人間」

「まだ、来る訳ないだろ。ゆっくり待つしかないよ」

「だけどさ、それはそれとして待ちきれないんだよ」

「だったら、さっき私が言った様にあいつらと一緒に行けばよかったんだよ。別に確認くらい私一人でも出来るんだから」

「いや、流石にセリシア一人で待たせる訳にはいかないでしょ。危ないし」

「なら、我慢するんだね」

「だけどさ」

会話する二人は、先程のクロスの言葉は既に忘却の彼方に飛んでいた。

出会い2 / だって彼、私の手を握れたんですよ

月が昇り、星が地上を照らす頃、二つの人影が見える。

巨大な荷物を背負う草麻と、その荷物に乗ったヒメだ。草麻の時計の針は九時を差し夜もすっかり更けていた。彼らの眼前には都市をぐるりと囲む巨大な城壁が見える。目的地であるエレントの町だった。その明らかな人工物と人の営みを垣間見て草麻は思わず感嘆の声を上げた。

「着いた」

「うむ。到着したのう」

「着いた」

「そうじゃな」

「着いたー！！」

草麻は両手を上げて、いきなり走り出した。

突然の動きにヒメは荷物から落ちそうになるが、文句を言う事はしなかった。異世界に飛ばされ半年以上。漸く人の輪に加われる事を考えれば、草麻の喜びようは当然だろう。ヒメは微笑を宿しながら、近づくエレントの城門を見ていた。

エレントの城門は予想以上に大きかった。

城壁を見た時から感じていたが、エレントは存外大きな都市らしい。城門の作りは、日本風というより、欧風だが、草麻は依然修学旅行で行った大阪城の城門を思い出していた。

「何用だ」

城門に立つ門兵が、草麻とヒメに声を掛けた。

門兵は門の左右に二人立っており、草麻から見て左側の男が受付役も兼ねているようだ。その門兵は鎧兜を装着し、ハルバートを持っている。いざという時は、傍に見える待機所から同じ武装をした衛兵が出て来るのだらう。ヒメは城門を観察しながら、ゆるりと荷物から降りた。

「エレントに入りたいのじゃが」

その堂に入った言葉は、外見に似つかない威厳さを匂わせる。門兵はややきつい物言い言葉を出した。

「入町証明書、または他に証明出来る物を提示できるか」

威圧的な言葉は、門兵の不信が如実に出ている。

何せ彼の前に居るのは、巨大な荷物を背負う珍しい装束を着た裸足のぼろぼろの青年と十歳前後に見える軽装の少女である。旅人にも冒険者にも見えない出立は門兵を警戒させるには十分すぎた。それをヒメも判っているのだらう、不快感を出す事も無かった。

「悪いが、入町証明書や他に証明出来る物は無い。代わりに、準二級冒険者クロス・ヴェルンデから依頼誓約書を預かっておる。確認してもらえるか」

ヒメの言葉を受け、草麻は門兵に依頼誓約書を見せた。

誓約書には、クロス・ヴェルンデとセリシア・エークリルのサインと魔力の捺印が押してある。この町で戦う事を生業としている者が、両者の名前を知らないのは稀だ。当然、門兵は両者を認知しており、彼らが朝方にエレントから出立したのも知っている。門兵は誓約書に訝しみながらも、預かると門の受付所に持っていった。

「ヒメ。もしかして、ヴェルンデさんとエークリルさんて有名人なのか？」

門兵の視線の反応を見たのだろう。
草麻はヒメに聞いた。

「ま、準二級冒険者はそうはおらんし、しかもその連名だからの。
あ奴の反応は当然じゃろうな」

「ありゃあ。やっぱ、エークリルさんとの食事、約束しとくべきだったなあ」

「ふん！お主の様な粗忽なバカ者相手にもされんわ」

「失礼な。俺ほど実直な奴はそういないだろ」

「どの口が言うのじゃ。どの口が」

「この口じゃ」

わいわいと騒がしげにしていると、門兵が戻って来るのが見えた。
その眼には訝しげな感情が未だに見える。強いていうなら、何でこんな奴等が、だろうか。

「確認が取れた。最後に二人の魔力を確認したい。受付まで願う」

門兵は誓約書を返すと、ヒメと草麻を促した。

誓約書にはヒメと草麻の魔力の捺印もしており、これで本人なのかを照合できる。

「承知した。その間に荷物の現認も願おうか。草麻、荷物を降ろし、あ奴等に渡せ」

「はいよ」

草麻は荷物を降ろし、ヒメの後に続いた。

残された門兵は、ヒメ達が立ち去ったのを見た後にがっかりとした表情を作る。視線の先には巨大な荷物が鎮座していた。一仕事どころか三仕事はある量である。

城壁の外に備えられた受付所は、カウンターと受付待ちをする机とベンチとが数点あるだけの簡素な物だ。何者かに攻められ、破壊されても直ぐに作り直せるようにだろう。

ヒメと草麻はカウンターに付くと、水晶のような手のひら大の球体に手を置かされた。魔力検知器の一つである。やがて、確認が取れたのだろう。受付の男は業務的に言葉を出した。

「はい。確認が取れました。ヒメ・サクラさん、ソウマ・イズミさん兩名の入町を認めます。貴女達は初めてという事ですので、渡した町の決まり事を良く読んで下さい。また、証明術を受けて無いようですので、こちらの魔具の装着をお願いします。これは町から出る際に返却して頂きますので、紛失または破損された場合は弁償して頂きますのでご了承下さい。それでは、エレントの町をお楽しみ下さい」

受付の男から渡された魔具はリストバンドに似ており、身分が証明出来ない者に渡す発信機のような役割を果たす。当然勝手に外すことも壊すことも厳禁だ。ただ、町に滞在中に身分を証明出来る状態になったなら（例えば冒険者や何らかの組織に登録する等）外すことが許される。ヒメは袖がない服なので足首に、草麻は手首にそれぞれ巻いた。

二人が装着したのを確認すると、受付の男は二人を奥の頑強そうな門に促した。

受付所から町に繋がる小さな門だ。受付の男は扉の反対側にいる男に合図を出すと、がちやりと鍵の開く音がした。ぎぎと如何にも重そうな音を出しながら門が開く。開いた先には念願の営みの灯りが見えた。

門の側に立ち、受付の男が軽く会釈をしながら二人を町に誘導する。二人が門を潜る時に、受付の男が初めて柔らかな笑みを見せた。それは、町を誇りに思っている笑みだった。

「それでは、いつてらっしゃいませ」

「やっと終わった」

荷物を担ぎながら、草麻は疲れた様に言葉を零した。

城門に着いてから約一時間。エレントの町の規約の説明等で草麻はすっかり気疲れしていた。久方振りの町であり、初めて目にする欧風な街並みに眼を奪われるが、いまいち草麻はテンションを上げきれない。

やはり深夜に近い時間帯で人もまばらなのも要因の一つだろう。

城壁を見た時の草麻のテンションと今のテンションはまるで別人の様だ。その落差にヒメは笑うと、草麻に声を掛けた。

「草麻。先ずは冒険者協会へ行くぞ。幸い、地図を見る限りそう遠くは無いからの」
「了解」

石畳を歩きながら、草麻は街並みを観察していた。

煉瓦作りの家が立ち並ぶ街路は否応なく地球の中世ヨーロッパの街並みを彷彿とさせる。だが、歩く人達は男女関係なく皆軽装ではあるが武装しており、この世界の日常に潜む危険さが否応なく判る。人類の天敵が人類だけじゃない世界故の光景だった。

やがて十五分程歩いた先に、冒険者協会はあった。

その建物は巨大で十階建ての高層ビル程の高さと広さがある。協会の建物を見て、草麻はヒメの言っていた世界有数の多国籍企業というのはあながち間違いではないと思い知る。同時に、準二級冒険者がどれ程の高位にいるのかも判った気がした。

草麻はやれやれと溜息を零す。

これだけデカイ組織に、ヒメも簡単に登録すると言ってくれたものだ。草麻は頬をかくと苦笑した。それはどこか楽しげであり、困った風にも見えた。

「呆けてないで、行くぞ」

促すヒメに、そういえばと草麻は疑問を口にする。

「ていうかさ、今の時間もやってんの？」

「冒険者協会を舐めるでない。協会は基本的にずっと開いておるわ」「随分と手広いことで」

堂々と協会に入っていくヒメに続く様に、草麻は協会の扉を潜った。広々としたエントランスは明るく、テーブルや観葉植物が置かれている光景は一流ホテルの様な印象を受ける。草麻がイメージしていた薄汚いギルド的な印象とは明らかに違う洗練された雰囲気、ただの高校生だった草麻は気圧されてしまった。

それを感じ取ったのだろう、エントランスにいた者達は草麻に送る視線に嘲笑を込めた。常に武装し冒険者の肩書を持つ彼等にとって、鎧も着ずに大仰な荷物を持ち、少女連れの草麻は余りにも場違いだった。

不躰な視線を感じながらも、ヒメは堂々と総合受付と書かれた看板の下に進んでいく。

その後ろ姿に草麻は敵わないかと、苦笑してしまった。自分の従者ポジションに納得すらしてしまう。

受付には一人の女が座っていた。

薄茶色を基調とした服装の受付嬢は映画等に出て来る探検家の様だ。彼女は優しげな目をしており、栗色の髪を首辺りで纏めた姿は、正に看板娘といったところか。奇妙な草麻とヒメを見ても柔和な表情を崩さない彼女は、朗らかに言った。

「いらつしゃいませ。失礼ですがどのようなご用件でいらつしゃいますか？」

「貴女の終業時間を教えて下さい」

早かったし、速かった。

草麻は、ヒメの背後から受付までの距離を一足で埋めると、瞬時に受付嬢の手まで握っていた。余りの早業に受付嬢は、ぽかんと口を開ける事しか出来ない。

「はい？」

「僕は、草麻・五澄。よければ、お名前聞きたいんですけど」

「え、と。セーミア・フレルです」

「セーミア・フレルさんですね。うん、良い名前ですね。それで、何

時頃仕事終わりますかね。僕、初めてエレント来てよければ食事処とか教えて頂きたいんですけど。時間空いてますっ!？」

奇声を発したかと思ったら、草麻はセーミアの視界から突然消えた。受付の机の陰に隠れてセーミアには見えないが、草麻は股間を抑え悶絶していた。巨大な荷物が小刻みに震える様は、不気味ですらある。ヒメはふんと振り上げた足を下ろすと、改めてセーミアに向き直った。

「僕の従者が無礼をした。すまんの」

「いえ、大丈夫ですよ」

セーミアは多少打ち解けた様に言葉を発する。

その表情は草麻の不躺な行いに怒っている訳では無く、むしろ感心しているようだった。

「でも、受付で手を握られたのは随分久しぶりです。良い従者をお持ちですね」

「褒められておるのか、皮肉を言われておるのか判断に迷うの」

「いえいえ、本心ですよ」

につこりと笑うセーミアに、ヒメは溜息をついた。

力が無ければ、冒険者協会で夜の受付等やってられんか。

「改めて、ご用件をお聞きしてよろしいでしょうか？」

「終業時間を」「しつこいわ」

復活した草麻をヒメはもう一度蹴った。

再度倒れいく草麻を見ながら、セーミアは驚いていた。あの蹴り上げ方を見るに男性相手なら相当な衝撃の筈だが。

「随分早い復活ですね」

「釣鐘隠しは男のマナーですから」

セーミアの言葉に草麻は瞬時に立ち上がると微笑んだ。

一応古流武術の継承者である草麻は、鞆丸を吊り上げる骨掛けを当然の様に使える。先程のヒメの打撃もぎりぎり引き上げるのが間に合っていたのだ。

「で、草麻よ。死にたいか」

草麻の背後から地鳴りの様な声が聞こえる。

草麻はセーミアから名残惜しげに視線を逸らすと、すすと脇へどいた。悲しい従者根性だった。

「ふう。それで儂等の用件じゃが、これを確認して欲しい」

ヒメは草麻の荷物から誓約書を取り出すとセーミアに渡した。

セーミアは受け取り、誓約書の内容を見ると一瞬視線を厳しいものに変える。そこには予想しない名前が記載されていた。セーミアは誓約書からヒメに視線を戻すと、柔らかに言った。

「畏まりました。それでは、確認に致しますのでこちらに手を翳して下さい」

セーミアは机から魔力検知器である球体を取り出す。

ヒメと草麻はもう慣れたもので、城門でやった様に魔具に手を置いた。やがて、結果が出たのだろう。セーミアはにこりと微笑むと、誓約書をヒメに返した。

「確認が取れました。相手の方は何時参りますか？」

「おそらくは明日の昼前には到着する筈じゃ。それで儂等はまだ宿を取っておらんなのでな、宿の紹介もして欲しいのじゃが」

「畏まりました。少々お待ち下さいね。それで、お部屋はダブルでよろしいでしょうか？」

「なっ」

セーミアのあからさまな問い掛けにヒメは思わず咽せると、セーミアにきつい視線を送る。だが、羞恥が含まれた視線ではセーミアの微笑を消すことは出来なかった。ヒメは伺う様に草麻に視線を送ると、小さく声を出す。

「草麻。どうするか、儂はまあどちらでもいいんじやが、お主がダブルが良いと言うなら、ダブルでも構わんぞ」

ヒメの言葉を聞いて、草麻は若干考えるそぶりを見ると、軽く言った。

「ダブルの方が安いんすよね。俺達あんまり金無いんで、安い方でお願ひします」

余りにも率直な草麻の言葉に、ヒメは憮然とした。

確かに今の所持金は盗賊団達が落とし、拾った物だけだが、一宿代位なら問題なく払える金額である。ヒメは草麻を睨むが、草麻の態度は変わらず平常通りだ。セーミアは二人を見ながらあらあらと若干楽しそうに口元を緩める。ヒメは唇を尖らせ、セーミアに言った。

「そうじゃな。安いからの。ダブルで頼む」

「畏まりました。それでは、こちらのお部屋は如何でしょうか」

セーミアは薄い透明な板に魔力を通し操作すると、ヒメに見せる。透明だった板は次第に色が付き文字が浮かぶと、ホテルの詳細が浮かび上がっていた。ヒメはそれを吟味すると頷いた。やはり、憮然と。

「判った。これで良い」

「畏まりました。それでは、今からご予約をお取り致します。もし、キャンセルされる場合は、キャンセル料が掛る場合がありますので、ご御了承下さいね」

「ふん、判つとるわ。それより、相手が儂等より早く来た場合は言伝も頼む。ホテルの部屋番号も教えて構わん」

「承知しました」

セーミアはやはりにこりと微笑みながらヒメの言葉を聞いた。

「草麻。行くぞー!!」

「うえ、俺、フレルさんの終業時間聞いて無いんだけど」

「バカ者！お主の様な間抜けに教える訳ないじゃろうが！」

「酷っ！」

さっさと歩くヒメに、草麻も慌てて走り出した。その後ろ姿に一つ声が掛る。

「因みに、私の終業時間は五時ですよ」

セーミアの声だ。

「マジですか！それじゃ、その時間にまた来ます」

「バカ者！お主の就業時間は年中無休じゃ！遊んどる時間等ないわ！」

「マジでか！？」

慌ただしく去っていく二人を見て、セーミアは思わず楽しげに笑った。

受付にあるまじき態度ではあるが、偶にはいいだろう。明日は休日で購入物の予定だったが変更である。明日は此处に居よう。いや、ホテルのロビーでもいいかもしれない。セーミアは仕事にも関わらず笑っていた。と、そこに野太い声が掛る。

「セーミア。珍しいじゃねえか、お前が新顔にそこまで気を許すなんて」

男はエレント冒険者協会に於いて古参の一人だ。

彼が見る限り、セーミアが新参者にあそこまで気易く話すのは初めての事だった。本来の彼女は柔和ながら極めて事務的に受付をする。間違っても、ヒメに言った様にからかいに近い言葉を発する事はないし、あまつさえプライベートな事を言う筈もない。そんな彼女がまずお目に掛れない対応をしたのだ、古株の一人である彼が気にならない訳が無かった。

「うーん。確かにそうですね。でも、実際気になっちゃたんですよ」

「ほーう」

「だって彼、私の手を握れたんですよ」

言って、セーミアは手を握り締めた。

三級冒険者並みの戦闘力を持つ彼女はエレントの協会内では有名である。即ち、鉄壁の受付嬢として。実力を勘違いした新参冒険者達が、柔らかな彼女に何度叩きのめされたか判らない。それが、崩されたのだ。彼女が気に掛けるのは当然だった。

「成る程な。ありゃあ、お前さんが握らせた訳じゃなかったのか。だが、それだけじゃ、ねえんだろ」

にやりと試す様に笑う男を見て、セーミアは溜息をついた。

変な所で鋭いのは、この男が優れているのか、自分が未熟なだけなのだろうか。セーミアはぼそりと、男にだけ聞こえる様に言った。

「明日には貴方の親友達が戻ります」

セーミアの呟きに、男は嚙猛に唇を歪めた。

楽しげに、納得したように男は無精髭を撫でると、セーミアに言った。

「へーえ。成る程な」

男の瞳にはギラついたモノが宿っている。

クロスとセリシアが戻って来るか。ふふと男は愉快そうに笑みを零す。男は踵を返すと背後のセーミアに言葉を投げた。

「ありがとよ、セーミア。あとすまねえな、受けた依頼はキャンセルだ」

悠然と歩く男の姿を見ながら、セーミアも言った。

「畏まりました」

受付としての責務を果たしながら、セーミアは思う。

やはり、自分が未熟なだけだ。興味という感情だけで客の情報を漏らすのだから。だが、後悔は無かった。何故なら自分は冒険者。好奇心だけで危険を冒す生物なのだから。

協会から出た男は夜空を見上げた。

満点の星空が見える。明日からは詰まらない依頼を完遂する予定だったが、思いの外楽しい事が起こりそうだ。戦闘力のみで準二級冒険者に上り詰めた男、デイトリヒ・ベクターは野獣の笑みを唇に浮かべていた。

閑話 1 / 扉一枚

「お疲れ、お疲れ」

どずんと草麻はホテルの一室に備えられたベッドに腰を掛けた。

セーミアに紹介されたホテルは冒険者御用達らしく、草麻の巨大な荷物も預けても嫌な顔一つされなかった。

ホテルの作りや部屋の内装は地球にあるビジネスホテルを彷彿とさせる。

草麻が勝手に考えていたベッドだけが置いてある部屋では無く、トイレや風呂が共同と言う訳では無い。部屋にはきちんと三点ユニットバスに近い物が備え付けられていた。使い方に差異はあれど、電気の代わりに魔力で様々な物を補っているのだろう。現代を生きてきた草麻だが、ホテルに不満は無い。

部屋にはシャワーの音が響いている。

草麻より先にヒメが一日の疲れを癒していた。草麻は後帯に差してある鎧通しを抜くと眼前に持って来た。視線の先には刀身に映る自身の瞳。日本人らしい黒に茶色を混ぜた瞳は別段何時もと変わらない様に見えた。部屋には草麻一人。変わらず、シャワー音だけが響いていた。

「出たぞ」

銀髪をタオルで拭きながらヒメはシャワー室から出てきた。

艶やかに髪を濡らし、ほっこりと体から湯気が立ち上る姿はすつきりとした様に見える。草麻はヒメの言葉に遅れる様にして、鎧通しを鞘に戻した。

「了解。じゃ、俺も入るわ」

立ち上がり鎧通しをベッドわきの机に乗せると、草麻は服を脱ぎだした。

その余りにも遠慮の無い様に、ヒメ若干顔を赤くする。草麻の裸はもはや何度も見ているが、場所が変われば気分も変わる物だ。

「バカ者。淑女の前で裸になる奴があるか！」

「いや、今更何言ってんだ。俺の裸なんて見飽きてるだろ」

だが、その機微を判らないのが草麻だった。

草麻はさつさと裸になるとシャワー室に入って行った。ヒメは不満気に頬を膨らませると、バカ者がと文句を呟いた。だいたい人がシヤワーを浴びとるのに、刀ばかり見ておって。バカ者が。ぶつぶと絶え間なく口から文句が飛び出る。

「刀か」

ヒメは机に置かれた鎧通しを抜くと眼前に持つて行く。

視線の先には金の瞳が映っていた。何の変哲も無い日本刀が、やけに眩しく見えた。

「便利だねえ」

温かいお湯を浴びながら、草麻は呟いた。

今の今まで体を洗うとしたら水浴びしかなかったのだ。それが今はノズルを捻るだけでお湯が出る。素材が判らない壁や、お湯を出す原理は判らないが、日本に帰って来た気すらする。

不便なのが逆に救いだっただのか。

日本という故郷を感じさせない環境だからこそ、昔を思い出さずに済んでいた。明らかな人の営み。町を照らす街灯が、鼻孔を擽る料理の匂いが、談笑する人達が、もう帰れない故郷を否が応にも思い出させた。自分は独りなのだと、戻れないのだと強烈に脳裏を叩いていた。今だっと思ってしまふ。このドアを開けたらそこは日本では無いのか。そんな錯覚さえ感じてしまふ。

だが、自身の拳足が覚えている。

盗賊に襲われた。彼等は本気で命を奪いに来たのだ。愕然とした実力差があり、挑戦する様なシルフィアとは違ふ。確かな命のやり取り。鎧通しを攻撃に使わなかったのは、心がぶれると踏んだからだ。殺人に躊躇いを憶えたからだ。グレートグリーンで沢山の命を奪ってきたが、同族殺しはやはり違ふ。

そんな事を悩む必要も無かったあの頃が、
本当に懐かしい。本当に羨ましい。本当に、かえ

「便利だよ、なあ」

言える訳が無かった。

考える事すらしなくなかった。自分は親友の願いを成就させるまでは、願う事すら出来ないのだ。思考が攪拌され考えが纏まらない。今、自分は何に対して悩んでいるのだろう。この世界の事か、殺人の事か、独りである現実か、解らない、判らない、わからない。自分は何をしたいんだろう。何をすればいいんだろう。

頭上から流れるお湯が強く草麻を打っていた。

水滴が頬を流れ、シャワー音が響く。足元を見ると水滴が無数に零れ落ちていた。ぼたりとぼたりと水滴が落ちていた。本当、なんて

無様だ。

「草麻」

不意に扉の外から声が聞こえた。

聞こえたが、認識が間に合わない。誰が、何故、声をかけているのだろうか。

「草麻、聞こえておるか」

間があり、漸く草麻は声の主を漸く認識した。

「……………ん、ああ、ヒメか。どうした？」

その声は若干掠れていた。

普通なら気付きもしない差異だったが、草麻と半年以上共に過ごしているヒメに判らない筈が無かった。何か変だと引っ掛かるものがあり、声を掛けたがどうやら正解だったらしい。だが、具体的にどうというものがあつた訳ではないのだ。

「いや、どうしたというか……………」

ヒメはくちごもると沈黙した。

元々、こうして他人と深く関わり合いになつた事が初めてなのだ。上手く悩みを聞き出す等出来る筈も無い。もじもじと両手を不器用に絡ませるだけで、言葉は出なかった。それでも何か伝えなければいけないと懸命に言葉を絞り出した。

「……………お主は人を殺した事はあるか」

あ、と口を押させるも遅すぎた。

自分は何を言っているのか。これではまるで詰問に近い。確かに鎧通しを眺める草麻を見て、戦いに関して思う所があったのは事実。だが、もう少し気の利いた言葉を出せなかったのか。大体、草麻が人を殺した事が無いと言うのは、彼の生活を聞いて判っていたことだろう。それなのに、自分は直接聞いてしまった。何て馬鹿だ。

「いや、すま」

「無い。けど、有る。だから、心配しなくていい」

謝罪に被され、訥々と語る言葉は罅割れているようだった。それでいて、確かな拒絶を感じる。扉一枚が草麻の心の壁に見えた。これが違うタイミングならまだ良かったのだろうが、今の、郷愁の念に浸っている草麻に現実を見せるのは余りにも早すぎた。

「ヒメ、先に寝てろよ。俺はもう少しシャワー浴びてるからさ」

言葉の端から苛立ちが見える。

聞くタイミングも悪かった、聞いた言葉も拙かった。草麻は限界だった。ヒメにもそれが伝わったのだろう。ヒメは俯くことしか出来なかった。

当たり前の事だった。

草麻は未だ十七歳の青年でしかないのだ。今まで生きるだけで精一杯で、二人だけという特殊な環境下だからこそ草麻は普通でいられたのだ。だが、殺人を許容する現実と対峙し、人の営みに触れた草麻では、今の現状に耐え切れない。むしろ、よくここまで持ったとすら思えた。それは偉大な兄の威光に我慢し続けて来た過去が、そうさせたのかも知れなかった。

「そう、か」

ヒメは何も言えなかった。

彼女は【主従契約】で草麻を縛っている。それが、彼女が草麻に踏み込む事を躊躇わさせていた。草麻に拒絶されるのが怖かった。助けられてばかりで、何も返せていない自分が悔しかった。

シャワーを浴びてしっかりと体を拭いたのに、足に水滴が付いている。

ぽたりぽたりと水滴が増えていく。本当に何て無様だ。シャワーの音だけが、狭い部屋を満たしていた。

突然、

「がんばれ」

鈴の音の様な可憐な声が聞こえた。
ヒメの声だった。彼女はたまに聞こえていた歌を口ずさんでいる。

「負けんな」

それは、草麻の根底の一つだった。
いつだって、この歌を歌って来た。苦しくて、辛くて、泣きたい時は、何時だって口ずさんだ。それを、今親友が歌っている。何か無性に嬉しかった。

「力の限り生きてやれ」

とくんと草麻の内側に温かさが宿る。

それは、ヒメの魔力だ。闇夜に浮かぶ月光の様な柔らかい暖かさが草麻の体を包んでいる。独りでは決して感じれない温もりだ。

草麻はシャワーと止めた。

部屋に静寂が訪れ、互いにヒメと草麻の存在を強く意識させる。間には薄い扉一枚だけだ。ヒメが口を開く。

「草麻。儂はお主の主人じゃ。お主の責は全て儂が背負うてやる。じゃから、安心せい」

それは、宣誓だった。

与えられてばかりの自分が返せる精一杯の決意だった。草麻からの返答は無く、部屋にまたシャワー音が響いた。ヒメは溜息を深く吐いた。

「儂は先に寝ておる。おやすみ」

草麻からの返答は無かった。

ベッドに入り布団を被る。冷たいそれは、ヒメの心境を表していた。久しぶりの柔らかいベッドなのに、気持ちよく寝れる気がしない。

ヒメはもう一度溜息を吐いた。

それと同じくして、とくんとヒメの内側に温かさが宿る。

それは草麻の魔力だ。青空に光る太陽の様な朗らかな暖かさがヒメの体を包み込む。それが、草麻の返答だった。魔力の受け渡しという【主従契約】ならではの常識外れは独りでは決して行えない。ヒメは微笑むと、文句を口にした。

「バカ者が」

今日は良く眠れそうだ。

「ん、う」

微睡みの中から浮上する。

自分の体は緩やかな網に掛った様に動かない。いや、動きたくない。微かな束縛感はあるが、それ以上に暖かった。ぷかりぷかりと海月の様に波間を優しく漂う感じ。ずっとそこに在りたい様な、浮遊しているのか下降しているのか判らない。ただ、緩やかだった。

「ん」

眼を開けた。

窓からは太陽の光が降り注いでいる。光量から未だ朝になったばかりだろう。起きるにはいいタイミングだった。目を擦ろうとして、気付いた。腕が動かない。動かない事は無いのだが、後から誰かが自分を抱きしめているせいで、腕が不自由になっている。

「ん？」

駄目だ、意識が上手く覚醒しない。

自分はベッドで寝ていた。部屋には二人で泊まっていて、ベッドは一つしかない。ならば、ベッドには二人居る事になる。

「んん？」

血液が急速に頬に集まるのを感じた。

自分は後から誰かに抱きしめられている。誰か？首を動かして背後

を覗く。黒髪を持ち、見ようによっては端正に見える顔があった。従者の五澄草麻だった。彼は穏やかな表情でぐっすりと寝ていた。今まで本当に疲れていたのだろう、初めて見る本当に安らいだ顔だった。そのあどけない寝顔はどこにでもいる十七歳の青年だった。

「さむ」

呟き、青年は空いた空間を埋める様に密着した。

無意識の行動ではあるが、身体を硬直させるには十分過ぎた。結局、起きるのは諦めた。これ以上動いたら、気配に敏感な青年は直ぐに意識を覚醒させるだろう。彼の寝起きの良さは半端ではないのだ。

「疲れておるから、しょうがないの」

呟き、前に回された腕を握る様に微睡の中に戻る。

後には、穏やかに眠る二人の表情があった。

「んあ、エークリルさあん」

「…………草麻。おはよう。で、お主は何をしておる」

「痛っ！…………ああ、ヒメか。おはようさん」

「で、お主は何をしておる」

「何って普通に寝てただけだろ」

「主人の寝所に勝手入る従者がおるか！！このバカ者！！」

「痛っっ！！いや、何を今更言ってんだよ」

「今更も何もあるか、このバカ者！！だいたい、他の女を出す奴があるか！！」

「いや、知らねえよ！ていうか、ヒメ。痛い、めっちゃ痛い！」

「うるさい！このバカ者が！！」

エレント1 / ご案内しますね

翌朝、草麻とヒメがチェックアウトしにホテルのロビーに行くと、突然声が掛けられた。

「あ、おはようございます」

朗らかな挨拶はつい最近、聞いた事がある。

少なくともホテルの人間では無いが、誰だろうか。ヒメは怪訝な顔をして声の方に顔を向ける。そこには、にこにこ愛想よく笑うセーミア・フレルと、彼女に挨拶をする草麻が見えた。何時の間にはもう思わない。

セーミアは受付時の服装では無く簡素な鎧を着ていた。

胸当てと腰巻、それに大腿部を護るキュロツスを着ている。全体的に野暮ったい印象を与えるが、彼女の雰囲気は軽やかに見せていた。

「何の样じゃ」

不満さを隠すことなくヒメはセーミアに問う。

ヒメの眼光を受けながらも、セーミアは笑みを崩すことは無かった。

「いえ、ソウマさんが来てくれなかったので、押しかけて見ました」
「マジですか！」

セーミアの言葉でテンションを上げる草麻に、ヒメは冷たい視線を投げかける。

無論、草麻は気にしない。既に頭の中はセーミアと二人で食事に行く約束を取り付けていた。

「嘘に決まっておるうが」

ぼそりとヒメが言う。

「はい、嘘です」

セーミアはニコリと応えた。

一遍の曇りも無い笑顔が眩しく、草麻はがっくりと肩を落とすと先程と同じ言葉を呟いた。

「マジ、ですか」

頂垂れる草麻を尻目に、ヒメは改めてセーミアに視線を向ける。

「で、本気で何の用じゃ」

「いえ、お二人はエレントが初めてとの事なんで、水先案内人でもしてみようかなと思ひまして」

「それで、お主にメリットは？」

「クロスさんとセリシアさんが目に懸けるお二人と関係が持てます。実は受付って専属受付というのがありまして、優秀な冒険者の仲介をすればする程評価が上がるんですよ」

「成る程の」

つまり、青田買いの様なものだろう。

ここで早い内から友好的な関係を持てば、後々返って来ると。

「しかし、随分と買い被られたものじゃな」

「それだけ、クロスさんとセリシアさんの力は大きいと言う事ですよ」

「儂等というよりもクロス達の方が信じられるか。随分とはつきり言うんじゃな」

「勿論ですよ。だって、私は正直者で通ってますからね」

「ふん、何処かじゃ」

打算的ではあるが、セーミアの提案は望むところである。

実際、町の案内は冒険者協会に着いたらセリシアがクロスに頼もうと思っていたのだ。現状、金を得る手段が獣の牙や爪等売る事しかないのだが、売れる場所が判らないし、相場すら知らない。これでは対等な取引が出来る訳が無い。

だが冒険者協会の受付が一緒なら、安く買い叩かれる事も無いだろう。

ヒメはふむと思案すると、セーミアに言った。

「まずは協会に行く。クロス達から依頼金を受け取った後に町を案内して貰うが、良いか」

「ええ、勿論です」

セーミアは頷いた。

何時の間にか、チェックアウトを終えた草麻が巨大な荷物を背負って立っていた。その顔はウキウキと弾んでいる。セーミアの様な美人と町を歩けるのが楽しみと表情が語っていた。ヒメはふんと鼻を鳴らす。

「行くぞ」

それに、草麻とセーミアが続いた。

「はいよー」

「はい」

ホテルを出ると、太陽が町を照らしていた。

時刻は十時を少し回った所だが、今日は快晴。強い日差しが降り注いでいた。町は活気に溢れており、草麻の眼を楽しませた。何せ、金髪碧眼はもとより、赤、青、緑と様々な髪の色の人々が歩いているのだ。また、頭髮から覗いてヒメの様な獣耳が出ている人も見受けられる。正にファンタジー。改めて異世界に來たんだなあと草麻は感心していた。一晚寝た事で多少頭がすっきりしたのだろう。現状を楽しむだけの余裕が草麻に生まれていた。

「草麻、あまりキョロキョロするでない。田舎者に見られるぞ」

「いや実際田舎者だしなあ。これだけデカい都市なんだからキョロキョロするって」

「その割に視線が女ばかりに向いとる様じゃがな」

「何言ってるんだよ。ヒメ、当たり前だろ」

草麻はさも当然と胸を張るが、ヒメが納得する筈もない。

「バカ者。お主は儂の従者なのじゃから恥ずかしい真似をするでない」

「男が女性に眼を向けるのは自然の摂理。恥ずかしい事でもなんでもねえよ」

「たわけ。それでは獣と一緒にじゃろうが」

「人間と獣なんて紙一重でしかねえよ」

「したり顔するでないわ！」

わいわいと騒がしい二人を見て、セーミアは口元を綻ばせる。何だか、仲の良い兄妹を見ている様だった。

「ヒメさん、ソウマさん。着きましたよ」

セーミアの言葉に草麻は視線を向けた。

眼前には昨日見た巨大な建物が鎮座している。うーむと草麻は唸った。

「何時の間に」

ヒメは嘆息すると

「お主がふらふらしとるからじゃ」

草麻を蹴った。

冒険者協会の扉を開けると、そこには大勢の人が居た。

深夜帯とは違う、明らかな活気が協会のロビーを支配している。世界有数の企業というのは伊達では無い。事実、昨晚と違い皆が皆自分の事で忙しいのだろう、扉を開けロビーに入る位では視線を集める事は出来なかった。その事に草麻は若干安堵しつつ、セーミアに聞いた。

「フレルさん。エークリルさんが来てるか受付の人に聞けばいいですか？」

「そうですね。ただ、ちょっと今受付が混んでるみたいなので、私
が確認して来ますね」

「あ、いいす」「うむ。頼んだ」

「はい」

ヒメの言葉にセーミアはにつこりと微笑むと、受付の方に走って行
った。

その軽快な後ろ姿に草麻は腕を組んで感動し、何というか、草麻は
癒されていた。ちよつとした人の善意が今更ながら気持ちよかった
というか、セーミアの笑顔にときめいていた。

「いやー、やばいね。俺、マジで冒険者になってフレルさんに専属
してもらおうわ」

「ふん、冒険者になるのは当然じゃが、専属にするかは判らんぞ。
それ以前に、草麻が愛想付かされる方が先じゃて」

「いや、気合を入れて頑張る。んで、フレルさんを専属にする。ヒ
メと言えぞ、異論は認めん」

「はいはい、そうじゃな」

憮然としながらヒメは返答した。

若干気怠る気なのは呆れているからだろう。そんな二人に後から突
然声が掛った。

「おいおい、兄ちゃん。セーミアを専属にするって本気かい」

声の主は鎧を着た威めしい男だった。

男の身長は173cmの草麻より頭一つ分程高い。無精髭を撫でながら、草麻とヒメを舐める様に視線を這わしている。草麻は怪訝な表情を隠す事無く返答した。

「本気っすよ。何か変すか」

くつくつと草麻の言葉に男は笑うと蔑む様に言った。

「兄ちゃん。馬鹿な考えは止めな。そんな馬鹿でかい荷物を持ちながら、セーミアを専属にする？はっはっはっ、坊主にゃあ十年は早いぜ」

成程、男の言い分には一理あった。

巨大な荷物持つ者は、一概には言えないが初心者とされる。何故なら、収納の魔具を持たない者だからだ。熟練した冒険者で収納の魔具を持たない者は皆無に等しい。収納の魔具はある意味、その人物の簡単なバロメーターと言えた。

セーミアと会話してから突然増えた視線が、嘲笑となって草麻を貫く。

ある意味慣れ親しんだ感覚だった。

「しかも、ガキ連れで鎧も何も着けずに協会に来るなんてな。坊主。身の程知らずもいい加減にしとくんだな」

男は草麻に向かって凄むと、殺気を放出した。

魔力を伴った殺気は弱い者にとっては威圧に等しい。事実、草麻もシルフィアの威に一度は屈している。そして、その殺気を止める者は居ない。男にはあのセーミアが何故という、嫉妬心もあるかも

しれない。だが、草麻の格好が冒険者を舐めていると感じられた。その気持ちで周囲の者を同調させていた。

「黙ってねえで、何とか言ったらどうだ。ああ！」

恫喝する様に男は草麻を攻め立てる。

仮に、これが冒険者育成学園の生徒クラスならば、これだけで意識を半分飛ばすには十分だろう。男も草麻が話さないのではなく、話せないと踏んでいる。

男はにやりと厭らしく唇を歪めた。

それを尻目に草麻はヒメに視線を向けると、覚悟を決めた。基本的に面倒事は嫌いだが短気な彼女である、額に青筋が浮かんでいる時点で、一暴れも辞さない決意がいるのだ。草麻は仕方ないと溜息を吐いた。面倒事は嫌いだが暢気な彼の溜息は、存外大きかった。

「フレルさんが来てるんで、もういいですか？」

「ああっ！！」

氣勢を上げる男に、草麻はゆるりと殺気を出した。

その気迫は常人では有り得ない。濃密な気配は恐ろしい程の圧力を有し、ぶつつけられた男は、怯み鼻白むと言葉を無くした。知らず、男は一步後ずさっている。先程までの弱者の雰囲気が一掃され、男の眼前には一匹の獣。獣は口を開け牙を剥いた。膨れ上がった気配に、男は声にならない呻きを口内に宿すと、また一步下がった。

「じゃ、失礼しますね」

その脇を草麻はにこりと通った。

ヒメはふんと胸を張って草麻の後に続く。残るのは冷や汗に塗れた男だけだ。周囲は何事か判らず怪訝な顔を作る者と、嗤う者に分かれた。一人に集中させたつもりだけど、判る奴には判るか。草麻はまた溜息を吐いた。

「お待たせしました」

「大丈夫ですよ。私も今確認が取れた所です」

にこやかにセーミアは言う。

その言葉に、ヒメは惘然とした表情を作ると言った。

「当然の様に嘘を吐く出ないわ。あのムサイ男が草麻に詰め寄つる時にはそこにおつたじやろうが。全く、面倒事を呼び寄せるなら自分で処理位せんか」

「いえ、そんな一人の受付に出来る事なんてたかが知れてますからね。買い被りすぎですよ」

「どうじゃかな」

やんわりとした言葉にヒメは矛を収めた。

試された気もするが、ここで問い詰めてもしようがないと言ったところか。草麻は気にする風でも無く、軽く言った。

「それで、エークリルさん来てました？」

「ええ。三十分程前に到着されて、今第十四会議室で待っているそうです。クロスさんが待ちきれないと、そわそわしてるらしいです」

が」

「むう。やっぱりヴェルンデさんも一緒か。つまらん」

今回の件を考えればクロスが居ない方がおかしいだろう。

ヒメは草麻の言葉に嘆息すると、セーミアに視線を向けた。

「セーミアよ。第十四会議室とは何処じゃ」

「はい、ご案内しますね。と、その前に荷物を預けましょうか」

颯爽と歩くセーミアにヒメと草麻は付いて行った。

クロスとセリシアの名前に、ロビーがざわついていた。

第十四会議室と書かれたプレートが扉に埋め込まれている。

重厚な木で作られた扉は通常の扉よりも高級な物だ。その部屋で待てるのは、それだけでクロスとセリシアの立場が判るようだった。

セーミアが扉をノックする。

「セーミアです。ヒメさんとソウマさんをお連れしました」

「いいよ」

声はクロスのものだ。

セーミアの声に被さる様に言った言葉は、彼の焦燥感を表しているようだった。例えるなら、待望の玩具を待つ子供の様なものだ。

「失礼します」

セーミアが扉開けると、そこは高そうな調度品に彩られた一室だっ

た。

革張りのソファがテーブル挟む様に配置され、壁には絵画まで飾ってある。会議室と言うよりは接待に使う部屋の様にも見えた。

「ソウマ君」

「エークリルさん」

片方はクロスのもの。片方は草麻のものだ。

二人は突然走り出すと、見事にすれ違った。というよりは、草麻が迫るクロスを必死に躲した結果だった。

「あれ？」

「エークリルさん。お久しぶりですね。いやー、本当に来てくれるとは、この五澄草麻、感謝感激です」

「あ、ああ」

虚空を抱きしめるクロスを余所に、草麻はソファに座るセリシアに話し掛けていた。セリシアは草麻の言葉よりも、クロスを躲した技術に眼を見張っているようだ。ふつふつと闘争心が湧く。自分の方が強いだろうが、試してみたかった。

「じゃ、後で食事行きませんか。俺、エレント初めてだから美味しい定食屋とかあったら教えて欲しいんです、よっっ!!」

「話を進めるぞ」

ヒメは草麻を蹴り上げ無理やりソファに押しやると、自分も座った。

クロスは堪えられない様に急いでセリシアの隣に座り直し、セリシアは対面に座るヒメと草麻を見てから、セーミアに視線を向けた。

「私達は良いけどさ、セーミアが居ていいのかい？」

鍛冶師、クロス・ヴェルンデが興味を持った武器。

これだけで、草麻の注目度は上がるだろう。セリシアはセーミアを信頼しているが、情報はそれだけで武器だ。ヒメ達に促すのは当然と言えば当然だった。

「勿論っすよ」

応えたのは草麻だ。

草麻はセーミアに目配せすると、自分の隣に座らせようとしたが、ヒメの眼力でセーミアはヒメの隣に座る事になった。それだけで、二人の力関係が如実に判るようだ。

「ま、あんた等が良いって言うんなら文句は無いよ」

「それじゃあ、早速始めるよ」

クロスは既に用意していたのだろう。

依頼の報奨金と誓約書を机に取り出した。眼鏡の奥の光は爛々と光っていた。

「いやー、すつきりした」

肩に手を置き、草麻が言った。

場所はクロスの工房の前だ。あれから、誓約書を交わしクロスの工

房に移動したのだった。草麻の後帯は鎧通しの代わりにクロスが貸した短剣が差してある。今頃は草麻の鎧通しをクロスがじっくりと観察、調査しているのだろう。草麻の鎧通しを受け取った時のクロスの眼は尋常では無かった。セリシアが「こいつが無茶しない様に私は見張つとくよ」との言葉もまた怖い。今更だが、大丈夫だよなあと草麻は首を傾げた。

「それにしても、結構な値段で売れたのう」

「クロスさんが面倒臭がりましたからね」

ヒメは草麻の背中を見て言った。

草麻の背中にあった荷物は綺麗さっぱり無くなっていた。丁度いいと鍛冶師であるクロスが全て纏めて買ってくれたのだ。獣の爪や牙はともかく、毛皮や岩塩はどうするのだろうかと思つたが、折角買つてくれるのだ。文句は無かった。

お蔭で、現在の所持金は55万7千ギルある。

内訳は依頼報酬が30万・牙や爪等が15万・盗賊達から拾った10万7千である。貨幣価値は日本円と同じと考えていいだろう。

またこの世界の貨幣の種類は大よそ次の様に分類されている。

5万ギル紙幣・1万ギル紙幣・5千ギル紙幣・1千ギル紙幣・500紙幣・100ギル硬貨・50ギル硬貨・10ギル硬貨・5ギル硬貨・1ギル硬貨の十種類だ。

ほくほく顔のヒメに、セーミアは聞いた。

「それで、どうします?」

彼女は飽く迄も水先案内人というスタンスを崩さない様だ。

「そうじゃな。先ずは、食事にするか」

「判りました。何かリクエストとがあります？」

「そうじゃのう。肉系が良いの。折角金も入った事じゃし、多少値が張っても構わん」

「了解です。それでは、ご案内しますね」

「うむ。頼んだ」

先に行く二人を慌てて草麻は追った。

解析専用の眼鏡型魔具をかけクロスは鎧通しを観察していた。

眼鏡を通して観る鎧通しの材質及び構造は、鍛冶師として名を馳せるクロスだが唸る他なかった。先ず、驚いたのは鋼の密度の高さだ。ここまで良質の鋼というのはそう有る物ではない。一体どういう製法をすればここまで鍛え上げる事が出来るのか。さらに、この剣の特徴的な点は、密度の違う鋼を上手く繋ぎ合わせているという事だ。これにより、固さと柔らかさという矛盾を見事に両立させている。

成程と素直に感心した。

剣にしる包丁にしる魔力を通せば、確かに切れ味は簡単に上がる。だが、それを当然と考えるのは鍛冶師としては怠慢だろう。そういう小手先に頼らずとも、鋭さを持たせるのが職人なのだから。そして、この剣はそういう小手先に全く頼ろうとしていない。言うなれば、魔力を使わずに何処まで行けるかという、剣の可能性を追求させた末の代物だ。

クロスは興奮していた。

剣の可能性を追求した存在と魔具という性質を融合させたら一体ど

うなるのか。水と油の様に反発するのか、それとも見た事も無い存在が新たに生み出されるのか。唇が自然に笑みを形作る。ぞくりと膚が泡立った。余りの興奮に上手く感情が制御出来ない。まるで、ランナーズハイだ。精神だけが先走っている。

クロスは荒ぶる精神のまま、柄から目釘を抜き、茎を露出させた。もしこの剣に銘が切つてあるのならここだろう。ここまでの性能を有するこの剣が習作であるとは思えない。同じ鍛冶師として剣から少しでも情報が欲しいと思うのは当然の事だった。

だが、茎に目線を移した所でクロスは固まった。今までの興奮が嘘の様に冷めた。それはまるで突発的な事故だった。冷水をかけられた様に血の気が引き、酸欠になった様に喘いだ。茎には斜めを向いたSの字に重なる様にWという字が刻んである。Wの真ん中にSという翼を広げたドラゴンに見えるそれは、一人の人物が使う紋章に他ならない。

天上の存在である特級冒険者にして生きる伝説。王ですら彼女を従える事は出来ず、国ですら彼女に勝てないとまで言わせた、歩く天災。

「シルフィア・W・エドウィン」

こぼれた呟きは誰のものだったか。

クロスの思考は紋章一つに支配されていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8033w/>

狼浪奇譚

2011年11月20日18時13分発行